

磐越自動車道関係発掘調査報告書

え うち
江内遺跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

磐越自動車道関係発掘調査報告書

え うち
江内遺跡

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

平成9年度に全線開通予定の磐越自動車道は、大平洋側と日本海側を結ぶ一大動脈として、沿線地域を中心とした経済・文化活動に多大な役割りを果たすものと期待されています。

磐越自動車の通過する地域には、旧石器時代から近世にかけての数多くの遺跡が存在しており、道路法線に係わるものについてはこれまでに発掘調査を実施し、多くの貴重な成果を得ています。

今回調査を実施した江内遺跡では、奈良時代から近世の土器・陶磁器などの遺物や、中・近世の溝・掘立柱建物・土坑・井戸などの遺構が検出されています。この中で特に注目されるのは、出土した遺物や遺構の分析を通じて14世紀から近世に至る集落の変遷が明らかにされたことで、阿賀野川流域の新田開発や集落の衰退を考える上で重要な資料を提供しています。

これらの調査成果が、今後の中・近世史研究に資すると共に、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査に際して多大なご協力とご援助を賜りました新津市教育委員会並びに地元の方々、また調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜った日本道路公団新潟建設局・同新潟工事事務所に対し、深甚なる謝意を表します。

平成8年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野 清明

例 言

- 1 本報告は新潟県新津市大字川口字江内に所在する江内遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は磐越自動車道の建設にともない、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
- 2 発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会（以下県教委と略す）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下埋文事業団と略す）に調査を委託し、平成4年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成にかかる作業は平成4～6年度に実施し、埋文事業団調査課がこれにあたった。
- 4 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管している。遺物の注記記号は「エウチ」もしくは「江内」とし、出土地点や層位を併記した。
- 5 遺物番号は土器・陶磁器、土・陶磁・石製品、木製品ごとに通し番号とし、図面図版と写真図版の番号は一致している。
- 6 本文中の註はすべて脚註とした。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 7 本書の記述は藤田豊明（埋文事業団主任調査員）・春日真実（同文化財調査員）・石山精哉（同文化財調査員）・佐藤 恒（同嘱託）がこれにあたった。分担は第Ⅱ章1・2が藤田、第Ⅰ章・第Ⅱ章3・第Ⅲ章・第Ⅳ章1・4・第Ⅴ章が春日、第Ⅳ章2が石山、第Ⅳ章3が佐藤・石山である。ただし、石器の記述・石材の鑑定については高橋保雄・沢田 敦・鈴木俊成、第Ⅱ章3については亀井 功より指導を受けた。出土遺物観察表は土器・陶磁器が春日・佐藤、土・陶磁製品・石製品が石山、木製品は佐藤が作成した。編集は春日が行なった。
- 8 本書の遺物写真撮影は石山・佐藤が中心になって行なった。
- 9 発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示・ご助言を賜った。厚く御礼申し上げます。

石井由美、宇野隆夫、垣内光次郎、柿田祐司、金子正典、木立雅朗、坂井秀弥、田村浩司、鶴巻康志、
滝川重徳、藤田邦雄、増山 仁、宮田進一、安 英樹、山本幸俊、渡辺朋和、渡辺ますみ

目 次

第I章 序 説	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査・整理の経過	
A. 調査経過	1
B. 整理経過	3
第II章 遺跡の位置と環境	
1. 位置と地理的環境	4
2. 周辺の遺跡	4
3. 川口集落について	6
第III章 遺 跡	
1. 調査方法	
A. 調査区の呼称とグリッドの設定	7
B. 基本的な調査工程	8
2. 層 序	8
3. 概 観	10
4. 遺構各説	11
第IV章 遺 物	
1. 土器・陶磁器	
A. 器種分類	26
B. 土器・陶磁器各説	26
2. 土・陶磁製品・石製品	37
3. 木製品	39
4. その他	44
第V章 ま と め	
1. 中・近世の土器・陶磁器	
A. S D 166出土の土器・陶磁器	45
B. 近世の土器・陶磁器	
(1) 主な遺構出土の土器・陶磁器	45
(2) 近世の瓦器・土師器	51
2. 遺構の変遷	53
《要 約》	54
《別 表》 1 土器・陶磁器観察表	55
2 土製品・石製品観察表	67
3 木器観察表	68
《引用・参考文献》	71

挿 図 目 次

第1図	一次調査設定トレンチ位置図	1
第2図	江内遺跡発掘調査・整理作業工程	3
第3図	周辺の地形	4
第4図	江内遺跡周辺の遺跡	5
第5図	グリット設定図	7
第6図	遺跡の層序	9
第7図	遺構模式図	10
第8図	土器・陶磁器器種分類図	27
第9図	砥石の大きさと重量	38
第10図	井戸側部材の大きさ	43
第11図	主要遺構出土土器・陶磁器	47
第12図	掘いの食器	49
第13図	16～17世紀の土器・陶磁器	50
第14図	遺構変遷図 1	52
第15図	遺構変遷図 2	53

図 版 目 次

図面図版

図版1	遺構全体図	1 : 400
図版2・3	遺構実測図1	1 : 100
図版4・5	遺構実測図2	1 : 100
図版6・7	遺構実測図3	1 : 100
図版8・9	遺構実測図4	1 : 100
図版10・11	遺構実測図5	1 : 100
図版12・13	遺構実測図6	1 : 100
図版14・15	遺構実測図7	1 : 100
図版16	遺構実測図8	1 : 40
図版17	土器・陶磁器1	S D166
図版18	土器・陶磁器2	S D15, S K20
図版19	土器・陶磁器3	S D41, S E45, S E47, E7・ビット10 S K95, S K100, S E21, S K91, S D130
図版20	土器・陶磁器4	S D116, S K122, S K144, S D178, S E176, S E190
図版21	土器・陶磁器5	S E198, S E212
図版22	土器・陶磁器6	S B1, S K8, S K69

- 図版23 土器・陶磁器 7 S K 69
- 図版24 土器・陶磁器 8 S K 96, S K 112, S E 80, S K 131, S K 177
- 図版25 土器・陶磁器 9 包含層・その他の遺構 (中世・近世: 陶器碗・皿)
- 図版26 土器・陶磁器 10 包含層・その他の遺構 (近世: 陶器碗・皿・おろし皿・小杯・蓋, 磁器碗)
- 図版27 土器・陶磁器 11 包含層・その他の遺構 (近世: 磁器碗)
- 図版28 土器・陶磁器 12 包含層・その他の遺構 (近世: 磁器皿・蓋・仏飯器・徳利・陶磁器香炉)
- 図版29 土器・陶磁器 13 包含層・その他の遺構 (近世: 陶器徳利・壺・甕・鉢・すり鉢)
- 図版30 土器・陶磁器 14 包含層・その他の遺構 (近世: 陶器すり鉢)
- 図版31 土器・陶磁器 15 包含層・その他の遺構 (近世: 陶器すり鉢・鍋, 土師器・瓦器)
- 図版32 土・陶磁製品, 石製品 1
- 図版33 石製品 2 S D 166, S E 198, S K 20
- 図版34 石製品 3 S D 15, S K 112, 包含層・その他の遺構
- 図版35 木製品 1 S D 116
- 図版36 木製品 2 S E 25, S E 47, S K 69
- 図版37 木製品 3 S E 80
- 図版38 木製品 4 S E 198
- 図版39 木製品 5 S E 198, その他の遺構
- 図版40 木製品 6 その他の遺構
- 図版41 木製品 7 S E 90 井戸側部材
- 図版42 木製品 8 S E 45 井戸側部材
- 図版43 木製品 9 S E 45 井戸側部材
- 図版44 木製品 10 S E 45 井戸側部材

写真

- 図版45 調査区近景
- 図版46 土層堆積状況
- 図版47 調査前近景, 作業風景, 暗渠敷設工事風景, ラジコンヘリによる航空撮影風景
- 図版48 遺構 A区全景, B区全景, D 5・6 周辺
- 図版49 遺構 E 5・6 周辺, E 7・8 周辺, F 5・G 8 周辺
- 図版50 遺構 S E 1 土層断面, S K 8 土層断面, S E 34, S E 34 土層断面
S E 47, S E 47 土層断面, S E 140, S E 140 土層断面
- 図版51 遺構 S B 1, S B 2, S B 1・ピット 2・4
- 図版52 遺構 SE90, SE72, SK68, SK68土層断面, SK82ab, SK82ab土層断面, SK67, SE80
- 図版53 遺構 SE100, SK91, SK91土層断面, SK92, SK92土層断面, SE93, E 7ーピット 10
- 図版54 遺構 S B 3, S B 3・ピット 1・2・4・6
- 図版55 遺構 SK20とSD15, F・G 6 周辺, SK20土層断面, SD15土層断面, SD40土層断面
- 図版56 遺構 SE45, SE45土層断面, SK29, SE14, SE14土層断面・SE28, SE28土層断面
- 図版57 遺構 SE25, SE25土層断面, SE21, SE21土層断面, SK24, SD41土層断面, G 6 周辺
- 図版58 遺構 S K 151, S K 144, S K 122, S K 132, S D 124・S K 125土層断面, S K 120, G・H 7・8 周辺
- 図版59 遺構 F 7・8 周辺, F 8 周辺, G 8 周辺
- 図版60 遺構 B区全景, G・F 2・3 周辺, E 2・3 周辺

- 図版61 遺構 D2・3周辺, SK226土層断面, SK226遺物出土状況, SK226
- 図版62 遺構 SD166土層断面, SD166, SD166遺物出土状況
- 図版63 遺構 SK230, SK230土層断面, SK204, SK204土層断面, SK197, SK197土層断面
- 図版64 遺構 SK210, SK210土層断面, SE198遺物出土状況, SK199土層断面,
SK197, SK197土層断面
- 図版65 遺構 SK202土層断面, SK202土層断面, SK203, SK203,
SK200土層断面, SK205, SK205完掘
- 図版66 遺構 SK190遺物出土状況, SK190土層断面, SK201, SK201土層断面,
SK192, SK192土層断面, SD165・E2・ピット10土層断面
- 図版67 遺物 土器・陶磁器1 SD166
- 図版68 遺物 土器・陶磁器2 SD15, SK20
- 図版69 遺物 土器・陶磁器3 SD41, SE45, SE47, SK95, E7ーピット10, SE100
SE21, SK91, SD130, SD116, SK122
- 図版70 遺物 土器・陶磁器4 SK144, SD178, SE176, SE190
- 図版71 遺物 土器・陶磁器5 SE198
- 図版72 遺物 土器・陶磁器6 SE202, SB1, SK8
- 図版73 遺物 土器・陶磁器7 SK69
- 図版74 遺物 土器・陶磁器8 SK69, SK96, SK112
- 図版75 遺物 土器・陶磁器9 SK112, SK177, SK131, SE80, 包含層・その他の遺構(中世)
- 図版76 遺物 土器・陶磁器10 包含層・その他の遺構(近世:陶器碗・皿)
- 図版77 遺物 土器・陶磁器11 包含層・その他の遺構(近世:陶器皿・おろし皿, 磁器碗・蓋)
- 図版78 遺物 土器・陶磁器12 包含層・その他の遺構(近世:磁器碗・蓋・皿)
- 図版79 遺物 土器・陶磁器13 包含層・その他の遺構
(近世:磁器皿・蓋・仏飯器, 陶磁器香炉・徳利・壺・甕)
- 図版80 遺物 土器・陶磁器14 包含層・その他の遺構(近世:陶器甕・鉢・すり鉢)
- 図版81 遺物 土器・陶磁器15 包含層・その他の遺構(近世:陶器すり鉢)
- 図版82 遺物 土器・陶磁器17 包含層・その他の遺構
(近世:陶器すり鉢, 行平鍋・土師器鉢・火入れ・焔炉・火消し壺・焙烙)
- 図版83 遺物 土製品・石製品1 SD166, SE198
- 図版84 遺物 石製品2 SK15, SK112, 包含層・その他の遺構, 鉄斧・焼礫
- 図版85 遺物 木製品1 SD166, SE25, SE45
- 図版86 遺物 木製品2 SK69, SE80
- 図版87 遺物 木製品3 SE198, 包含層・その他の遺構
- 図版88 遺物 木製品4 その他の遺構
- 図版89 遺物 木製品5 SE90井戸側部材
- 図版90 遺物 木製品6 SE45井戸側部材
- 図版91 遺物 木製品7 SE45井戸側部材

第 I 章 序 説

1. 調査にいたる経緯

磐越自動車道は福島県いわき市を起点とし、常磐自動車道から分岐し、阿保郡山市で東北縦貫自動車道に連結し、さらに同県会津若松市を経て新潟市で北陸自動車道と結ばれる総延長212kmの高速度である。

磐越自動車道のうち江内遺跡にかかる区間（新潟～津川間）は、昭和53年12月に基本計画路線が決定された。昭和60年4月、新潟県教育委員会（以下、県教委とする）は日本道路公団新潟建設局（以下、公団とする）の依頼を受け、新潟市～北蒲原郡安田町の遺跡分布調査を実施し、新潟市川口集落周辺ほか、計17ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認し、同年5月にこの結果を公団に通知している。その後、県教委は平成3年12月・4年1月に第一次調査を行い、川口集落周辺には中世の集落跡の性格が認められるとした。この結果により川口集落周辺の遺跡を江内遺跡とし、平成4年3月に文化庁あてに遺跡発見の通知をしている。

また県教委は江内遺跡3,500㎡について二次調査が必要である旨を公団に伝え、磐越自動車道の工事工程や県教委・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）の体制などを考慮した結果、平成4年度4月～7月にかけて二次調査を実施することで協議を整えた。

2. 調査・整理の経過

A 調査経過

第1次調査

第一次調査は県教委により平成3年12月5・6日、平成4年1月13日の2回に分けて行った。調査方法



第1図 一次調査設定トレンチ位置図

日本道路公団新潟建設局 新潟工事事務所作成
1:500 昭和63年調査

2. 調査・整理の経過

は対象地域全体に任意にトレンチを設定し、遺構・遺物の有無・土層の堆積状況などを確認するものである。トレンチの数は23本(461.5㎡)で、調査対象面積14,950㎡に対する割合は約3%である。調査の結果、5・7トレンチで近世陶磁器の他に中世陶器・土師器等が出土し、井戸・土坑・ピット等が検出され中世の集落跡である可能性が高まった。また江内遺跡の第二次調査必要範囲についてはS T A 881+51,000から主要地方道新潟新津線までの3,200㎡とした。

第2次調査

調査体制および調査期間は下記のとおりである。

調査期間 平成4年3月22日～7月21日

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 本間栄三郎)

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 本間栄三郎)

管理 壺原 直木(専務理事・事務局長)

渡辺 耕吉(総務課長)

茂田井信彦(調査課長)

庶務 藤田 守彦(総務課主事)

調査指導 戸根与八郎(調査課第一係長)

調査担当 望月 正樹(調査課第一係主任)

調査職員 藤田 豊明(同 主任)

春日 真実(同 文化財調査員)

佐藤 恒(同 囃子員)

第2次調査の経過

調査区内を市道22号線およびこれに沿った農業用水路が横断するため、市道22号線を境に調査区を二分し、先行して調査を行った東側の調査区をA区、A区の調査終了後に調査に着手した西側をB区とした。

A区:平成4年3月25日から6月20日まで調査を行った。ただし、3月25日から4月2日までは調査区内に存在する盛土削平の立ち合い調査である。4月6日以降は調査区東側から西側に向かって包含層掘削・遺構精査・遺構発掘の順で調査を行った。

5月10日に調査区内の排水溝の土層観察により、下層に包含層が存在する可能性が高まったため調査区北東部の一角について実測・写真撮影を行い、5月20・21日に下層の確認調査を行った。その結果下層に包含層は存在しないことが判明した。以後、通常の工程で調査を行う。6月15日には遺構発掘がほぼ終了。6月17日に航空測量、6月18～20日に掘り残し確認を行い調査を終了した。

B区:平成4年5月20日から23日、6月12日から7月22日にかけて調査を行う。このうち5月20～23日はバックフオーによる表土除去作業であり、本格的な調査は6月12日からである。調査途中に調査区西側の市道に面した壁面の崩落が著しくなったため、6月27日に杭と板材による簡易な土留め工事を行う。

また調査区を南北方向にのびる溝(S D 166)は調査区外南側にのびることが明らかとなり、7月2日に公団と協議、南側約200㎡を拡張することが決定した。7月15日には拡張部分も含め遺構発掘がほぼ終了、7月17日に航空測量、7月21日に掘り残し確認調査を行い調査を終了した。

B 整理経過

出土遺物の水洗作業は調査現場で発掘調査と平行して実施した。その後の本格的な整理作業は平成4年12月～平成5年3月、平成5年12月～平成6年3月、平成7年1月～3月、平成7年12月～平成8年3月にかけて埋文事業団曾和分室において実施した。

遺物の製図・拓本・挿図の作成については日々雇用職員の協力を得たが、遺物の注記・接合・実測などの作業は基本的に調査員が行った。

各年度の整理体制と主な作業内容は以下に示すとおりである。

主 体 新潟県教育委員会（教育長 4～6年度 本間栄三郎 7年度 平野清明）

整 理 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木（専務理事・事務局長）

4～6年度 渡辺 耕吉 7年度 山上利雄（総務課長）

4～6年度 茂田井信彦 7年度 亀井 功（調査課長）

庶 務 4・5年度 藤田 守彦 6・7年度 泉田 誠（総務課主事）

平成4年度 指 導 戸根与八郎（調査課第一係長） 鈴木俊成（調査課第一係主任）

担 当 藤田 豊明（出土遺物の整理・実測）

職 員 佐藤 恒（出土遺物整理・実測）

平成5年度 指 導 藤巻 正信（調査課第一係長）

担 当 藤田 豊明（出土遺物の整理・実測）

職 員 春日 真実（遺構図版作成）

佐藤 恒（出土遺物整理・実測）

平成6年度 指 導 藤巻 正信（調査課第一係長）

担 当 春日 真実（総括・原稿・編集）

職 員 石山 精哉（出土遺物実測・製図・写真撮影・原稿）

佐藤 恒（出土遺物実測・製図・写真撮影・原稿）

日々雇用職員（復元・拓本・製図・挿図作成の補助）

平成7年度 指 導 藤巻 正信（調査課第一係長）

担 当 春日 真実（原稿・編集・校正）

年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成4年度		A地区調査										基礎整理	
		B地区調査											
平成5年度												遺物実測・遺構図版作成等	
平成6年度		日々雇用職員による整理・復元										遺物実測・写真撮影・原稿等	
												原稿・編集	
												入校・校正	

第2図 江内遺跡の調査・整理経過

第II章 遺跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境

江内遺跡は新潟県新津市大字川口字江内31番地ほかに所在し、標高は4～5mを測る。新津市は新潟平野のほぼ中央部に位置し、東西11.4km、南北12.1km、面積77.99km²、人口64,877人（平成元年7月現在）の中都市である。東は阿賀野川を境に北蒲原郡京ヶ瀬村・水原町・安田町に接し、西は信濃川を境に白根市、南は新津丘陵を挟んで五泉市・中蒲原郡小須戸町、北は小阿賀野川を境に新潟市・中蒲原郡横越村と接する。市の中央部にはJR信越本線が縦貫し、新津駅で羽越本線・磐越西線と連絡する。また、かつては県内随一といわれる油田を持ち、鉄道の町・石油の町と称されていた。

新津市の地勢は阿賀野川・信濃川が形成した沖積平野、南東の新津丘陵、その裾野に広がる台地・段丘の3つに大別できる。市城の大部分を占めるのは沖積平野であり、これは北に向かって緩やかに傾斜し、水捌けの悪い低地帯になっている。この中には旧自然堤防・微高地が点在する。これらの多くは阿賀野川が形成した自然堤防であり、阿賀野川が西から東へと流路を変更してきた結果と考えられている（鈴木1975）。旧自然堤防・微高地には古墳時代から中世の遺跡のほか多くの新田村が存在するが、江内遺跡もこのような旧自然堤防上に位置する。

2. 周辺の遺跡

新津市城の主な古代・中世遺跡の分布は第4図のとおりである。以下では第4図に沿って新津市周辺の



第3図 周辺の地形

国土地理院発行地形図「新潟」
1:50,000 平成元年

遺跡分布について概要を述べるが、これについては『沖ノ羽遺跡』[石川他1994]、『細池・寺道上遺跡』[小池他1994]に詳しいので、詳細についてはこれらを参照していただきたい。

新津市の南東に存在する新津丘陵は、旧石器～弥生時代の遺跡がいくつか見られ、古くから人々の活動の場となっていた。

弥生時代後期になると二重の環濠を持つ大規模な高地性集落である八幡山遺跡が成立し、古墳時代前期には新津八幡山古墳が築かれる。このことは当地に一定の政治勢力が存在したことを示すとともに、畿内から越前・能登を経て蒲原平野に至り、会津へ抜ける際の陸路の要衝と意識された結果であろう（甘粕1993・川村1993）。奈良・平安時代になると、かつては地域の王の奥津城であった丘陵地に多くの須恵器窯・製鉄遺跡などが作られ、工業地帯へと変貌する。ただしこれらの須恵器窯・製鉄遺跡は中世には至らず消滅する。中世には東島城跡・金津城跡など山城が作られ、防衛的機能を持った施設が再度出現する。近世・近代にはふたたび陶器作りや石油の採掘などが行われるようになり、陶器窯や多くの油井が作られたが、現在はこれらは消滅し、丘陵裾部は宅地、他は山林として利用されている。こうした丘陵利用の変化は、当時の政治や権力のあり方を考える上で興味深い。



新津丘陵周辺地域における古代・中世の主要遺跡

1. 長尾遺跡 (奈良・平安、中世)	14. 中瀬遺跡 (奈良・平安)	26. 吉澤初結A遺跡 (奈良・平安)
2. 結遺跡 (奈良)	15. 北栗遺跡 (奈良・平安)	27. 大入遺跡 (奈良・平安)
3. 上瀬遺跡 (奈良・平安、中世)	16. 舟戸遺跡 (古墳、奈良・平安、中世)	28. 金澤初結遺跡 (奈良・平安)
4. 川口甲遺跡 (奈良・平安、中世)	17. 塩平遺跡 (奈良・平安)	29. 厩村C遺跡 (奈良・平安)
5. 江内遺跡 (中世)	18. 長夏ブドウ遺跡 (奈良・平安)	30. 厩村B遺跡 (奈良・平安)
6. 沖ノ羽遺跡 (古墳、奈良・平安、中世)	19. 七本松岡跡 (奈良・平安)	31. 厩村A遺跡 (奈良・平安)
7. 西谷遺跡 (奈良・平安)	20. 滝谷岡跡 (奈良・平安)	32. 西江遺跡 (奈良・平安)
8. 小戸下組遺跡 (奈良・平安)	21. 東水岡跡 (奈良・平安)	33. 寺道上遺跡 (奈良・平安、中世)
9. 浄土遺跡 (中世)	22. 大坪遺跡 (奈良・平安)	34. 胡島遺跡 (奈良・平安、中世)
10. 新津城跡 (中世)	23. 東島城跡 (中世)	35. 山崎遺跡 (奈良)
11. 小戸下組遺跡 (奈良・平安)	24. 八幡山遺跡・ 新津八幡山古墳 (奈良・平安)	36. 金津城跡 (中世)
12. 浄土遺跡 (中世)	25. 東島城跡 (中世)	
13. 新津城跡 (中世)		

第3図 位置と周辺の遺跡

(国土地理院「新津」1:50,000原図 平成3年発行)

3. 川口集落について

一方、北側に広がる沖積地に明確な遺跡が確認できるようになるのは、現在の調査状況からは古墳時代以降である。これらの遺跡は自然堤防上や微高地上に位置することが多い。古墳時代・奈良時代の遺跡数はそれほど多くないが、平安時代に遺跡は増加する。これは、奈良時代から平安時代にかけての生産力の増大という側面は無視できないが、平安時代の遺跡は小規模で短期間で廃絶することが多く、遺跡（集落）の小規模分散化という面も考慮に入れなければならない。中世の遺跡数は平安時代に比べ少ない。古墳～平安時代の遺跡と比較し遺物の出土量の少ない中世の遺跡は、分布調査では発見しづらいという面はあるが、この点を考慮に入れても当期における沖積地の開発はそれほど活発ではなかったであろう。中世および近世初頭にはいまだ多くの未墾地や湖沼が残っていたものと考えられる。現在の新津市は平野部が街区・宅地・耕地としてくまなく利用されているが、このような景観の形成は慶長から元和にかけての新田村の出現を起点として成立していった可能性が高い。

3. 川口集落について

江内遺跡は現在の新津市川口集落内に位置する。以下では『新津市史』通史編1（新津市 1994）・『角川日本地名大辞典 15 新潟県』（小村他編 1989）に沿って、近世の川口集落について概要を述べる。

川口集落は新発田藩領であり鎮守は諏訪神社、寺院は真宗大谷派改観寺である。川口という地名の由来は、かつて当地が小阿賀野川と能代川の合流地点であったことからつけられた可能性が高い。

近世の川口集落の成立がいつまで遡るかは明確でないが、元和9（1623）年に小須戸在住の二右衛門に川口新田の開発免許状が新発田藩から出されている。開発免許状は開発前に与えられるものではなく、ある程度開発が進んだのちに開発人に与えられるものであり、集落の成立は1623年に若干先行する頃であろう。

名主は田中家である。田中家の祖先新六郎は本来上杉家の家臣であったが、文禄年間に帰農土着し横越島砂崩（現在の中蒲原郡亀田町）を開発。その後嘉瀬村（現在の新潟市）の肝煎を勤めていたときに二右衛門のあとをうけ川口新田の開発にあたり、息子である仁兵衛が同村の肝煎りに任命された。以後名主は田中家より世襲されるが、幕末には加藤家になる。

水利は能代川の三ノ堰から取水する五ヶ村江を利用している。能代川を水源とする水利組合には当時、一ノ堰組、二ノ堰組、三ノ堰組があり、川口新田の利用する三ノ堰組はこのなかではもっとも下流に位置する。五ヶ村江を利用する村には川口新田のほかに結・荻島・中野・車場の4ヶ村があった。

村高は正保3（1646）年が154余石、寛文10（1664）年には223余石、天保年間には470余石である。検地は、延宝5（1677）年、寛政7（1795）年、文政年間（1818～1830年）頃の須戸組書上帳で238石、田畑55町余、家数56、人数368人である。

村落の構成は、元禄11（1698）年の川口新田宗旨御改帳によれば本家14軒（129人）、名子21軒（141人）、間脇12軒（48人）で、人口は合計318人である。また慶応2（1865）年両組産業開物之巻によれば、家数61、大工・木挽・屋根葺・紺屋・髪結・ざる作り・船乗り・漁業などがあったことが知られ、幕末には一定量の手工業民が存在した。

なお能代川が氾濫することはしばしばあり、寛政8年（1796）には洪水により家屋の流失11軒、全半壊8軒、罹災者75人があったことが記録されている。

第三章 遺 跡

1. 調査方法

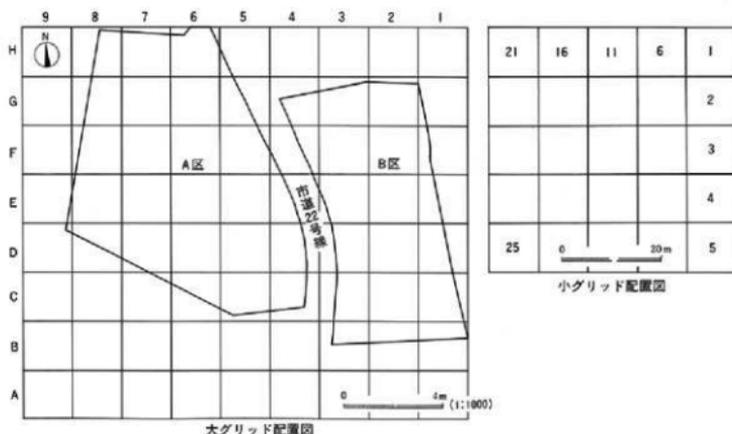
A 調査区の呼称とグリッドの設定

調査区の呼称

本遺跡は阿賀野川左岸の川口集落内に位置しており、市道22号線およびこれに沿った農業用水路が調査区内を横断する。これらの機能を停止させて調査を行うことは不可能であるため、市道22号線を境に調査区を二分し、先行して調査を行った東側の調査区をA区、A区の調査終了後に調査に着手した西側をB区とした。

グリッドの設定 (第5図)

調査の合理性を考え、磐越自動車道のセンター杭を用いて、これをグリッドの基準線とした。センター杭881と882を結ぶ方向を横軸とし、これに直行する方向を縦軸とし、10m方眼を組みこれを大グリッドとした。グリッドの縦軸の方向は真北より2度30分西傾する。また、グリッドは東-西方向を算数字、南-北方向をアルファベットとし、この組合せにより表示した。大グリッドはさらに2m方眼に細分し、1～25の小グリッドとしB4-16のように表記した。



第5図 グリッド設定図

B. 基本的な調査工程

排水方法

調査区は沖積地であるため調査区内の排水は不可欠であった。そのため調査前に調査区の周囲をめぐる暗渠を敷設し、集水枘を設け電動ポンプで常時強制排水を行った。暗渠は幅50～100cm、深さ150～200cmの深さをバックホーで掘削し、多孔の塩化ビニール管を入れたのち碎石で充填したものである。また暗渠以外にも調査区内の状況に応じて適宜排水溝を人力で掘削した。

盛土・包含層削平

A・B区ともに厚い盛土が存在したためバックホーによる掘削を行った。また出土遺物の多少に応じ、バックホーによって包含層掘削を行った箇所もある。ただしバックホーによる包含層の掘削中に、多くの遺物が出土したり、遺構と考えられる覆土などが検出された場合は、その場の包含層を残し、人力による掘削に切り替えた。

層序確認

調査区の前積が比較的広いA区は、十字にセクションベルトを残し、必要に応じ1/20縮尺でセクションベルトの一部を実測した。また排水溝や調査区の周囲をめぐる壁面なども土層観察に利用した。調査区の前積の狭いB地区については調査区東側と北側の壁面を精査し、土層観察を行いA区同様必要に応じ1/20縮尺でセクションベルトの一部を実測した。

遺構精査・発掘

包含層掘削が終了したのち、ジョレン・鶴首ホー（手ジョレン）を用いて遺構の平面的な広がりを確認するための作業を行った。

遺構発掘はセクションベルトを残して掘るか、半截したのちに土層観察・写真撮影・土層断面実測等を行ったのち完掘した。ただし明確な柱痕や柱根のないピットについては、野帳などに覆土の状況のメモを行い、完掘したものもある。

遺構番号は土坑（SK）・井戸（SE）・溝（SD）・不明遺構（SX）と掘立柱建物（SB）では別の通し番号を付けた。またピットについては大グリッドごとに通し番号をつけ、E4・ピット25のように表した。

遺構実測

土坑・井戸・溝については縮尺1/20の土層断面図を調査員もしくは作業員が作成した。遺構平面図については一部を除き業者に委託し、縮尺1/40の航空測量を行った。

掘り残し確認調査

各地区の調査が終了したのち、調査区の全体または一部を削平し、掘り残した遺構の有無を確認した。遺構を確認した際は、発掘・写真撮影・実測を行い記録に加えた。

2. 層 序

江内遺跡は調査区の長さ約80m、幅約50mを測る。標高は4.0～5.0m、遺跡の現状は宅地である。現地形は西から東に向かっていったん高くなり、以後再び東に向かって低くなるが、これは旧地形とほぼ一致する。調査区内の層序は宅地造成の際の改変、旧地形の様子により、土色・堆積する土層に若干の違いが

あるものの、基本的には地形の傾きに沿って堆積する。基本層序はI～IV層に区分したが、II層についてはさらにa・bの3層に区分した。以下、各層ごとに概要をのべる。

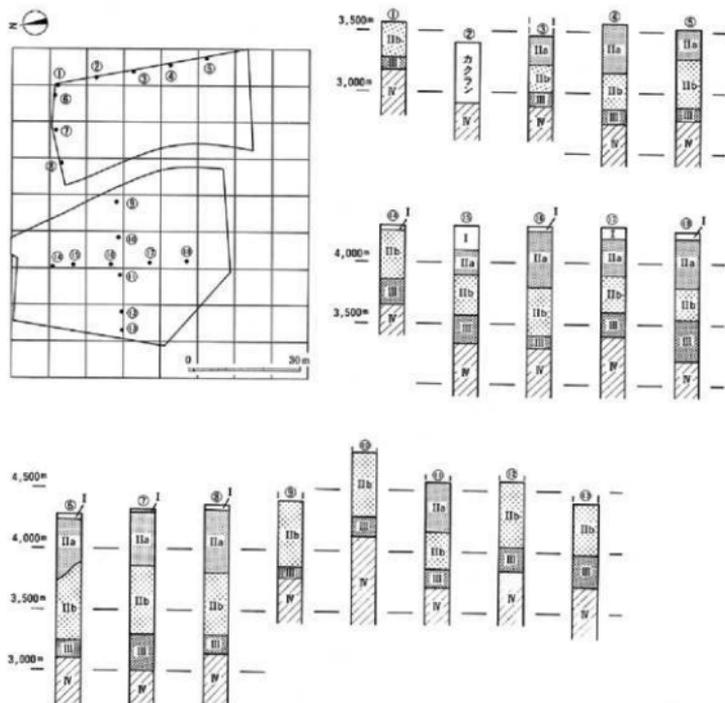
I層：表土層

II層：2層に細分した。ともに洪水堆積層と考える。

II a層 茶褐色シルト層。1～2cm前後の茶褐色シルトブロックを少量含む。東側（B区）に厚く堆積する。

II b層 茶褐色シルト層。混入物をほとんど含まない均質な土層である。調査区にほぼ満遍無く存在する。厚さは40cm前後であり、17～18世紀代と考える遺構の履土上層に堆積している例がいくつかみられる。本層位の上面から掘り込まれている遺構には出土遺物から考え18世紀末から19世紀代のものがある。文献に残る寛政8年の洪水の際に堆積した土層である可能性が高い。

III層：灰色粘土層。中・近世の遺物包含層である。B地区からA地区にかけて漸的に茶色味を増し、土層を構成する粒子も粗くなるが、A区西側では再び灰色味が強くなり、構成する粒子も細くなる。厚さはほぼ均質で20cm前後である。



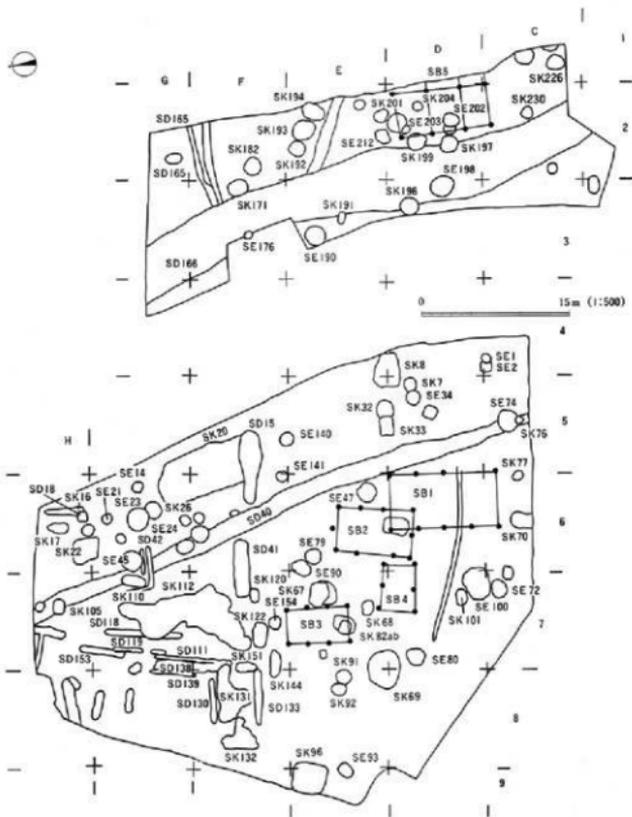
第6図 遺跡の層序

3. 概 観

N層：黄褐色シルト層。いわゆる地山である。B区南側ではグライ化が進み、青灰色を呈する。下位になるほど粒子が荒くなる傾向がある。

3. 概 観

A区は近世の遺構が大半を占める。中世の遺構はSD40がその可能性があるが、ほかには存在しない。近世の遺構はD～H 5～7グリッド周辺に集中し、掘立柱建物・井戸・土坑などが確認できる。またG・H 5・6グリッドからは建物跡は確認できなかったが、近世の井戸・土坑が比較的まとまって検出された。近世の井戸の中には石組みの水溜めを持つものや木製の井戸側を持つものも存在する。G・H 7～9、D・E・F 8・9グリッド周辺では遺構の分布は希薄である。



第7図 遺構配置模式図

B区は西側を南北方向に流れるSD166が中世の遺構であり、中世の土坑（SK203）も存在する。近世の遺構はC・D2グリッドに土坑・井戸・ピットなどが集中する。

遺物は中世のものはA区に少なく、B区に多い。B区SD166からは中世の土器・陶磁器・木器が多く出土した。近世はA区SD15・SK8・20・SD41・SK69・96・112、B区SK190・198から土器・陶磁器・木製品がまとめて出土した。

4. 遺構各説

SE1（図版2・3・50）

D4にある円形の茶掘り井戸。SE2を切る。直径90～100cm、深さ80cmを測る。底面はやや内彎し、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積であり、2層に分かれる。上層は灰色シルト、下層は青灰色粘土である。遺構覆土に茶褐色シルトを含まない。寛政8（1796）年以後に構築された遺構である。陶器灯明皿（図版26・219）が出土している。

SE2（図版2・3）

D4・5にある隅丸方形の茶掘り井戸。SE1に切られる。長さ110cm、幅90cm、深さ90cmを測る。底面は内彎し、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積であり、大きく2つに分かれる。上層（1～3層）は茶褐色ないしは暗茶褐色シルトを基調とする土層であり、下層は暗灰色ないしは暗青灰色粘土に地山ブロックが混じる土層である。上層の茶褐色ないし暗茶褐色シルトを基調とする土層は寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。肥前系磁器碗の小片のほか軽石がまとめて出土した。

SK7（図版2・3）

D5にある略円形の土坑。SE34に切られる。長軸150cm、短軸130cm、深さ30cmを測る。底面から緩く外傾して立ち上がる。覆土は2層で上層が暗灰色土、下層が灰色シルトである。寛政8（1796）年には完全に埋没していた遺構と考える。遺物は出土していない。

SK8（図版2・3・50）

E5にある略台形の土坑。SE9・10を切る。近世の遺物がまとめて出土したが（図版22・128～148）、近・現代のガラス片・陶磁器なども出土したため、調査時は近・現代の攪乱と考えたが、近現代のガラス片・陶磁器は部分的な攪乱から出土したもので、SK8は近世の遺構である可能性が高いと現在は考えている。長軸350cm、短軸260cm、深さ106cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は外傾して立ち上がるが、北壁に比べ南壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状堆積であり、茶褐色シルトは含まない。寛政8（1796）年以後に構築された遺構である。

SE9（図版2・3）

D5～E5にまたがってある茶掘り井戸。大半はSK8に切られるが、直径120cm前後の略円形となるものと思われる。深さは110cmを測る。底面は内彎し、南壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレン

4. 遺構各説

ズ状堆積であり、大きく2層に分けられる。上層(1・2層)は黄褐色シルト混茶褐色シルト、下層は暗青灰色粘土である。上層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE10(図版2・3)

E5にある円形の素掘り井戸。SK8に切られる。平面形は直径90cm前後の略円形になるものとする。深さは90cmを測る。底面は彎曲し、側壁はわずかに外傾する。覆土はレンズ状堆積であり、3層に分かれる。1・2層が茶褐色シルトを基調とする土層、3層が暗青灰色粘土である。1・2層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE34(図版2・3・50)

D5にある円形の素掘り井戸。直径は144~154cm、深さ106cmを測る。底面は内彎し、側壁はやや外傾して立ち上がるが、南壁は途中段をもつ。覆土はレンズ状堆積であり、暗青灰色粘土ブロック混茶褐色シルト層(4層)を境に2分でき、これより上層(1~3層)は茶褐色シルトを基調とする土層、これより下層は暗青灰色粘土であり、上層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。出土遺物には陶器鏃(図版30 329)がある。

SK32(図版2・3)

D・E5にある土坑。西側をSK33に切れ、東側は攪乱を受けているが、長軸230cm、短軸170cm前後の楕円形になるものとする。深さは60cmを測る。底面は彎曲し、側壁は外傾するが、南壁に比べ北壁は立ち上がりが急である。覆土はレンズ状堆積。上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SK33(図版2・3)

D・E5にある方形の土坑。SK32を切る。長軸160cm、短軸140cm、深さ70cmを測る。底面は西側に傾斜し、側壁は外傾する。覆土はレンズ状堆積であり、黒褐色シルト(7層)を境に2層に大別できる。上層(1~6層)は暗茶褐色ないしは暗灰褐色シルト質粘土を基調とする土層、下層(8・9層)は砂粒を多く含む土層である。覆土に茶褐色シルトを含まない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。遺物は出土していない。

SE47(図版2・3・50)

E6にある円形素掘りの井戸。径190~200cm、深さ140cmを測る。底面はほぼ平坦、側壁は南北両壁ともほぼ垂直に立ち上がるが、途中に段をもち、外傾してのびる。覆土はレンズ状堆積であり、暗青灰色粘土ブロック混青灰色粘土層(3層)を境に2つに分かれ、上層(1・2層)は茶褐色シルトを基調とする土層、下層(5層)は暗青灰色粘土を基調とする土層である。上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。底面付近からは焼礫が複数出土した。遺物は陶磁器・皿・鏃(図版19 64~68)、木製品(図版36 17~20)が出土した。

SE74 (図版2・3)

C5にある円形の素掘り井戸。上半は攪乱をうけている。またSD40を切りSK76に切られる。検出面で径200~240cm、深さ110cmを測る。底面は内傾し、側壁は外傾する。遺物は肥前系磁器碗(図版26 229)が出土している。17世紀後半を中心とする時期のものとする。

SK76 (図版2・3)

C5にある円形の土坑。上半は攪乱を受けている。SD40・SE74を切る。検出面で直径70~80cm、深さ68cmを測る。底面はほぼ水平、東側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西側壁は途中で段をもつ。覆土はレンズ状堆積。18世紀以降のものとする。遺物は出土していない。

SK77 (図版2・3)

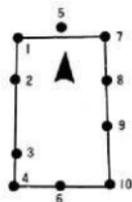
C5にある円形の土坑。上半は攪乱を受けている。検出面で直径80~90cm、深さ50cmを測る。底面はほぼ水平で側壁はやや外傾しながら立ち上がる。年代は特定できない。遺物は陶器播鉢(図版31 334)が出土している。

SK49 (図版4・5)

D6にある隅丸方形の土坑。長さ264cm、幅154cm、深さ50cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。土坑北側の覆土中位付近から、樹皮の残る木柱が東西方向に2本、南北方向に1本直交して検出された。用途は不明。SB2-ピット1を切る。覆土は3層に分けられ、2・3層は混入物の少ない精良な青灰色粘土層である。時期を決定できるような遺物は出土していない。

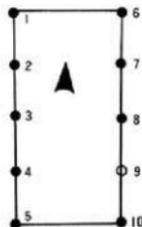
SB1 (図版4・5・51)

D・E6にある梁間2間(430~480cm)、桁行4間(750cm)の南北棟建物(N-4-E)。平面積は34.9m²である。東桁行の柱穴3、北妻の柱穴6は検出されなかった。柱間寸法は北から西桁行が190cm・400cm・150cm、東桁行が210cm・200cm、160cm・150cm、北梁間は430cm、南梁間は西から230cm、250cmと不揃いである。柱掘方は径40~100cm、深さ20~45とかなりばらつきが見られる。柱掘り方の埋土は茶褐色シルトを基本とする。近世の遺構と考える。



SB2 (図版4・5・51)

C・Dにある梁間1間(550cm)、桁行4間(1120cm)の南北棟建物(N-1-W)。平面積は61.6m²である。東桁行の柱穴9は検出されなかった。柱間寸法は東・西桁行ともいずれも約275cmとほぼ等間隔、南・北梁間は約550cmと桁行の柱間寸法の倍である。柱掘方は径80~150cm、深さ60~80cm、柱掘り方の埋土は灰色シルトを基本とし、覆土には茶褐色シルトを含まない。柱根は柱穴4・5で、柱痕は柱穴2・7で確認された。寛政8(1796)年以前に構築された遺構と考える。遺物は柱穴5から肥前系陶器皿(図版22 127)、柱穴8からは肥前系磁器皿(図版22 126)が出土した。



4. 遺構各説

S K70 (図版4・5)

C6にある隅丸長方形になると思われる土坑。南側は暗渠に切られ、北側は擾乱を受けている。南側にさらにのび、溝となる可能性もある。幅140cm、深さ35cmを測る。底面は内彎し側壁は外傾する。年代は特定できない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。

S E79 (図版4・5・52)

E6にある円形の素掘り井戸。直径146~150cm、深さ80cmを測る。底面はほぼ水平で、側壁はやや外傾する。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

S E90 (図版7・16・52)

E6・7にある円形の掘り方をもつ井戸。掘方は径120~140cm、深さ210cmを測る。井戸側は縦板を組合せタガで巻いたもの(桶の底を抜いたもの)を二段に重ねる。上段は、長さ87~93cm、最大幅10.2~15.0cm、厚さ2~3cmの縦板を用い、下端15cmのところを一箇所タガを巻く先細りの形態である。下段のものも上段とほぼ同じ形態のものであるが、上端から15cmと、下端から10cmのところニヶ所タガがある。タガの材質はいずれも竹。上段と下段の結合には何も用いず、キャップ状にはめ込むだけである。遺構覆土の上層は茶褐色シルトがレンズ状に堆積していた。寛政8(1796)年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は肥前系磁器小片が出土している。

S E100 (図版4・5・53)

D7にある円形の掘り方をもつ井戸。掘方は径120~140cm、深さ160cmを測る。底面は内彎し、側壁は外傾して立ち上がる。SE72に切られる。水溜めは、人頭大の自然礫を掘鉢状に最高4段に積み重ねる。使用した自然礫の石材はチャート・花崗岩が多い。井戸側は確認できない。遺構覆土には茶褐色シルトを含まない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。遺物は肥前系磁器碗・皿(図版19 75・76)がある。

S E72 (図版6・7)

D7にある円形素掘りの井戸。径160~190cm、深さ80cmを測る。底面は内彎し、側壁は外反して広がる。覆土はレンズ状堆積。覆土上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。遺物は出土していない。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。

S K68 (図版6・7・52)

E7にある隅丸方形の土坑。長さ152cm、幅116cm、深さ45cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はやや外反ぎみに立ち上がる。覆土は3層に分けられ、レンズ状堆積。茶褐色シルトは含まない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。遺物は出土していない。

S K69 (図版6・7)

D・E7・8にある楕円形の土坑。長軸400cm、短軸320cm、深さ72cmを測る。底面は南に向かって緩や

かに傾斜する。側壁は外傾して立ち上がるが、北壁に比べ南壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状堆積。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。土器・陶磁器(図版22・23 143~167)・木製品(図版36 21~26)がまとめて出土した。

SE80(図版6・7・52)

D7にある円形の素掘り井戸。長軸180~196cm、深さ145cmを測る。底面はやや彎曲し、側壁はともに外傾するが、北壁に比べ南壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状堆積であり5層は炭化物、6・7層は小枝や木の葉などの植物遺体を多量に含む層である。寛政8(1796)年以後構築された遺構である。土器・陶磁器(図版24・29 183~185・319)の他に木製品(図版37 27~34)がまとめて出土した。

SK82a(図版6・7・52)

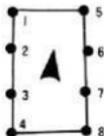
E7にある隅丸方形の土坑。長さ216cm、幅140cm、深さ32cmを測る。底面はわずかに南側に傾斜する。側壁は内彎して立ち上がる。SK82bを切る。覆土はレンズ状堆積であり4層に分けられ、最上層は暗茶褐色シルト質粘土である。遺物は出土していない。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。

SK82b(図版6・7・52)

E7にある隅丸方形の土坑。長さ128cm、幅116cm、深さ46cmを測る。底面は彎曲し側壁は内彎して立ち上がる。北半をSK82aに切られる。覆土は遺存しているところでは暗褐色シルトの単層。遺物は出土していない。近世の遺構である。SB3と関連する可能性がある。

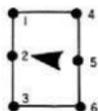
SB3(図版6・7・54)

E7にある梁間1間(350~370cm)×桁行3間(645cm)の南北棟建物(N-4-E)。平面積は23.3㎡である。柱間寸法は西桁行が北から200cm・225cm・225cm、東桁行はいずれも215cmで等間隔である。柱掘方は径75~100cm、深さ40~65cmである。柱穴の覆土上層には茶褐色シルトがレンズ状に堆積していた。柱穴からは柱根は出土していない。またいずれの柱穴もセクションに明確な柱根が確認できなかった。寛政8(1796)年以前に構築・廃棄された遺構である。柱穴5からは石臼が出土した。



SB4(図版6・7)

D6・7、E6・7にある梁間1間(340~360cm)×桁行2間(470~500cm)の東西棟建物(N-1-W)。平面積は17.0㎡である。柱間寸法は南桁行が約250cmでほぼ等間隔、北桁行が東から220cm・250cmである。柱掘り方は径60~80cm、深さ約40cm前後である。柱掘方の埋土は茶褐色シルトを基本とする。寛政8(1796)年以前に構築・廃棄された遺構である。



E7・ピット10(図版6・7・53)

E7にある方形の土坑。長さ80cm、幅66cm、深さ56cmを測る。底面はほぼ水平で側壁は直立気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。寛政8(1796)年以後に構築された遺構と考える。遺物は肥前系磁器碗・

4. 遺構各説

仏飯器等（図版19 69～72）が出土した。

E 8・ピット2・3（図版6・7）

ピット2は径75～110cm、深さ56cm、ピット3は径50～55cm、深さ16cmを測る。ピット3はピット2を切る。ピット3の底面はほぼ平坦であり、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はピット2・3ともにレンズ状堆積である。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S K 91（図版6・7・52）

E 8にある円形の土坑。径148～156cm、深さ35cmを測る。底面はほぼ水平、側壁は外傾して立ち上がる。S K 92と一部切りあいがあるが、前後関係は不明。覆土はレンズ状堆積で、4層に分かれる。肥前系磁器碗（図版19 79・80）が出土した。出土遺物から18世紀末から19世紀の遺構と考える。

S K 92（図版6・7・52）

E 8にある楕円形の土坑。長さ124、最大幅152cm、深さ32cmを測る。底面はやや彎曲し、側壁は内彎して立ち上がる。S K 91と切り合うが、前後関係は不明。覆土はレンズ状堆積。4・6層は地山とよく似た土であり、2・5層は炭化物を多量に含む層である。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S E 93（図版6・7・53）

E 9にある円形茶掘りの井戸。径124～156cm、深さ89cmを測る。底面はほぼ水平であり、側壁は外傾して立ち上がり、下方で大きく開く。覆土は水平堆積で2層に分けられる。上層に厚く堆積する茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年にかなり近接した時期まで機能していた遺構である。遺物は陶器挿鉢（図版30 327）が出土した。

S E 140（図版8・9・50）

E 5にある円形の茶掘り井戸。径130～140cm、深さ140cmを測る。底面は内彎し、側壁は外反して広がる。覆土はレンズ状堆積。1層の茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

S E 141（図版8・9）

E 5にある円形茶掘りの井戸。径100～110cm、深さ110cmを測る。底面は内彎し、側壁はほぼ垂直に立ち上がり、上端付近でやや開く。覆土はレンズ状堆積。1層の茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。木片が出土したが、遺物は出土していない。近世の遺構と考える。

S D 15（図版8・9・55）

F 5・6区にある東西にのびる溝。長さ840cm、幅120～240cm、深さ60～80cmを測る。底面は内彎し側壁は外傾して立ち上がる。また中央よりやや西側に段があり、これより西側は浅くなる。S K 20を切る。覆土はレンズ状堆積。寛政8（1796）年以後に構築された遺構である。陶磁器（図版18 21～36）・石製

品(図版34 42~44)・木製品(図版39 50)がまとめて出土した。

SK20 (図版8・9・55)

F・G-5・6にある楕円形で大型の土坑。南端をSD15に切られるが、長軸8m以上、短軸4.9m、深さ60cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は外傾して立ち上がる。覆土の1~5層はレンズ状堆積であるが、最下層(6層)の粘土混じり青灰色砂層は水平に堆積する。最上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8(1796)年以前に構築・廃棄された遺構と考える。遺物は1~5層にかけて土器・陶磁器(図版18 37~53)、石器(図版33 34・35)などが出土した。

SE14 (図版8・9・57)

G6にある円形素掘りの井戸。径110~120cm、深さ90cmを測る。底面は内彎し、側壁はわずかに外傾する。覆土はレンズ状堆積で、3層に分かれる。1・2層の茶褐色シルトを基調とする土層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。2層下部から大量の軽石が出土した。

SK16 (図版8・9)

H6にある隅丸方形の土坑。南東は擾乱を受ける。最大幅95cm、深さ40~50cm、長さは150cm前後になるものと思われる。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎して立ち上がる。SD18との切り合うが、前後関係は不明。覆土はレンズ状堆積。最上層は茶褐色シルトであり、これは寛政8年(1796)の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SD18 (図版8・9)

H6にある南北にのびる溝。最大幅84cm、深さ30~40cmを測る。底面は彎曲し、側壁は内彎して立ち上がる。南よりに段があり、これ以南は深さ40cmと、深くなる。SK16と切り合うが前後関係は不明。肥前系磁器碗(図版26 243)・軽石が出土している。

SE21 (図版8・9)

H6にある円形素掘りの井戸。径112~116cm、深さ100cmを測る。底面はほぼ水平であり、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最上層は黄褐色シルト混茶褐色シルトであり、これは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。肥前系磁器碗・皿(図版19 77・78)が出土した。

SK22 (図版8・9)

H6にある方形で壺んだ形の土坑。長軸250cm、短軸240cm、深さ28cmを測り、断面は浅い皿状となる。年代は不明。遺物は出土していない。

SE23 (図版8・9)

G6にある円形の素掘り井戸。直径96~104cm、深さ70cmを測る。底面はほぼ水平であり、側壁はわず

4. 遺構各説

かに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以降に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE24（図版8）

G6にある円形の素掘り井戸。直径84～92cm、深さ100cmを測る。底面はほぼ水平であり、側壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。遺物は出土していない。

SE25（図版8・9・57）

G6にある円形の素掘り井戸。直径220～240cm、深さ115cmを測る。側壁は途中段をもち、これより上はほぼ垂直に立ち上がる。SK26に切られる。覆土は9層に分けられ、1・8・9層はレンズ状堆積であるが、2～7層はほぼ水平に堆積する。5・7層は小枝や木の葉などの植物遺体を多く含む。1層の茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。

SK26（図版8・9・57）

G6にある円形の土坑。径176cm、深さ24cmを測る。底面は彎曲し、側壁も内彎気味に立ち上がる。SK25を切る。寛政8年以後に構築された遺構である。遺物は出土していない。

SK27（図版8・9）

F6にある円形の土坑。径98～112cm、深さ28cmを測る。底面は北から南へゆるく傾斜し、側壁は外傾して立ち上がるが、北壁にくらべ南壁の立ち上がりは急である。1層の茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以後に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SE28（図版8・9・56）

G6にある円形の素掘り井戸。径108～112cm、深さ80cmを測る。底面は彎曲し、側壁はほぼ直立する。覆土はレンズ状堆積。1層の茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していないが、4層（最下層）中位からは焼礫が出土した。

SK17（図版8）

H6にある幅円形の土坑。長軸204cm、短軸100cm、深さ32cmを測る。底面は北から南に向かって緩やかに傾斜し、側壁は外傾する。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルト層は寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構と考える。遺物は出土していない。

SK29（図版8・9）

F6にある幅円形の土坑。長軸124cm、短軸76cm、深さ44cmを測る。底面は内彎し、北壁は外傾して立ち上がるが、南側壁は途中で段をもつ。覆土はレンズ状堆積。上層の茶褐色シルト層は寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

SD40 (図版8・9)

南南東-北北西方向に直線的にのびる溝。両端とも調査区外までのびる。幅160~270cm、深さ140~160cm前後である。SE74・SK76・SB1-ピット5・SE44・45・SK110・155・156等に切られる。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最下層には黒化した植物遺体を少量含む層がある。遺物は出土していない。後述する中世の溝SD166とはほぼ並行しており、中世にさかのぼる可能性がある。

SD41 (図版8・9・57)

F6・7にまたがる溝。東西方向にのびる。長さ740cm、最大幅108cm、深さ52~60cmを測る。底面中央よりやや南側に段がありそれ以南はやや浅くなる。側壁は外反気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルトは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。陶磁器(図版19 54~60)・木製品(図版39 49)が出土した。

SE45 (図版8・9・16・56)

G6区にある円形の掘り方をもつ井戸。掘り方の大きさは径210~248cm、深さ290cmを測る。井戸側は縦板を先細りの円筒形にタガで巻いたもの(桶の底板を抜いたもの)を3段に重ね、その外側に縦板を方形に組み四隅に柱を立て横棧で保持したものがつく。

内側の円筒の直径は、上段の上端は不明だが、下端は66cm、中段は上端59cm、下端72cm、下段は上端62cm、下端70cmである。これに用いる縦板は、上段のものは腐食で長さはわからないが、幅は13~20cm、厚さ2~3cm、中段は長さ90~93cm、幅10~20cm、厚さ約2cm、下段は長さ90~93cm、幅10~16cm、厚さ約2cmである。中・下段の円筒には上端・下端付近の2ヶ所にタガが付く。タガの材質は竹。円筒同士の結合には特別なものは用いず、キャップ状にはめ込むだけである。

外側の方形枠は一辺約80cmであり、これに使用する縦板は長さ200cm以上、厚さ約3cmで、一辺4枚前後となる。また四隅の柱は、一辺約9cm前後の角柱を用いる。横棧は2ヶ所にあり、結合にはホゾ穴を用いる。横棧の材は幅8~10cm、厚さ約4cmである。肥前系陶器鉢・皿等(図版19 61~63)が出土した。出土遺物から考え17世紀末~18世紀にかけての遺構と考える。

SK110 (図版8・9)

G7区にある長円形の土坑。長さ194cm、最大幅84cm、深さ23cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトの単層である。肥前系陶器鉢(図版29 313)が出土した。

SD42・43 (図版8)

G7・8区にある溝。SD42は東西方向に伸びるが、SD43は途中で「L」字状に屈曲する。断面形は「U」字型で深さは15~20cm。覆土は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトの単層である。SD43からは軽石および肥前系陶器捕鉢(図版30 324)が出土した。

4. 遺構各説

S K 105 (図版10・11)

H 7にある隅丸方形の土坑。長さ156cm、幅124cm、深さ41cmを測る。底面は彎曲し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。S D 40を切る。覆土は水平堆積で2層に分けられる。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。遺物は出土していない。

S K 112 (図版10・11)

F・G 6・7にある不整形で大型の土坑。長軸約14m、短軸約6.6mを測る。近・現代の磁器とともに近世の土器・陶磁器が出土したため調査時は近・現代の擾乱と考えたが、近・現代の磁器は部分的な擾乱から出土した可能性も高い。ただしその場合でも寛政8(1796)年以後に構築されたものである。土器・陶磁器(図版24 175~182)・土製品(図版32 12~14)・石製品(図版34 45・46)が出土した。

S K 120 (図版10・11・58)

F 7にある隅丸長方形の土坑。長さ121cm、幅96cm、深さ22cmを測る。底面は彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がるが、南壁は北壁に比べ立ち上がりが急である。覆土はレンズ状堆積。寛政8(1796)年以後に構築された遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

S K 122 (図版10・11・58)

F 7にある隅丸長方形の土坑。長さ254cm、幅136cm、深さ45cmを測る。底面は狭く、側壁は外傾するが、西壁に比べ東壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状堆積で5層に分かれ、1・2層は茶褐色シルトを基調とする土層である。寛政8(1796)年以前に構築された遺構である。遺物は磁器皿(図版20 85~87)等が出土している。

S E 154 (図版10・11)

F 7にある円形の素掘り井戸。径88~104cm、深さ95cmを測る。底面はわずかに内彎し、側壁は両壁ともほぼ垂直に立ち上がるが途中で屈曲し外傾して広がる。覆土はレンズ状堆積で4層に分かれ、最上層の茶褐色シルト層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。寛政8年以前に構築・廃絶した遺構と考える。遺物は出土していない。

S D 116 (図版10・11・58)

G 7にある南-北方向にのびる溝。長さ780cm、最大幅56cm、深さ24cmを測る。底面は彎曲し、西側壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東側壁はやや外傾する。S K 112に切られる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれる。上層の茶褐色シルト層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。肥前系磁器碗・徳利(図版20 83・84)が出土した。

S D 153 (図版10・11・58)

G 7にある南北にのびる溝。長さ328cm、最大幅60cm、深さ58cmを測る。断面形は「U」字型、覆土は水平堆積で2層に分かれ、最上層の茶褐色シルト層は寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。

S K117 (図版10・11)

G7にある不整形の土坑。長軸120cm、短軸100cm、深さ42cmを測る。排水溝により一部を切られる。底面は内彎し、側壁は外傾する。覆土はレンズ状堆積で、3層に分かれ、1層は茶褐色シルトであり寛政8(1796)年の洪水堆積層、3層は炭化物を多量に含む層である。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

S D111 (図版10・59)

G7にある南北にのびる溝。S D139と切り合い関係があるが、前後関係は不明。また南半の形状はわからない。最大幅36cm、深さ15cmを測り、断面形は「U」字型となる。遺物は出土していない。

S D138 (図版10・59)

G8にある南北にのびる溝。長さは778cm、最大幅102cm、深さ12cmを測る。断面形は「U」字型となる。覆土は寛政8年(1796)の洪水堆積層と考える灰色シルト混茶褐色シルトの単層。遺物は出土していない。

S D139 (図版10・59)

G8・9にある南北にのびる溝。S D111、S D138に近接し平行する。長さ482cm、最大幅78cm、深さ16cmを測る。底面は西から東に向かって緩やかに傾斜し、側壁はともに外傾するが西壁に比べ東壁の立ち上がりが急である。覆土は寛政8年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトの単層。肥前系磁器蓋(図版28 287)が出土している。

S D130 (図版10・11・59)

F8にある東西にのびる溝。長さ442cm、最大幅68cm、深さ14cmを測る。覆土は寛政8年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトの単層。磁器碗(図版19 81・82)が出土している。

S D133 (図版10・11・59)

F8にありS D133とほぼ平行し東西にのびる溝。長さ452cm、最大幅56cm、深さ30cmを測る。断面形は「U」字型、覆土は水平堆積で2層に別れ、上層は寛政8年(1796)の洪水堆積層と考える茶褐色シルト層である。遺物は出土していない。

S K151 (図版10・58)

F7にある楕円形の土坑。長軸168cm、短軸90cm、深さ40cmを測る。底面はわずかに内彎し、側壁は南壁に比べ西壁の立ち上がりが急である。S D133と一部切り合うが、前後関係は不明。石製硯(図版32 23)が出土した。近世の遺構と考える。

S K144 (図版10・11・58)

F7にある幅円形の土坑。遺構の一部が排水溝によって切られる。長軸292cm、短軸100cm、深さ6cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁は内彎して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分けられる。寛政8(1796)年以前に構築・廃棄され、洪水時には完全に埋没していた遺構と考える。陶器・磁器皿(図

4. 遺構各説

版20 88・89) が出土している。

S D 124 (図版10・11・58)

H 8にある東西方向にのびる溝。最大幅96cm、深さ18cmを測る。西側が暗渠に切られるため全長は不明。底面は内彎し、側壁も内彎気味に立ち上がる。S K 125を切る。覆土はレンズ状堆積で3層にわかれ、2・3層には炭化物が多量に混じる。年代を特定できるような遺物は出土していない。

S K 125 (図版10・11・58)

H 8にある土坑。S D 124に切られるため全形は不明だが、径80cm前後になるものとする。深さ24cmを測る。底面はやや内彎し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれ、下層には炭化物を多く含む。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S K 131 (図版10・11・59)

F 8にある不整形の土坑。短軸114cm、深さ32cmを測る。東側はS D 139と切りあっているが、前後関係は不明。長軸は620cm前後になるものとする。底面はほぼ水平で、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で4層に分かれ、3層には焼土、4層には炭化物が多量に入る。寛政8(1796)年以後に構築された遺構である。磁器皿、陶器椀・播鉢(図版24 186~188)が出土した。

S K 132 (図版10・11・59)

F 8にある不整形の土坑。長軸372cm、短軸312cm、深さ32cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で2層に分かれる。寛政8年(1796)以後に構築された遺構である。遺物は陶器播鉢(図版31 333)が出土した。

S K 129 (図版10・11)

G 8にある土坑。約半分を暗渠に切られる。形態は楕円形になるものとする。長さは不明だが、最大幅176cm、深さ30cmを測る。底面は西に向かって傾斜し、東壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積で4層に分かれる。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S K 196 (図版12・13)

D 3区にある円形の土坑。径175~180cm、深さ64cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は南北とも途中テラスを持ち、以後直立気味に立ち上がる。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S E 198 (図版12・13・64)

D 2・3にある円形掘りの井戸。径196~224cm、深さ130cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁はともに外傾して立ち上がるが、南壁に比べ北壁の立ち上がりが急である。S D 166と切り合いがあり、S D 166を切る。土器・陶磁器(図版21 114~121)・石製品(図版33 36~41)・木製品(図版38・39 35~47)が多く出土した。当初プランを確認できなかったため遺構覆土の状況は不明であるが、出土物から考え18世紀中葉前後に廃棄された遺構と考える。

S K 199 (図版12・13・64)

D 2にある円形の土坑。径140～156cm、深さ82cmを測る。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がる。S D 166を切る。覆土はレンズ状堆積。1～3層は茶褐色シルト層を基調とする土層であり、これは寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える。2層は地山起源の土層、4層は炭化物を多く含む。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。図化できる遺物は出土していない。

S K 201 (図版12・13)

E 2にある円形の土坑。長さ132cm、幅104cm前後の不整形の土坑である。深さは36cmを測る。底面は内彎し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積であり、2層は炭化物を多く含む。遺物は出土していない。

S E 202 (図版12・13・65)

D 2にある円形素掘りの井戸。径192～204cm、深さ92cmを測る。底面は彎曲し、両側壁とも途中で段をもつ。S K 201を切る。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルト層は寛政8(1796)年の洪水堆積層である。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構と考える。陶器壺・稲鉢(図版21 124・125)が出土した。

S K 203 (図版12・13・65)

D 2にある円形の土坑。径104cm、深さ56cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁は内彎気味に立ち上がる。S E 202に切られる。後述するS E 202の覆土最上層が寛政8(1796)年の洪水堆積層と考える茶褐色シルト層であり、寛政8年以前に構築されたものであることは確かだが、上限は不明で、中世に遡る可能性がある。覆土は3層が水平堆積、1・2層はレンズ状堆積である。遺物は出土していない。

S K 204 (図版12・13・64)

D 2にある円形の土坑。径76～88cm、深さ52cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はほぼ直立する。覆土はレンズ状堆積であり、4・5層は炭化物を多量に含む。底面から珠洲T種壺の底部が出土した。中世の遺構である。

S K 205 (図版12・13・65)

D 2にある不整形の土坑。長軸144cm、短軸98cm、深さ36cmを測る。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S K 197 (図版12・13・64)

D 2にある円形の土坑。径160～170cm、深さ46cmを測る。底面は内彎し、側壁はわずかに外反して立ち上がる。S D 166を切る。覆土はレンズ状堆積、2・4層は植物遺体を多く含む土層である。年代は不明。

S K 210 (図版12・13・65)

D 2にある楕円形の土坑。長軸164cm、短軸136cm、深さ40cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はともに内彎気味に立ち上がるが、北・西壁にくらべ南・東壁の立ち上がりは急である。覆土はレンズ状堆積

4. 遺構各説

であり、最上層の茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。3層（最下層）は炭化物を多く含む。寛政8年以前に構築・廃棄された遺構である。遺物は出土していない。

S B 5（図版12・13）

D 2区にある梁間1間以上、桁行3間の南北建物（N-2-E）。東半を暗渠に切られるが総柱の建物になる可能性が高い。柱間寸法は桁行が北から370cm・320cm・250cm、梁間が北側が460cm、南側が440cmと不揃いである。



S K 230（図版12・13・63）

C 2区にある円形の土坑。径110～120cm、深さ62cmを測る。底面は内彎し側壁は東西両壁とも中位付下にテラスを持つ。覆土は1～4層はレンズ状堆積。年代は特定できない。遺物は出土していない。

S K 226（図版12・13・61）

C 1・2区にある円形の土坑。径160～180cm、深さ130cmを測る。底面はわずかに内彎し、側壁は外傾して立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。年代は特定できない。遺物は木製品が出土した。

S D 180（図版14・15）

F 2・3にある東-西方向にのびる溝。幅64cm以上、深さ20cm前後を測り、断面形は「U」字形となる。S D 165・166と切り合い関係があり、S D 165・166を切る。覆土は暗灰色シルトの単層。寛政8（1796）年の洪水時には完全に埋没していた遺構と考える。遺物は出土していない。

S D 165（図版14・15・66）

F 2・3にある東-西方向にのびる溝。幅68cm、深さ17cmを測り、断面形は「U」字形となる。S K 181・S D 180・166・F 2-ピット10と切り合い関係があり、S K 181・S D 180・F 2-ピット10に切られ、S D 166を切る。覆土は灰色シルトの単層。寛政8（1796）年の洪水時には完全に埋没していた遺構と考える。遺物は出土していない。

S E 176（図版15）

F 3にある円形素掘りの井戸。S D 166を切る。確認面で直径90～110cmを測る。S D 166と切り合いがあり、S D 166を切る。当初プランを確認できなかったため遺構覆土の詳細な状況は不明。近世の陶磁器・皿等（図版20 97～107）が出土した。

S E 190（図版14・15・66）

E 3にある円形素掘りの井戸。径208～216cm、深さ86cmを測る。底面はわずかに彎曲し、側壁は内彎気味に立ち上がる。覆土はレンズ状堆積。最上層の茶褐色シルトは寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える。また、5・7・8層は植物遺体を多く含む土層である。寛政8年以前に構築・廃絶した遺構と考える。土器・陶磁器（図版20 108～113）が比較的多く出土した。

S K 191 (図版14・15)

E 3にある隅丸長方形の土坑。長さ120cm、幅84cm、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、側壁は内彎気味に立ち上がる。S D 195を切る。覆土はレンズ状堆積で3層に分けられる。1・3層は灰褐色ないしは暗灰褐色シルトだが、2層は地山起源の混入物の少ない土層である。寛政8年(1796)以後に構築された遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。

S K 192 (図版14・15)

E 2にある円形の土坑。径132~136cm、深さ76cmを測る。底面はほぼ平坦であり、側壁はともに内彎気味に立ち上がるが、東壁に比べ、西壁の立ち上がりが急である。覆土はレンズ状堆積。寛政8年(1796)以後に構築された遺構の可能性が高い。遺物は出土していない。なおS K 193・194も遺構覆土・堆積状況が類似しており近接した時期のものとなる可能性が高い。

S D 178 (図版14・15)

D・E 2にある溝。断面は「U」字形であり、覆土はレンズ状堆積。寛政8(1796)年の洪水堆積層の上から掘り込まれ、S D 166を切る。確認面で幅160~180cm、深さ20cm前後を計る。陶磁器碗・皿等(図版20 90~96)が出土した。

S D 166 (図版14・15・62)

C 2からG 3にかけて南-北方向にのびる溝。幅420cm以上、深さ130cm前後を測る。底面は彎曲し、東西両側壁とも中位付近に段をもつ。S E 176・198・S K 197・199・S D 165・180・195と切り合い関係があり、どの遺構よりも古い。覆土はレンズ状堆積。9層は炭化物、13層は植物遺体を多量に含み、12層には砂粒が多く混じる。また16層(最下層)は砂層である。1~4層を中心に中世の土器・陶磁器(図版17 1~4・6~20)、石製品(図版33 36~41)、木製品(図版35 1~13)が多く出土したが、最下層付近から8世紀後半から9世紀に比定できる須恵器壺(図版17 5)が出土している。埋没時期は14世紀と考えるが、掘削の時期については8世紀後半から9世紀代に遡る可能性がある。

S D 195 (図版14・15・66)

D 3からE 3にかけて南-北方向にのびる溝。幅60cm前後、深さ25cm前後を測る。底面はほぼ平坦で、東西両側壁とも中位付近にテラスがあるが、西壁に比べ東壁のテラスは幅広である。S D 166・S K 191・196・S E 198と切り合い関係があり、S D 166を切り、S K 191・196・S E 198には切られる。覆土はレンズ状堆積。B区北壁・直壁にはS D 195と思われるセクションが確認できないことからF 3付近で東側へ大きく屈曲した可能性が高い。中世の青磁小片が出土した。

第IV章 遺 物

出土した遺物には土器・陶磁器、土・陶磁製品、石製品、木製品等がある。以下では記述を行なう便宜上、1. 土器・陶磁器、2. 土・陶磁製品・石製品、3. 木製品、4. その他の4項目に分け記述を行なう。

1 土器・陶磁器

A 器種分類

出土量の多い近世の土器・陶磁器については、第8図に添って分類の概要を簡単に述べる。椀は丸椀・筒椀・杉形椀・広東椀・小広東椀・端反椀に細分した。また口径10cm以下で深身のものは細部の形態に関わらず、222のような無台のものも含めて小杯として一括している。皿は口縁端部付近の内面に浅い溝が巡るものは溝縁皿、口径が10cm以下の皿形態のものは小皿としているが、他のものは、158のような糸きり細工により平面隅丸方形となるものも含めて皿として一括してある。鉢も口縁部が直線的のびるもの、内彎するもの、途中で屈曲するものなど多様な形態があるが、特に細分していない。ただし、内面に鉾目のあるものは播鉢としている。瓶類は徳利とそれ以外のものに分けた。

B 土器・陶磁気各説

土器・陶磁器には古代・中世・近世のものがある。以下では、主要な遺構出土の土器・陶磁器について記述を行い、次いで包含層およびその他の遺構出土遺物の記述を行なう。

SD166出土土器（図版17・67～1～20）

中世の土器・陶磁器がまとまって出土した。中世の土器・陶磁器には青磁・珠洲・瓷器系陶器・土師器などがある。また遺構底面近くからは須恵器壺が出土している。

青磁椀（1～3） 1・2は口縁部の破片であり、このうち1は外面に片切り彫りにより蓮弁文を表す。蓮弁は比較的幅広く、溝がみられる。2は内外面とも文様が確認できない。3は体部下半から底部にかけての破片であり、体部下内面に片切り彫りにより割花文を表す。高台は比較的幅広く高台内側および畳付には施釉しない。

土師器皿（4） ロクロ成形で底部外面には回転系切り痕が確認できる。

須恵器直口壺（5） 口縁部および肩部内外面、体部内面はロクロナデ、体部外面は平行叩きの後ロクロナデを行う。体部内面には厚く炭化物が付く。

珠洲（6～15） 6は壺であり、口縁部はロクロナデ、体部は叩き成形である。肩部には円形の押印が確認できる。7・8は口径20cm前後の小型の鉢。口縁端部の形態は7が丸味を持ち、8は外傾する面を持つ。いずれも内外面ともロクロナデを行い、内面に鉾目は確認できない。9・10は鉢の片口の部分である。口縁端部の形態は9が上方に揃い、10は外傾する面を持つ。口径は不明だが、10は器壁が薄く小型のも、9は器壁が厚くそれよりもやや大型のものとなる可能性が高い。11～15は口径30cm以上になると思われる

播鉢。成形はいずれも内外面ともロクロナデである。11・12は口縁端部を外側につまむ。13は体部破片であり内面には9本1単位の細く浅い卸目が確認できる。14・15は底部であり、外面は静止糸切り痕が確認できる。15は見込みには8本1単位の卸目が「米」字状に確認できる。

瓷器系陶器（16～20） 器種はいずれも甕と考える。16は肩部に沈線が2条巡る。17は受け口状口縁を呈する。18は三線格子目文+「×」の押印が肩部に巡る。19・20は底部であり、このうち20は立ち上がり付近に指頭圧痕が残る。いずれも葎神丘陵産である。

SD15（図版18・68-21～36）

近世の磁器碗・皿、陶器碗・皿・壺・徳利・播鉢などが出土した。

肥前系磁器碗・皿（21～28） 21～28は碗である。25は丸碗。細く高い高台を持つ。26は端反り碗。外面を6区画に区分し、葎と渦を交互に配置する。21～24は広東碗と考える。このうち21は口縁部内面に四方葎がみられる。

27は小杯。体部外面には草花を表す。

28は皿。見込み蛇ノ目軸割ぎであり、高台は施釉しない。内面に染付による文様がみられるが意匠は不明である。

陶器碗・皿（29～31） 29は京焼風陶器皿。底部は蛇ノ目凹高台であり、高台畳付け以外は施釉する。内外面とも染付による文様があるが意匠は不明。30はいわゆる刷毛目唐津の碗。細く低い高台がつく。31は碗。内面には透明釉、体部外面には鉄釉がかかるが、体部下半および高台には施釉しない。

陶器播鉢（35・36） ともに卸目が密に入る。35は口縁部が外側に屈曲し、口縁部下位に凸帯が巡る。36は端部の丸い高台を持つ。

その他（32～34） 32は京焼風陶器鉢。口縁端部が外側にわずかに屈曲する。33は壺の肩部と考えるが、他の器種の可能性がある。肩部には斜め方向の沈線が細かいピッチで巡る。34はいわゆる刷毛目唐津の徳利。肩部と体部下半に白泥・刷毛目による直線が密に巡る。

SK20（図版18・68-37～53）

覆土上層から多くの遺物が出土した。磁器碗・皿、陶器皿・鉢・播鉢・壺・甕等が確認できる。残存度の高いものが多く、廃棄時の一括性は高いものとする。

肥前系磁器碗・皿（37～42） 37～39は丸碗であり、いずれも比較的高い高台をもつ。内面は無文、高台内側にはくずれた「天明年製」の銘が入る。

41は37～39に比べ幅広の高台をもつ。見込み蛇ノ目軸割ぎで、高台無釉である。

42は肥前系磁器皿。ロクロ成形ののち、口縁部に型押し成形を行う。幅広で低い高台をもち、高台畳付けには砂が付着する。

肥前系陶器皿（43・44） いわゆる溝縁皿である。外面には白色に近い灰釉がかかる。このうち43は見込みに砂目痕が残る。

陶器鉢（47～49） 47は京焼風陶器。口縁端部が上方に屈曲する。48・49は肥前系陶器の鉢。48は口縁端部が上方に屈曲する。49は口縁部が肥厚し、内面及び口縁部外面に透明釉を掛け、体部下半から高台にかけては無釉。2点とも内面は白泥・刷毛目による波状文などの装飾を施す。

陶器播鉢（50・51） 51は幅広の端面をもち、沈線が2条巡る。産地は不明。50は肥前系のもので、口

縁端部が玉縁状となる。

その他 (45・46・52・53) 45・46は無軸の陶器。45は皿。体部下半から底部にかけてロクロケズリをおこなう。46は天日台である。底部は糸切り後無調整。2点とも色調・胎土が類似する。肥前系と考えるが、別の産地の可能性もある。

52は肥前系陶器壺。ロクロ成形であるが、底部外面は不調整。肩部には沈線が2条巡り、内面には格子目文が残る。53は肥前系陶器甕。ロクロ成形である。肩部には凸帯が巡る。内面には格子目文が残る。

S D 41 (図版19・69-54~60)

肥前系磁器を中心に比較的まとまった遺物が出土した。磁器碗・皿、陶器壺等がある。

肥前系磁器碗・皿 (54~58) 54・55は碗。54は体部が直線的のび、細く高い高台をもつ。55は54に比べると低い高台をもつ。内面は無文、高台内側には「太明年製」銘が入る。

56~58は皿。56は口径20cmを超える大型のものである。57は底径が小さく幅広い高台をもつ。見込み蛇ノ目軸割ぎで高台無軸。58も低平な高台をもち、高台畳付には離れ砂がみられる。

陶器壺 (60) 肥前系のものである。ロクロ成形で底部外面は不調整。内面には指頭圧痕がみられる。

S E 45 (図版19・69-61~63)

61・62は肥前系磁器碗。2点とも細身の高台をもつ。61は染付により外面に一重網目文を表す。62は二次的に熱を受けている。外面に染付により文様を表すが意匠は不明。63は肥前系磁器皿。底径が大きく、高台は細く低い。外面には染付により唐草文を表す。

S E 47 (図版19・69 64~68)

64は肥前系磁器碗。細身の高台をもつ。内面は無文。高台内側にはくずれた「太明年製」の銘が入る。65は陶器鉢。削り出しによる断面方形の低い高台をもち、外面には鉄軸が掛かる。産地は不明。

66~68は陶器播鉢。66は断面方形の高台をもち、内外面とも鉄軸が掛かる。内面には放射状の卸目が密に入る。67・68は肥前系のものである。底部外面は糸切り後無調整、内外面とも無軸である。内面には放射状の卸目が67は密、68は67に比べ疎らに入る。

E 7・ピット10 (図版19・69-69~72)

69は肥前系磁器の広東椀である。外面にはよろけ縦溝、見込み中央には手書きによる二重井桁を表す。70は京焼風陶器。内外面とも染付による文様を表すが意匠は不明。71は肥前系磁器の仏飯器。外面は染付による唐草文を表す。72は肥前系陶器鉢。いわゆる刷毛目唐津であり、見込蛇ノ目軸割ぎで高台無軸である。

S K 95 (図版19・69-73・74)

73は陶器灯明皿。内面及び体部外面には透明釉が掛かるが、底部は糸切り後無調整で無軸。74は陶器播鉢。底部外面は糸切り後無調整。内外面とも無軸であり、内面は放射状の卸目が疎らに入る。

SE100 (図版19・69-75・76)

75は肥前系磁器皿。外面は無文であり、内面には染付により文様を表すが意匠は不明。76は口径10cm前後の小杯。内面は無文、外面には染付により網干を表す。

SE21 (図版19・69-77・78)

77は肥前系磁器の丸碗。内面に軸のムラがみられる。78は肥前系磁器皿。低平で幅広い高台をもち、壘付けには砂が残る。

SK91 (図版20・69-79・80)

79は肥前系磁器筒碗。底部は蛇ノ目凹高台であり、底部蛇ノ目軸刺ぎ。染付により外面には菖蒲、口縁部内面には四方禪文が巡る。80は肥前系磁器の小広東碗である。

SD130 (図版19・69-81・82)

81・82ともに肥前系磁器碗。81は外面に染付により一重網目文を表す。82は細く低い高台をもつ。見込み中央には手書き五弁花がある。

SD116 (図版20・69-83・84)

83は肥前系磁器碗。外面は染付により一重網目文を表す。84は肥前系磁器徳利。口縁端部は外形する面をもつ。

SK122 (図版20・69-85-87)

85-87は肥前系磁器皿。85・86はともに低平で幅広い高台をもち、高台壘付けに砂が付着するが、85は86に比べ底径が小さい。87は底径が大きく、高台は細く低い。

SK144 (図版20・70-88・89)

遺物は2点のみの出土であるが、ともに残存度は高く廃棄時の一括性は高いものとする。88は肥前系磁器皿。底径は小さく、低平で幅広い高台をもつ。口縁部は型打ち成形を行う。89は肥前系陶器皿。88同様、底径は小さく幅広い高台をもつ。見込み蛇ノ目軸刺ぎで、高台無軸。口縁部内面には鉄絵による帆掛け船の文様がみられる。

SD178 (図版20・70-90-96)

磁器碗・皿、陶器碗、土師器焙烙などが出土した。

肥前系磁器碗・皿 (90-94) 90・91・93は碗。90は広東碗である。91は細く低い高台をもち、見込みには染付による手書き五弁花を表す。93は内外面とも無文である。

92・94は肥前系磁器皿。92は口縁端部がわずかに外反する。外面には唐草文を表す。94は輪花を持つもので、染付により外面に唐草文、内面に型紙刷りの牡丹唐草文を表す。

その他 (95・96) 95は京焼風陶器杉形碗。高台は無軸。外面には鉄絵による若松文を表す。96は土師器焙烙。わずかに内傾する比較的長い口縁部をもち、底部は丸底となる。

S E 176 (図版20・70-97~107)

肥前系磁器碗・小杯 (97~102) 97~100は肥前系磁器碗。97は染付により内面に一重網目文、外面に二重網目文を表す。98は体部外面に染付により文様を表すが意匠は不明。99は見込蛇ノ目軸割ぎで高台無軸である。100は細く低い高台をもつ。内外面とも素書きの染付により文様を表す。

101・102は肥前系磁器小杯。内外面とも無文である。

陶器碗・皿 (103~106) 103は碗。口縁端部はわずかに外反する。内外面とも細かい貫入が入る灰釉がかかる。104は京焼風陶器杉形碗であり、高台は無軸。外面には鉄絵により若松文を表す。

105・106は肥前系陶器皿。105は底径が小さく、低平で幅広い高台をもつ。見込み蛇ノ目軸割ぎであり、高台無軸。高台畳付けには糸切り痕が残る。106はいわゆる刷毛目唐津。見込み蛇ノ目軸割ぎで、高台無軸になるものとする。内外面とも鉄釉が掛かる。

その他 (107) 肥前系陶器徳利。内外面とも鉄釉が掛かり無文である。

S E 190 (図版20・70-108~113)

肥前系磁器碗・肥前系陶器播鉢・土師器焙烙などが出土した。出土した点数はそれほど多くないが、残存度の高い個体が多い。廃棄時の一括性は高いものとする。

肥前系磁器碗 (108~110) 109は染付により外面に梅花文を表す。高台内面には染付によりくずれた「太」の銘がはいる。110は細く低い高台をもち、見込み中央にコンニャク印判による花文がある。

肥前系陶器播鉢 (111) 内外面とも鉄釉が掛かる。高台畳付けには砂が付着し、見込みにには重ね焼痕が確認できる。内面には放射状の御目が密に入る。

土師器焙烙 (112・113) とともに比較的長い口縁部が内傾気味にのび、底部は丸底となる。このうち

112はほぼ完型の資料であり口縁部外面に「高井」の押印がある。

S E 198 (図版21・71-114~123)

肥前系磁器碗・皿、陶器碗・灯明皿・鉢・播鉢、土師器火入れなどが出土している。多くが覆土中位からままとって出土したものであり、廃棄時の一括性は高いものとする。

肥前系磁器碗・皿 (114~116) 114・115は碗。114は比較的高い高台をもつ。外面には染付による二重網目文を表すが、内面は無文。115も比較的高い高台をもち、見込み蛇ノ目軸割ぎである。116は大形の皿。底径は大きく、比較的高い高台がつく。染付により外面には唐草文、見込み中央にはコンニャク印判の五弁花、高台内側の中央には渦福を表す。

陶器播鉢 (121~123) 3点とも内外面とも鉄釉が掛かる。121・122は肥前系であり、見込みにには重ね焼痕、高台畳付けには砂が付着する。内面には放射状の御目が密に入る。123も内面には放射状の御目が密に入る。産地は不明。胎土中には長石粒を定量含む。

その他 (117~120) 117は京焼風陶器碗。見込み蛇ノ目軸割ぎで、高台無軸。見込みにには鉄絵により帆掛け船を表す。産地は不明。

118は陶器灯明皿。内面には透明釉が掛かるが、外面は無軸。底部から体部下半にかけてロクロ削りを行う。産地は不明。

119は土師器火入れ。ロクロ成形であり、橙色と白色の粘土により木目状の文様を表す。口縁端部には微細な剝離痕が密に巡り、内面には煤が付着する。

120は陶器鉢。有台で口縁部には片口がつく。内面及び口縁部外面には鉄釉が掛かる産地は不明。

SE212 (図版21・72-124・125)

124は陶器壺。低い断面方形の高台をもつ。産地は不明。125は陶器播鉢。見込みには卸目が「米」字状に入る。産地は不明だが、越中瀬戸の可能性がある。

SB1 (図版22・72-126・127)

126は肥前系磁器皿。SB1ピット8からの出土であり、底径は小さく、幅広で比較的高い高台をもつ。見込み蛇ノ目軸割ぎであり、高台は無軸。127は肥前系陶器皿。SB1ピット5からの出土であり、底径は小さく幅広で低い高台がつく。125と同様に見込み蛇ノ目軸割ぎであり、高台は無軸。

SK8 (図版22・72-126-142)

ガラス片などとともに近世の陶磁器がまとめて出土した。陶磁器は残存度の高いものが多い。調査時にはSK8そのものは近現代に構築されたものと考えたが、ガラス片など近現代の遺物は、部分的な攪乱から出土したもので、SK8そのものは近世の遺構である可能性が高いと現在は考えている。

磁器碗・皿・灯明皿・徳利、陶器皿・蓋・壺・播鉢がある。

肥前系磁器 (128-134・139) 128-132は皿。128は口縁端部が外反する。底部は蛇ノ目凹高台で全面施釉。129は底径が大きく断面三角形の高台がつく。見込み蛇ノ目軸割ぎ。見込み中央にはコンニャク印判による五弁花が確認できる。130は口径に比べ底径が大きく、細く低い高台を持つ。口縁部は型打ち成形。二次的に熱を受けている。131は口径約8cmの小型の皿。細く低い高台を持つ。口縁端部は口鉢。132は口径約22cmを測る輪花を持つ大型の皿。高台内側にはハリ支えのあとが残る。染付により外面には唐草文、見込には松竹梅を表す。

133は碗。細く低い高台を持つ。見込み中央には染付により崩れた「寿」の銘が入る。134は灯明皿。内面および体部外面上半は施釉するが、体部外面下半および底部は無軸。内外面とも無文である。139は肥前系磁器徳利。体部外面には染付により竹・山等を表す。

肥前系陶器播鉢 (140-142) 140は全面に施釉し、141・142は高台を除き他の部分に施釉する。また140・141は見込みに重ね焼痕が残る。いずれも内面には放射状の卸目が密に入る。

その他 (134-139) 134は磁器灯明皿。底部外面は無軸、内外面とも無文である。135は陶器灯明皿。内面には菊と3条の弧の浮文がつく。内面および口縁部外面は施釉するが、体部外面および底部外面は無軸。136は瀬戸・美濃の小皿。口径は8cm前後を計り、口縁部が波状となる。全面に灰釉が掛かる。

137は陶器土瓶蓋。擬宝珠型の蓋を持ち、下方にのびる返りがつく。外面には濃緑色の釉が掛かり、内面は無軸。肥前系と考えるが他の産地の可能性もある。

138は陶器壺。底部外面は糸切り後無調整。外面には透明に近い釉が掛かるが、内面および底部は無軸。肥前系と考えるが他の産地の可能性もある。

SK69 (図版22・23・73・74-143-167)

多くの遺物が出土した。磁器碗・皿・徳利、陶器皿・徳利・鍋・播鉢などがある。

肥前系磁器碗・皿 (143-157) 143-149は皿。143は見込み中央にコンニャク印判による五弁花、高

台内側中央に渦福、体部外面には唐草文を染付により表す。144は見込み蛇ノ目軸割ぎ。見込み中央にはコンニャク印判による五弁花、体部外面には唐草文を染付により表す。144~146は底部が蛇ノ目凹高台となるもの。146は高台が低いが、145・147は低い高台を持つ。また、145・146は底部蛇ノ目軸割ぎを行うが、147は行わない。148・149は口径約11cmの小型の皿。ロクロ成形ののち口縁部に型打ち成形を行う。

150~153は広東椀蓋、154・155は広東椀、156・157は小広東椀である。151と155、152・153と156・157は文様が同じであり、それぞれ対となる。

徳利・瓶類 (160~163) 160・161は肥前系磁器徳利もしくは瓶。160は直線的にのびた頸部が口縁端部でわずかに屈曲する。161は口縁部がラッパ状に開き、端部は上方に屈曲する。

162は肥前系陶器徳利。160と同様に直線的にのびた頸部が口縁端部でわずかに屈曲する。内外面ともに鉄釉がかかる。

163は陶器瓶。内外面とも透明釉が掛かる。底部外面は回転系切り後無調整。

陶器行平鍋 (165~167) 内面および体部外面上半に施釉し、底部外面および口縁部は無釉。165・167は鉄釉、166は灰釉である。体部外面には4~6段の細い刻みが密に巡る。産地は不明。

その他 (158・159・164) 158は京焼風陶器皿。底部はロクロ成形であるが、口縁部および体部は系切り細工により平面形が隅丸長方形となり、長軸両端には把手がつくものと思われる。高台無釉であり、外面は無文、見込みには染付により竹を表す。

159は陶器播鉢。ほぼ全面に鉄釉がかかる。見込みには釘目が密に入る。胎土中には長石粒が一定量みられる。産地は不明。

164は肥前系陶器壺の体部。内面には同心円文が残る。

S K 96 (図版24・74-168~174)

磁器椀、土師器鉢・植木鉢、瓦器火鉢などが出土した。

168は肥前系磁器の広東椀。169・170・174は土師器植木鉢。3点ともロクロ成形である。169・170は口縁部が玉縁状になる。このうち170は外面に男性の人物をよび文字を墨書により表すが、文字は判読不可。体部内面および底部内外面にも墨痕がみられる。174は口縁部が外側に屈曲する。

171~173は瓦器火鉢。3点ともロクロ成形である。171・172は外面にスタンプにより草花文を表す。173の内面にはカキメ状の沈線が巡る。

S K 112 (図版24 175~182)

磁器椀・皿、陶器灯明皿・陶器壺がある。

肥前系磁器椀・皿 (175~180) 175~178は肥前系磁器椀。175・176は小広東椀であり、175は見込み蛇ノ目軸割ぎである。177・178は端反椀である。

179・180は皿。179は底径が小さく、低平な高台を持つ。180は179と比べると底径が大きく、細身で高い高台を持つ。

その他 (181・182) 181は陶器灯明皿。底部外面および体部外面下半はヘラケズリを行う。内面および口縁部外面には透明釉が掛かるが体部下半および底部外面は無釉。

182は肥前系陶器壺。口縁端部は内面に肥厚する。

1. 土器・陶磁器

S E 80 (図版24・29・75・81-183-185・319)

183は陶器灯明皿。底部外面は回転糸切り後無調整。内面および口縁部外面には鉄軸が掛かるが、体部および底部外面は無軸。

184は陶器鉢。削り出しによる断面方形の低い高台がつく。内面は鉄軸が掛かるが外面は無軸。

185は陶器壺。口縁部が短く屈曲する。内外面に鉄軸が掛かるが口縁端部は無軸。

319は播鉢。口縁部が玉縁状を呈する。内外面とも鉄軸が掛かり、見込みには重ね焼痕が残る。

S K 131 (図版24・75-186-188)

186は陶器播鉢。口縁部が外側に屈曲し、口縁部下端に断面三角形の凸帯がつく。187は陶器壺反碗。内外面とも透明軸が掛かる。188は肥前系磁器皿。底部は蛇ノ目凹高台で底部蛇ノ目軸割ぎ。内面には染付により家・山水を表す。

S K 177 (図版24・75-189・190)

189は陶器壺。体部内外面とも灰軸が掛かるが、底部外面は回転糸切り後無調整で無軸。190は肥前系磁器小杯。外側に踏張る高い高台を持つ。

包含層出土の土器 (図版24-31・75-82・191-353)

包含層出土の土器には中世と近世の遺物がある。

中世 (191-202)

191は青磁碗。外面には片切彫りにより、幅広で鎗を持つ蓮弁文を表す。192は土師器皿。非ロクロ成形であり、口縁部はヨコナデ、端部をわずかに上方に擴む。

192は土師器皿。いわゆる京都系のものであり、非ロクロ成形である。16世紀代のものと考えが17世紀以降に下る可能性もある。193-199は珠洲。193は壺の底部。底部外面は不調整、体部外面は平行叩き、体部内面には無文の当て具痕が残る。S K 202出土。194・195は播鉢。194は口縁端部が丸みをおび、195は若干内傾する面を持つ。196はN種壺。底部外面は静止糸切り痕が残る。197-199は壺もしくは壺の体部。外面は平行叩き、体部内面には無文の当て具痕が残る。

200-202は瓷器系陶器。いずれも壺の体部破片と考える。200には外面にハケメが残る。

近世 (203-351)

陶器碗 (203-205・223) 203は内面および体部外面に鉄軸が掛かり、高台は無軸。204は端反の碗であり、二次的に熱を受けている。205は京焼風陶器。223は口径約20cmを測る大型の碗。ロクロ成形のち口縁部は型押し成形により六角形とする。内面および口縁部体部外面には施軸するが高台は無軸。

陶器皿 (206-218・220・221) 206・207は肥前系の溝縁皿であり、206は見込みに砂目痕が残る。高台は無軸。208も肥前系のものであり、見込に砂目痕が確認できる。

209は無台の皿であり、底部外面は回転糸切り後無調整。210は見込蛇ノ目軸割ぎで高台内側も施軸し、高台畳付には砂目痕が残る。内面には鉄軸により文様を表すが意匠は不明。211は蛇ノ目軸割ぎで高台無軸、口縁部内面には鉄軸により模様を表す。

212・213・216はいわゆる刷毛目唐津。このうち212・213は見込み蛇ノ目軸割ぎで高台無軸である。

214・215は鉄軸がかかる。蛇ノ目軸割ぎで高台は無軸。

217は染付により内面に花文を表す。底部は蛇ノ目凹高台であり、高台は高い。218は見込みには灰釉が掛かるが高台は無釉。内面に染付により笹を表す。産地は不明。220は内外面とも無釉である。ロクロ成形で、底部外面および体部外面下半はヘラケズリをおこなう。221は瀬戸・美濃小皿。全面に灰釉がかかる。16世紀代に遡る可能性もある。

陶器灯明皿(219) 底部外面および体部外面下半はヘラケズリを行う。内面および口縁部外面には灰釉が掛かるが体部下半および底部外面は無釉。SE1出土。

陶器小杯(222) 内面および口縁部外面には灰釉が掛かるが底部は無釉。底部外面には回転系切り痕が残る。肥前系。

陶器壺(224) 下方にのびる返しを持つ。外面は施釉するが内面は無釉。産地は不明。

陶器加皿(225・226) 内面および体部外面に225は鉄釉、226は灰釉が掛かるが高台は無釉。225は瀬戸・美濃、226は産地不明。このうち225は16世紀ないしはそれ以前のものとなる可能性がある。

肥前系磁器椀(227~251・258~272) 227は口縁部型打ち成形。染付により内面には重文、外面には人物と山水を表す。228・231は細く低い高台を持つもので、染付により228は外面に花、231は外面に二重網目文、内面に一重網目文、見込みに菊花文を表す。229は底径が大きく細身で比較的高い高台を持つ。内面は無文。外面には染付による「寿」の銘を千鳥に配する。SE74からの出土。230は断面方形の高い高台を持つ。内面は無文、外面は染付により一重網目文を表す。236~238は底部に崩れた「大明年制」の銘が入るもので、内面は無文、外面には染付による草花文を表す。243~246・248は丸碗の口縁部。243~246は外面に染付による草花を表す。244はSK230出土。

249~251は筒碗。249・250は蛇ノ目凹高台であり、249は見込みに手書き五弁花がみられる。250は口縁部口鏝である。251は底径が小さく、低く細い高台を持つ。

232・233・242・247・272は小広東碗、258~266は広東碗蓋、267~271は広東碗である。このうち232は見込み蛇ノ目軸割ぎである。259・260は272、262~264は267とそれぞれセットとなるものとする。233はE7・ピット30出土。

肥前系磁器小杯(252~257) 252は外面に一重網目を表す。内面に釉のムラがみられる。253は口縁部がわずかに外反する。高台量付には離れ砂がつく。254は外側に踏張る高い高台を持つ。257は底径が小さく、細く高い高台を持つ。

肥前系磁器皿(273~286) 273は底径が小さく幅広で低い高台を持つ。

274・275は底径が大きく細い高台がつく。274は内外面とも無文、275は内面に墨弾きによる文様を表すが意匠は不明。

276~279は見込み蛇ノ目軸割ぎであり、276には見込み中央にコンニャク印判による五弁花がみられる。278・279は高台無釉で、内面には崩れた鳳凰文を表す。280は蛇ノ目軸凹高台の皿。高台は高い。

282は口径21cmの大型の皿であり、口縁部内面には蜻蛉草、見込み中央にはコンニャク印判による五弁花、高台内側には「成化年制」の銘がみられる。

283も大型の皿となる可能性が高い。見込みにはコンニャク印判による菊草花文、高台内側には二重の方形枠に渦福がみられる。

284は口径約7cm前後の小型の皿。外面には三重井桁を表す。285も口径約6cmの小型の皿。内面には樓閣山水文を表し、口縁部は口鏝。

286は内外面とも無文。内面および口縁部外面は施釉するが、底部は無釉。回転系切り痕が残る。

肥前系磁器蓋 (287~289) 287は体部が内彎し、口縁端部は幅広い面を持ち、煤が付着する。鈕はブリッチ状になるものとする。288・289擬宝珠型の鈕を持つ。289は口縁部が直線的にのびるが、289は内彎気味にのびた口縁部が、端部で外反する。このうち287はS D139出土である。

香炉 (290~292) 290・291は肥前系磁器であり、292は外面および口縁部内面に鉄軸のかかる陶器である。290は外面に七宝・内面に四方禪、291は外面にコウモリを染付により表す。

仏飯器 (293・294) 2点とも肥前系磁器である。293は外面に染付による半菊文がある。294は無文。

徳利・瓶 (295~298・300~303) 295~298は肥前系磁器徳利。297は体部外面に染付により遠山・帆掛船等を表す。298は焼き付けによる赤色の一重網目文がみられる。299は青磁の瓶。口縁部はラッパ状に開き、端部は上方に擴む。肩部には耳がつく。

300~304は陶器徳利。300・301はいわゆる刷毛目唐津。300の口縁部には鉄軸がかかる。302も肥前系陶器と考えられ、口縁部には鉄軸がかかる。303は外面に灰軸が掛かる。体部外面には鉄銑により文様を表す。

壺 (304~307) 304は口縁部が短く屈曲し、外面は透明がかかる。肥前系陶器である。305は内外面とも鉄軸が掛かり、肩部には沈線が2条巡る。306は頸部がわずかに屈曲し、口縁端部は外側に擴み出す。内外面とも鉛色の軸がかかる陶器である。産地は不明。307は壺の底部。外面には回転系切り痕が残る。肥前系陶器である。308は白泥・刷毛目により波状文を表す。口縁端部は幅広いの水平な面をもつ。

甕 (309~311) 309は口縁端部を外側に擴む。肩部には篋書きによる波状文がめぐる。310は内面に格子目文が残る。2点とも肥前系陶器である。311は口径約75cmをはかる大型品。越前焼である。

鉢 (312~318) 312・313は白泥・刷毛目により波状文を表す。314は内面および体部外面に透明軸がかかる。内面には釘彫により横線・波状文等を表す。高台は無軸。315は口縁端部が水平な面を持つ。胴部中央付近には櫛状の工具により唐草文を表す。316は内外面とも灰軸がかかる。317は内面および体部外面に透明軸が掛かるが高台は無軸。317は内面および体部外面に白色に近い灰軸がかかるが高台は無軸。316は産地不明だが、その他は肥前系のものとする。また313はS K110出土。

摺鉢 (319~335) いずれも陶器である。319~322は口縁部が玉縁状を呈する。内外面とも鉄軸が掛かり、見込みには重ね焼痕が残る。底部は削り出し高台で外面は無軸。

324・325は口縁端部に内傾する面を持つ。口縁部内外面に鉄軸がかかるが体部は無軸。内面には卸目が疎らに入る。2点とも肥前系。325はS D43出土。

326~329・331は口縁端部が屈曲し下端に断面三角形の凸帯がつくもの。いずれも肥前系のものとなる可能性が高い。このうち327は体部外面にカキメ状の多條の沈線が巡る。327はS E93、329はS E34からの出土である。

323・332は口縁部に沈線が2条巡る。323は高台畳付以外は鉄軸が掛かり、見込には重ね焼痕が残る。332は体部外面にカキメ状の多條の沈線が巡る。

330は口縁端部を外側に擴む。内面および口縁部・体部外面には鉄軸が掛かるが高台は無軸。

333・334は無台で内外面とも無軸。見込みに放射状の卸目が333は疎ら、334は333に比べ密に入る。ともに肥前系である。333はS K131、334はS K77出土。

335は高台を持ち、高台畳付以外は鉄軸が掛かる。内面には重ね焼痕が残る。

行平鍋 (336~339) 336・337は蓋、338・339は身である。338は体部外面に篋状工具による刻みが細かいピッチで4段に巡る。

火入れ (340・341・343) 340は土師器。口縁部は内彎し、端部は肥厚する。341は340と同一個体となるものと思われる。内面には煤が付着する。成形はロクロ成形である。345は瓦器。ロクロ成形で外面には線状の刺突が巡る。口縁端部は微細な剝離痕が密に見られる。

土師器植木鉢 (342・348) 2点とも口縁部は外側に屈曲する。ロクロ成形で胎土中に海綿骨子を含む。瓦器火鉢 (344~347) はいずれもロクロ成形。344・345は口縁部・胴部破片でありスタンプによる菊花・斜格子などの文様がみられる。346・347は底部であり、高い脚がつく。

土師器焙烙 (349) 口縁部は長く直立気味にのびる。底部外面にはヘラケズリを行う。

土師器火消し壺 (350・351) 350は蓋・351は身。ロクロ成形で内面には煤が付着する。

2. 土・陶磁製品・石製品

土・陶磁製品 (図版32・83 1~17)

1~9は陶器・磁器片円盤。陶磁器碗・皿の底部を用いて平面を略円形に仕上げたものである。1~6は肥前系磁器、7~9は肥前系陶器を用いる。側面は見込みから高台に向かって広がる台形状を呈するものが多い。縄文時代から中世にかけてみられる土器片円盤のような明確な使用痕は確認できない。

10・11は転用研削具。10は珠洲産もしくはT種壺、11は佐神産の瓷器系陶器摺鉢の破片を用いる。表面両面と各側面に部分的に研磨痕が残る。

12~14は泥人形。3点とも型押しによるものである。12は鳥類、13は扇子を持ち正座をする男性、14も正座をする男性である。

15~18は練炭の容器の蓋。最大径10~11cm前後の大型のもの (15・16) と8~9cm前後の小型のもの (17・18) がある。4点ともロクロ成形で頂部には回転系切り痕が残る。いずれも橙色で硬質の焼き上がりである。

19は長さ約6cm、最大径約4cmの大型の土鍾。重量は96.2gである。

石製品 (図版32・33・34・83・84 18~56)

出土した石製品には砥石・叩き石・石臼・硯等がある。

S D 166 (図版33・83 29~33)

29は下半が欠損するが平面は長楕円形になると思われる軽石。正面に研磨痕が確認できる。

30は扁平な棒状を呈する叩き石である。上下両端部・両側縁の一部・正面に敲打痕がある。

31は断面が扁平な形状を呈し、一端部が欠損する砥石。2つに分離し分離した小さい方を32とする。31は正面・両側縁に作業面を持ち、正面左側には成形痕が顕著に残る。32は正面・左右両側縁・下側縁に作業面を持つ。

33は一方が厚く他方が薄い直方体を呈する砥石。正面・右側縁に作業面を持つ。正面・右側縁は被熱し、煤が付着する。

S K 20 (図版33・83 34・35)

34は直方体状となる砥石。正面・裏面・左右両側面に作業面を持つ。35は三角柱状を呈する砥石。正面と右側面に作業面を持つ。

SE 198 (図版33・83 36~41)

36・38・39は一方が厚く他方が薄い直方体を呈する砥石。36は正面・裏面・左右両側面・上側面に作業面を持ち、裏面・上側面には成形痕が残る。また正面には敲打痕が確認できる。38は正面のみに作業面を持つ。39は正面・右側縁に作業面を持つ。

37は破損した砥石の細片を再度砥石として用いている。平面形は台形を呈する。

40は偏平な直方体を呈する砥石。上下両端・左側が欠損する。正面・裏面・右側縁に作業面を持つ。また右側縁には断面「U」字形の浅い溝が2条見られる。41は三角柱状を呈する砥石。正面および左右両側面に作業面を持つ。石材は39~41は目の粗い砂岩を用いたもの、他のものは凝灰岩である。

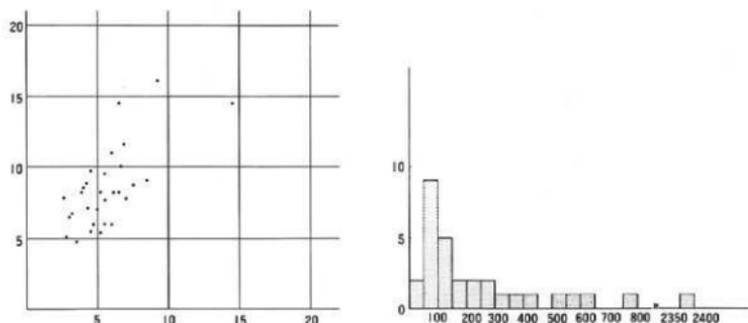
SD 15 (図版34・84 42~44)

42は直方体を呈する砥石。両端部が欠損している。正面・裏面・左右両側面に作業面を有し、裏面の一部には成形痕がみられる。

43・44は一方が厚く他方が薄い直方体を呈する砥石。43は両端部を欠損する。正面・裏面・左側面に作業面を有する。44は一端部を欠損する。正面・裏面・左右両側縁に作業面を有する。

SK 112 (図版34・84 45・46)

45は直方体を呈し、一部を欠損する砥石。正面・裏面・左右両側面・下側面に作業面を持つ。また正面には細かい敲打痕・断面「U」字形の浅い擦り溝が見られる。46は一方が厚く他方が薄い直方体を呈する砥石。正面・裏面・左右上下の各側面に作業面を持つ。



第9図 砥石の大きさと重量

その他の遺構・包含層（図版32・34・83・84 20～28・45～58）

硯（20～23） 21は下半を欠損する。中央に仕切りがあり、片側には朱が残っている。23はほぼ全形がわかる資料であり、長さ13.2cm、幅6.7cmを測る。石材は凝灰岩である。山梨県雨畑産の可能性が高い。S K151出土。20も下半を欠損するが、幅は6.2cmであり、23とほぼ同様な形態になるものと考えられる。滋賀県高輪で天草砥石を用いて作られたものである可能性が高い。22は小片のため詳細は不明。¹⁾

石臼（24） 粉引き白の上臼であり、直径は30cm前後になると思われる。臼の目は摩滅のため不明。石材は花崗岩である。

研磨具（25～28） いずれも砥石を用いたもので、2～3面に作業面を持つ。研磨の対象が何であるかは不明であるが、地元では高度経済成長期以前までは、鉄鍋の外面の煤をおとすために使用することが多くあったらしい。

砥石（47～57） 47は直方体を呈する砥石。一端部が欠損している。正面・裏面・左右両側面に作業面がある。正面には直径約3cmの窪みを持つ。上部約1/3が熱を受け煤が付着している。S D130出土。

48～50は扁平で板状の直方体を呈する砥石。48は正面・裏面・右側面に作業面を有するものでS D52出土。50は正面・左右両側面に作業面を有するもので包含層（F 8-4）出土。49は正面・裏面の一部に作業面を持つ。裏面の一部には成形痕が見られる。S K190出土。

51～54・57は直方体を呈する砥石。51は正面・左右両側面に作業面を有する。欠損している面を除いて煤が付着する。S K69出土。52は正面・左右両側面の一部に作業面を有する。S K 8 出土。53は他のものに比べやや薄手である。上下両端、左側縁を欠損する。正面・裏面・左側面に作業面を有する。E 7・ピット30からの出土。55は上下端を欠損する。54は一端部が欠損する。正面・裏面の一部・左右両側面に作業面を有し、正側面に成形痕が見られる。D 6-ピット20出土。57は正面・裏面・左右両側面・下側面に作業面を有する。裏面と左側面には整形痕が残る。S K226出土。

55は平面台形の直方体を呈する砥石。正面・裏面に作業面を有し、正面には断面「U」字型の深い擦痕が見られる。側縁が欠損し、欠損している面を除いて煤が付着する。

56は不定形な五角柱状を呈する砥石。正面・左右両側面のそれぞれ約1/2に作業面を有し、正面・左右両側面にそれぞれ成形痕が確認できる。S K42出土。

叩き石（58） 左側面に敲打痕が残る。欠損している面を除き被熱し煤が付着する。S K75出土。

3. 木製品

S D166（図版35・85 1～14）

1は船形。木裏から長方形の舟底を持つ船槽を、船首・船尾部分は厚く、舷側・舟底部分は薄手にくり抜いて作る。船首は両側面から尖頭形に、船尾は隅丸方形となる。

2は底板。柁目材を用いる。幅9.4cmを残して右側約1/3が欠損する。円盤の中心には周辺に幅約7mmの内側に傾斜する面を持つ径約1.5cmの孔があり、これを巡って等間隔に4ヶ所の小孔がある。小孔の平面形は円形に近い菱形を呈する。

3は角棒。柁目材を用いる。断面はやや扁平となる。上部は両側面から尖頭形に削り込み、先端は上面

1) 硯に関しては埴内光次郎氏より多くの教示をうけた。

3. 木製品

からの削りも加え隅丸方形に調整する。下端は欠損する。側面の削りは粗く、凹凸が残る。

4～7は板材。4・5は柀目材の平板で同一個体と考える。4の上端は摩耗し左端は隅丸、右端は下方から斜めに打ち欠く。下方は欠損する。左側に5ヶ所釘穴があり、このうち4ヶ所は周辺が赤褐色に変色、釘は黒色となって残る。いずれも鉄釘で裏面側から打ち込む。また下方2本の釘は腰折れて打ち込んである。5は上端が斜めに、下端は節部で不定形に欠損する。両側面は直角に成形するが、右側縁の一部は腐蝕のため欠失。6は柀目材を用いた細身の板材。上端は欠損、下端は摩耗のため丸みを帯びる。右側縁は欠損、左側縁はほぼ直角に仕上げる。7は柀目材を用いた板材。表面上部左側・裏面下部左側と右側面を欠損する。表・裏面とも平滑で、上下両木口はやや斜めに、左側縁は直角に仕上げる。中央部には結紐を止めるための小孔が約1cmの間隔で2個並ぶ。

8・9は同一個体と思われる折敷底板である。8は左側面の上下端を斜めに落とす。正面上部には加工痕が確認できる。中央には結紐を止めるための小孔が2個確ある。9は表面上部より工具痕が残る。また左下端には二個一對の釘孔がある。上面は腐蝕が進み器面が瘦せる。10～12も折敷の一部。11は中央よりやや上に方形の切り込みが入る。12は右側縁及び下方を欠損。上端は左上がりに成形する。

13は左側縁は鉤型に屈曲し、右側縁は径約27cmの円弧となる。右側縁の整形はラフで工具痕が明瞭に残る。

SE 25 (図版36・85 14～16)

14は板材。木取りは柀目である。左側縁・上下端とも欠損し原形不明。15は角材。木取りは板目である。上端の木口と上面から鋸を入れ長さ2.5cmの一枚組手を作る。組手中央に釘孔が残る。16は板材。木取りは柀目。左側縁・上下端とも欠損し原形不明。

SE 47 (図版36・85 17～20)

17は円形組物の側板。柀目材。上幅より下幅が狭いが、ほぼ長方形を呈する。左右両側面にそれぞれ傾斜をつけて削り、全体に緩やかに湾曲する。内面の上下に2本、外面の上・中・下部に3本の帯状の圧痕が残る。

18は角材。木取りは柀目。全面に浅い凹凸がある。上木口に楔状の割れが入る。下端は両側面から尖型に切り、表裏両面とも約0.3cmの厚さで段をつけ中心部を突き出す。上部中央に4ヶ所の釘孔があり、ヒゴ状の木釘が残っている。

19・20は反りを持つ角材。19の木取りは板目。上端に向かって反り上がる。裏面には円弧状の段差がある。20は上端の両側面を削り尖型をなすが、下端は欠損し原形は不明。材質・形状から考え同一器材の可能性が高い。

SK 69 (図版36・86 21～26)

21・22は円形板。21は柀目材。幅8.0cmを残し半円形に折損する。表裏とも黒漆塗。裏面円周に若干の面取りを行う。22は板目材。一部を欠損する。原形約23cmの底板を再加工し、径約20cmの蓋として利用しているものと思われる。

23は角材。木取りは板目。角材の四隅を面取りし隅丸とする。上下端とも表裏両面を削り、やや細めに作り頭部は角を落とす丸みを付ける。鉈づくりのためか裏面は特に凹凸が著しい。円形組物の把手になる

ものとする。24は板材。木取りは板目。上半を欠損する。左側縁の摩耗が著しい。25は下駄の歯。木取りは板目。台形を呈する。前面に圧痕が斜めに残る。26は丸太材を手斧もしくは鉈等の工具で打ち欠いた木片である。

SE 80 (図版38・86 27~34)

27・28は下駄。木取りは板目材。いわゆる露卯下駄である。台は厚く、台中央部を山形に造り出す。前端は隅丸方形、後端は後目から幅を狭め隅丸方形にまとめる。台裏面の前あごに鼻緒結びを納めるしゃくり部分がある。全面黒漆塗りであるが、裏面は剥落が著しい。長さに対し幅が狭く細身造りで女性用と思われる。

29・30は円形組物の側板。29は板目材、30は柾目材。ともに上幅より下幅が狭く、上方に29は円形、30は方形の孔を持つ。上木口・左右両側面にそれぞれ傾斜をつけて削り、全体に緩やかに彎曲する。30は下端表面に圧痕と加工痕、内面には底板痕が残る。30は下部中央には径約3.5cmの円形の孔が60度の角度で上方に向かってあく。

31は柾目の板材。表裏とも調整が拙く、厚さは上下左右とも均一でない。左側縁を欠損する。

32は棒状の木器。樹皮の付いた丸棒材で、頭部に長さ9.0cmの削りがある。中央部に長さ9.0cm、幅3.0cm、深さ1.0cmの削り込みがある。正面下半には擦痕が確認できる。下端部には5ヶ所に鋸様の工具で切り込みをいれその間を打ち欠くように落としている。下端は二方向から削り尖形を作る。用途不明。

33は下駄の歯。柾目材である。

34は径約9cmの円形板。木取りは柾目。欠損により幅約3cmを残して半円径を呈する。上面円周に沿って幅0.8cm圧痕が走る。

SE 198 (図版38・39・86・87 35~46)

35・36は円形板。木取りは2点とも板目である。35は断面形がほぼ直角になる。36の側面は下方に傾斜をつけ、裏面は円周を面取りし丸みをつける。

37は半円径板。木取りは柾目である。左端は磨耗のため円弧を欠く。裏面は磨耗が著しい。

38~40・42は円形組物の側板。いずれも柾目材である。同一個体と考えられ、口径約24cm、底径約21cm、器高14cm前後になるものとする。外面木口は面取りを行い、上・下部にタガの跡と考える圧痕が確認できる。内面下部に底板痕があり、底板痕の上3~4cm程度が黒変し痩せている。41も円形組物の側板である。木取りは柾目。左右両端の下端付近に円形の小孔がある。

43・44は角材。木取りはともに板目。43は下部にわずかに左上がりの小孔が両側面を貫通する。左側面の孔を中心に約2cm幅で他材との結合痕を持つ。45は板材。木取りは板目。

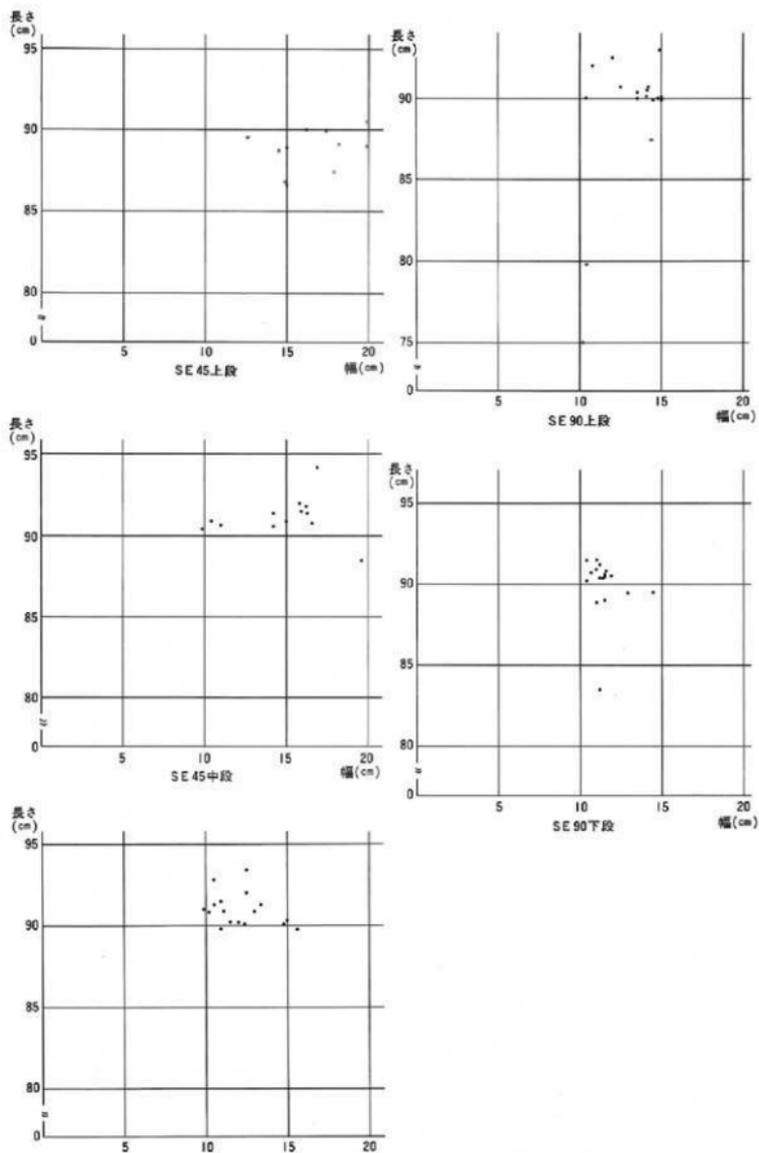
46・47は漆器柄。ともに横木取りである。46は高台がつき、口縁部がわずかに内湾する皿。前面に朱漆を塗るが、剥落が多い。47は胴部のみで法量は不明。内面朱漆、外面は黒漆地に黄漆で羊歯植物文様を表わす。

SE 90 井戸側部材 (図版39・89 58~65)

板組の桶側板が2段に重ねられていた。

上段の板組桶側板 (58~61) 板材17枚で構成される。大半のものが腐蝕により上端を欠損する。現存

3. 木製品



第10図 部材の大きさ

長87~93cm、厚さ2cm前後のものが大半を占める。幅は10~15cm前後と細身のものが多い。最も幅が広いものは15.0cm、狭いものは10.2cmである。また木取りはいずれも板目である。4点図示した。

58・61は正面・裏面ともほとんど加工痕が確認できず、縦断面が長方形となる。このうち58は下辺が右下がりとなる。また61は中位やや下よりに一辺1.5cm前後の孔が確認できる。

59は裏面下端に加工痕が確認できるが、縦断面形は長方形となる。

60は正面左右両側縁、裏面下端に加工痕が確認できる。縦断面は下端が先細りとなる。いずれも左右両側面上の端付近に釘穴が確認できるが、釘は遺存していない。

下段の板組桶側板(62~65) 板材18枚で構成される。長さは88~92cm、厚さ2~3cmのものが大半を占め、幅は10~15cmと細身のものが多い。幅が最も広いものは14.5cm、狭いものは10.4cmである。木取りはいずれも板目である。4点図示した。

62~65は裏面下端に加工痕が残り、縦断面は下端部が先細りとなり、上端付近には木釘が残る。このうち63~65は正面左右両側縁に加工痕が残る。また64は正面、65は裏面に鋸引きの痕が多く残る。63は下辺が若干右上がりとなり、64は大きく右上がりとなる。

SE45井戸側部材(図版40~42・90~92 67~79)

外側に方形の井戸側があり、その内側に板組の桶側板が3段に重ねられている。

上段の板組桶側板(66~68) 板材11枚で構成される。上端を欠損するものが多いが、現存長86~90cm、厚さ2cm前後のものが大半を占める。幅はばらつきがあり、13~20cm前後で、最も幅が広いものは19.9cm、狭いものは13.6cmである。木取りはいずれも板目である。3点図示した。

66~68はいずれも上端部を腐蝕により欠損する。また、外面にはタガを巻いた痕が1箇所残る。正面左右両側縁および裏面下端には加工痕が残り、縦断面は下端部が先細りとなる。木取りはいずれも板目である。65・66は下辺が右上がりとなる。

中段の板組桶側板(69~71) 13枚で構成される。長さ90~93cm、厚さ2cm前後のものが大半を占めるが、幅にはばらつきがあり、10~20cm前後で、もっとも幅が広いものは19.6cm、狭いものは9.9cmである。3点図示した。木取りはいずれも板目である。

69~71は正面にタガを巻いた痕が2箇所に見られる。上段の桶側板と同様、正面左右両側縁および裏面下端には加工痕が残り、縦断面は下端部が先細りとなる。左右両側面上の端近くに釘穴が確認でき、70は右側面、69は左側面に木釘が依存している。

下段の板組桶側板(72~75) 板材17枚で構成される。長さ90~93cm、厚さ2cm前後のものが大半を占める。幅は10~16cm前後と細身のものが多く、最も幅が広いものは15.6cm、狭いものは9.9cmである。4点図示した。木取りはいずれも板目である。

72~75は正面にタガを巻いた痕が3箇所確認できる。いずれも正面左右両側縁に加工痕が確認できるが、上・中段の側板とは異なり、裏面下端に明確な加工痕が見られず断面形も下端が先細りとならない。左右両側面上の端付近に釘穴が確認でき、71は右側面、73・74は左右両側面に木釘が残る。また72・73・75は両面に斜め方向の鋸引きの痕が多く残る。また72は下辺が左上り、73は下辺が右上がりとなる。

方形井戸側板(76~79) 76は外面に手斧による加工痕が顕著に残る。77は加工痕がほとんど確認できない。78・79は斜め方向の鋸引きの痕が数箇所確認できる。木取りは76・77は板目、78・79は柁目である。

4. その他

その他の遺構 (図版39・40・87・88 48~57)

48は樽円形板。木取りは柘目。両端は径約5.5cmの円弧を持つ。周縁に低い段が巡る。出土地不明。

49は半円形板。木取りは柘目。右側縁を一部欠損する。上下両端に円弧を持ち、円弧の縁は若干傾斜し、上下両側面は直角に整える。下側縁には別材を継ぎ合わせるための釘孔が2ヶ所あり、細い木釘が残存する。また表面中央下端付近に径約0.9cmの小孔がある。S K144出土。

50は露地下駄。下半を欠損する。台の形状は、平面形は隅丸方形、断面形は山形となる。

51は半円形板。木取りは柘目。断面形は円弧は傾斜し直線部分は直角に整える。上面の左端中央部に押皮綴しの紐を持つ。

52は上下端を欠損する。断面がわずかに彎曲しており、円形組物の側板となる可能性が高い。

53は板目の板材。平面形はほぼ長方形を呈する。上端は両側面から斜めに切り込みへこませ中央部で折り放す。下端は径約30cmの緩やかな円弧を持つ。断面形は、上面が若干甲高、下面は平坦である。右上端に鉋目と割れ目が、左上端には工具による切り刻みがある。また上面全面に横方向の工具痕が多数入る。

54は柘目の板材。上端を欠損する。下端は丸く仕上げ、外面には横方向の工具痕が多数入る。

55は杭。中央よりやや上位に抉りが入る。

56・57は柱痕。ともにS B 2のビットからの出土で、56はビット5、57はビット4である。57は目途穴が確認できる。

4. そ の 他

鉄滓・フイゴ羽口 (図版84)

いずれもS D116およびその周辺からの出土がほとんどである。フイゴ羽口はいずれも小片のため図化できなかった。出土した鉄滓の重量は581.9gである。S D166からは砥石および被熱礫が出土しており周辺で小鍛冶が行われた可能性が高い。

軽石

出土した軽石の総数は約500点である。包含層からの出土は少なく多くは遺構内からの出土である。出土した主な遺構としてはS E 2・S E 14・S E 20・S E 41・S E 45・S E 76・S E 198・S K110・S D15・S D43・S D117・S D130がある。図示したもの(図版32 25~28)のような明確な使用痕があるものは希で、出土し多くは直径3~4cm前後の略球形をした自然のものである。一遺構から数十個以上まとまって出土する場合があり、整理途中まで人為的な要素を考えていたが、出土する遺構のほとんどが寛政8(1796)年の洪水堆積層と思われる茶褐色シルトを基調とする土層が覆土層に存在すること、遺構内の出土層位が茶褐色シルトを基調とする土層中もしくは茶褐色シルトを基調とする土層の下部付近であること、の2点から洪水時に遺構内あるいは遺構の廃絶後にできた窪地に流れ込んだものと現在は考えており、図示および写真撮影は行わなかった。

第V章 ま と め

1. 土器・陶磁器

A S D166出土土器・陶磁器

S D166からは中世の土器・陶磁器がまとめて出土した。出土状況はほとんどのものが覆土の上層からの出土である。出土した土器・陶磁器には青磁碗（内面劃花文・竊蓮弁文・無文）、珠洲壺・播鉢、瓷器系陶器壺、土師器皿がある。

珠洲播鉢は口縁部を外側に揃み出すものであり、珠洲Ⅳ期（14世紀）のもの〔吉岡1993〕と考える。壺については口縁部を欠き年代の比定は難しいが、Ⅳ期としても大きく矛盾するものではない。

瓷器系陶器は胎土から、笹神丘陵産のものと考えてよい。17は口縁部が受け口状を呈するもので、18は肩部に二重格子目文+「×」の押印が見られる。笹神丘陵の窯跡の資料では、受け口状口縁を持つものは権兵衛沢1号窯・赤坂山窯に、二重格子目文+「×」の押印が見られるものは赤坂山窯で確認できる。壺については長期間の使用が考えられ、播鉢とは同等に扱えないが、このような特徴を持つ笹神丘陵産の瓷器系陶器壺の下限を示す資料にはなりうるもの¹⁾と考える。

土師器皿はロクロ成形で底部切り離し²⁾が回転系切りによるものである。珠洲播鉢とはほぼ同時期と考えるならば、14世紀の年代が与えられる。越後の13・14世紀の土師器皿については回転系切りのものは消滅し、非ロクロ成形のもののみが存在すると考えられてきたが〔坂井1987・品田1991〕、鶴巻康志氏は北蒲原郡安田町六野瀬遺跡1号井戸から底部回転系切りの土師器皿が出土したことを受け、13・14世紀にも回転系切りの土師器が存在することを指摘した〔鶴巻1992〕。今回の江内遺跡からの出土により、13・14世紀の回転系切りの土師器皿の存在が、六野瀬遺跡周辺の局地的な現象ではなく、阿賀野川中・下流域に広く認められるものである可能性が高くなった。

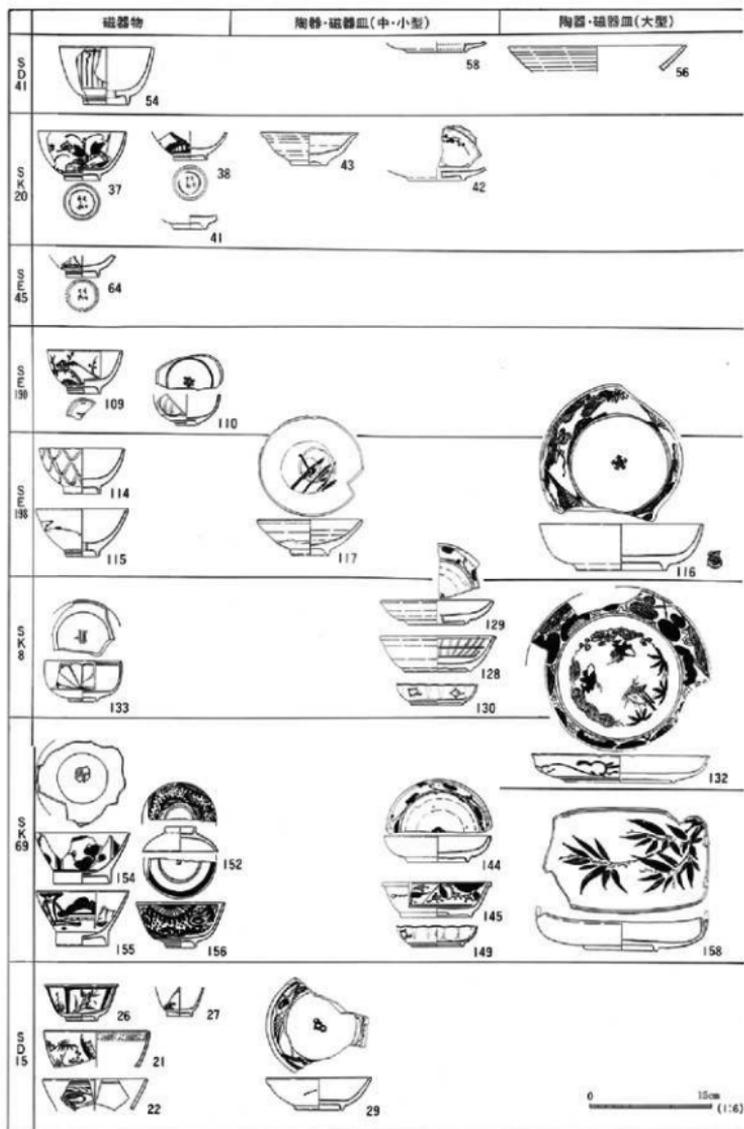
B 近世の土器・陶磁器

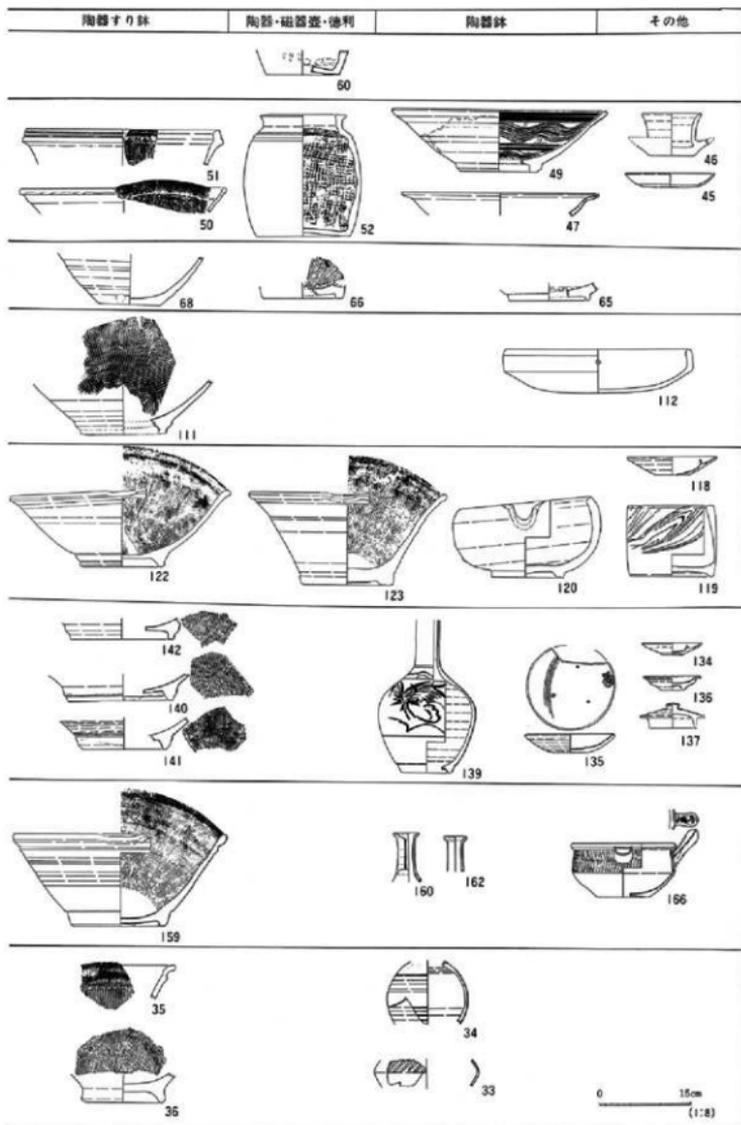
(1) 主な遺構出土の土器・陶磁器

江内遺跡からはまとまった土器・陶磁器が出土した井戸・土坑がいくつか見られる。ここでは主要なものを取り上げ年代的な位置づけを明らかにしたい。出土遺物の主体を占める肥前陶磁器の年代については大橋康二氏の編年〔大橋1989〕に拠っている。以下第11図に添って記述する。

S D41出土の陶磁器碗には細身で高い高台を持つもの（54）、54に比べると高台が低く内側に「天明年製」の銘を持つ碗（55）がある。肥前系陶磁器皿には底径が小さく幅広の高台を持ち、見込み蛇ノ目軸刺ぎで高台無軸のもの（57）と低平な高台を持つもの（58）、口径20cm前後の大型のもの（56）がある。このほか京焼風陶器碗の底部と肥前系陶器壺の底部がある。これらのうち56・59・60は細かな年代比定ができない。54・57・58は大橋編年Ⅲ期（17世紀後半）を中心とするもの³⁾と考えるが、55はⅣ期（17世

1) 瓷器系陶器については鶴巻康志氏より多くの御教示をいただいた。





第11図 主要遺構出土の土器・陶磁器

紀末～18世紀後半)に下る可能性が高く、遺物が廃棄された年代を示すものとする。

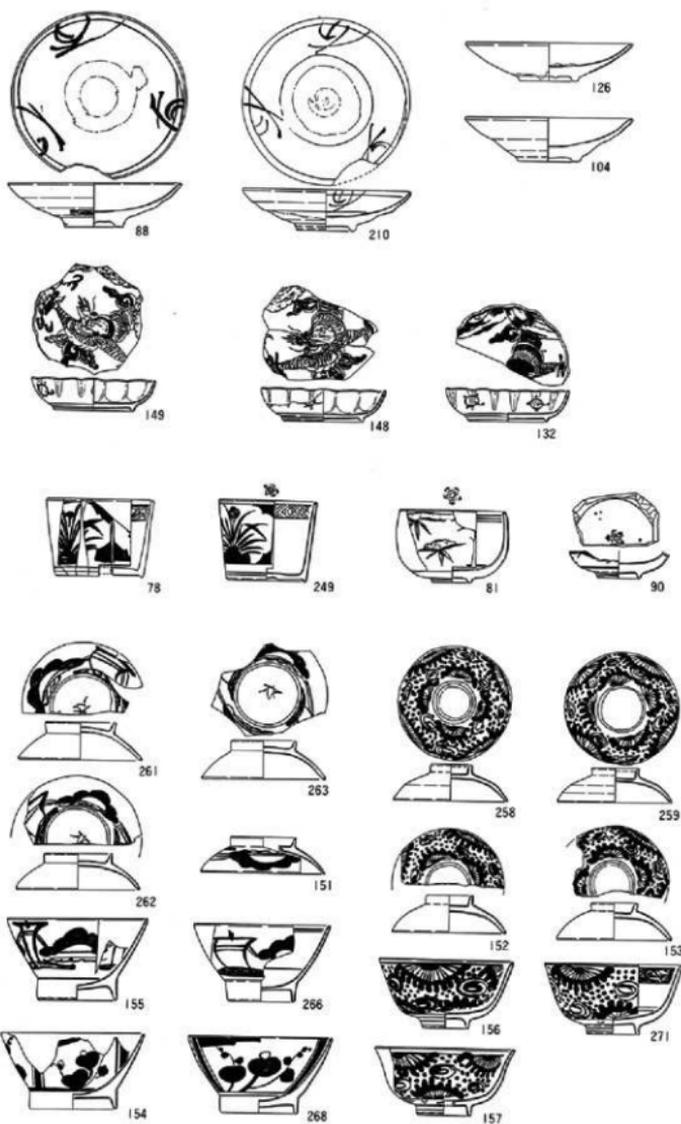
S K 20出土の肥前系陶磁器碗は高台内側に「太明年製」の銘があるもの(37・38)と見込み蛇ノ目軸割ぎで高台無軸のもの(41)がある。肥前系陶磁器皿には見込みに砂目痕のある霽緑皿(43)が、肥前系磁器皿には幅広く低平な高台を持つものが確認できる(42)。鉢には京焼き風陶器(47)といわれる刷毛目唐津が確認できる(49)。播鉢は口縁部に幅広い面を持ち、沈線が2条巡るもの(51)、口縁部が玉縁状となる肥前系のもの(50)がある。肥前系陶磁器壺は口縁部を外側につまみ出し、体部内面には格子目文が残るものである(52)。このほかに凸帯を持ち、内面に格子目文が残る壺、無軸陶器の天目台・皿(46・45)が存在する。これらのうち42・43は17世紀に遡るもので、45～47は年代の比定が難しいが、37・38・49・50など多くのものは大橋編年Ⅳ期(17世紀末～18世紀後半)の中でも古い時期のものとする。遺物の廃棄された年代は18世紀の中でもそれほど新しい時期にはならないであろう。

S E 45からは高台内側に「太明年製」銘のある肥前系磁器碗(64)のほか、播鉢には無台で底部が回転系切り後無調整の肥前系のもの(68)、断面方形の高台を持つもの(66)がある。18世紀前半を中心とする時期のものであろう。

S E 190出土の肥前系磁器碗には外面に梅樹文を表わすもの(109)、見込みにコンニャク印判による花文があり、細く低い高台を持つ丸碗(110)がある。肥前系陶磁器播鉢は高台を持ち見込みには放射状の卸目が密に入り、内外面とも鉄釉がかかるものである(111)。土師器焙烙は比較的に長い口縁部を持ち丸底となるものである(112)。109・110は大橋編年のⅣ期(17世紀末～18世紀後半)に、111はⅣ期の後半からⅤ期(18世紀中葉～19世紀)にそれぞれ比定できるものであり、112は江戸の編年に当てはめるならば18世紀中葉を前後する時期のものとする。遺物の廃棄年代は18世紀中葉から後半を中心とする時期であろう。

SE198出土の肥前系磁器碗は外面に二重網目文を表わすもの(114)、見込み蛇ノ目軸割ぎで外面に枝折柳を表わすもの(115)がある。このほか碗形態では、見込み蛇ノ目軸割ぎで高台無軸の京焼き風陶磁器碗(117)も確認できる。肥前系磁器皿は見込みにコンニャク印判による五弁花、高台内側に満福が存在するものが確認できる(116)。陶器播鉢には肥前系のもの(122)と、そうでないもの(123)があり、ともに、高台を持ち内外面とも鉄釉が掛かり、見込みに放射状の卸目が密に入るものである。このほかに陶器灯明皿(118)・土師器火入れ(119)・産地不明の鉄釉がかかった片口を持つ鉢(120)がある。118～120・123は年代の比定が難しいが、114・115・116はいずれも大橋編年Ⅳ期(17世紀末～18世紀後半)のものであり、117も18世紀台のものであろう。122は大橋編年Ⅳ期後半からⅤ期(18世紀中葉から19世紀)のものと考えられる。遺物の廃棄年代はSE190に後続し、18世紀末前後のものであろう。

S K 8の肥前系磁器碗は内側する体部に細く低い高台を持つ(133)。肥前系磁器皿は見込み蛇ノ目軸割ぎで、見込み中央にコンニャク印判による五弁花があるもの(129)、蛇ノ目凹高台で見込み中央にコンニャク印判による竹を表わすもの(128)、底径が大きく細く低い高台を持つもの(130)、外面に唐草文、見込みに松竹梅を表わす大型のもの(132)がある。播鉢はいずれも肥前系のもので、見込みには放射状の卸目が密に入るものである(140～142)。このほかに瀬戸・美濃の灰釉小皿(136)、内面に菊花の浮文がある陶器灯明皿(135)・土瓶蓋(137)がある。136は16世紀代まで遡る可能性があり、129・130・132はいずれも大橋編年Ⅳ期(17世紀末から18世紀後半)のものであるが、128は大橋編年Ⅴ期(18世紀末～19世紀)まで下るものである。140～142は大橋編年Ⅳ期後半からⅤ期(18世紀中葉～19世紀)のものであり、遺物の廃棄年代はS E 198に後続し18世紀末以降であるが19世紀に入ったとしても



第12回 捕いの食器

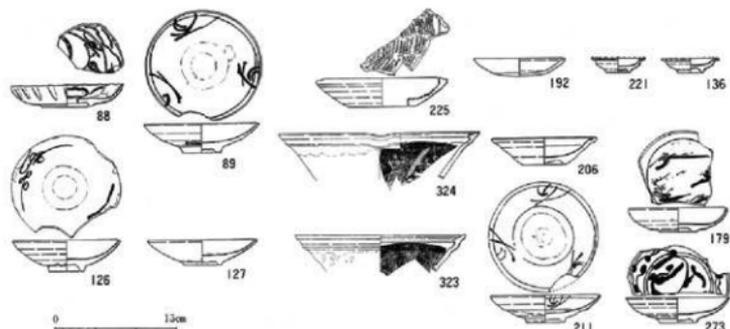
それほど新しい時期にはならないものとする。

S K 69出土の肥前系磁器碗は広東碗・小広東碗（152・154～156）によって占められる。肥前系磁器皿は見込み蛇ノ目軸割ぎで見込み中央にコンニャク印判五弁花があるもの（144）、蛇ノ目凹高台で高い高台を持つもの（145）、底径が大きく細く低い高台を持つもの（149）があり、他に糸切り細工を行ない平面形を隅丸方形にした京焼き風陶器（158）が確認できる。播鉢は肥前系のもは出土しておらず、高台を持ち、口縁部が玉縁状で見込みに放射状卸目が密に入るものが確認できる。これらのほかに肥前系磁器徳利（160）、内外面に鉄釉のかかる肥前系陶器徳利（162）、行平鍋（166）がある。このうち159・160・162については明確な時期比定ができないが、144・149は大橋編年Ⅳ期（17世紀末～18世紀後半）、145・152・154～156は大橋編年Ⅴ期（18世紀末～19世紀）、166は18世紀末以降一般化するものであり、遺物の廃棄年代についてはS K 8にやや後続するものとする。

S D 15出土の磁器碗には広東碗（21・22）のほかに端反碗（26）が確認できる。皿は見込み蛇ノ目軸割ぎで高台無軸の肥前系磁器のもの、蛇ノ目凹高台で内外面に染付により文様を表わす京焼き風陶器のもの（29）がある。すり鉢は口縁端部が外側に屈曲し口縁下端に凸帯が巡るもの（35）、端部の丸い高い高台を持ち、見込みに放射状の卸目が密に入るもの（36）がある。このほかにいわゆる刷毛目唐津の徳利（34）が確認できる。遺物の廃棄年代はS K 69に後続するものであろう。

以上、主要な遺構出土の土器・陶磁器について述べてきた。遺構内からまとまって土器・陶磁器が出土するようになるのは大橋編年のⅣ期以降であるが、17世紀末以前の遺物が出土していないわけではない。大橋編年Ⅰ期に平行する遺物は少ないが、Ⅱ～Ⅲ期にかけては一定量の遺物が出土している（第13図）。おそらく17世紀前半頃には当地に集落が成立したものと考えられ、これは文献で知られる川口集落の動向とはほぼ一致する。

なお17世紀末以降の肥前陶磁器の増加については、清朝磁器の輸入復活により海外需要が減少し、国内向けの日常雑記を生産しはじめるという肥前陶磁器の生産地の変化（大橋1989）のほかに、西廻り航路の確立、在地における商品経済の発達といった要素が上げられる。ただしこれら三点は個々に独立して進展したわけではなく、相互に関連を持ちながら展開していったものであることは言うまでもない。



第13図 16～17世紀の土器・陶磁器

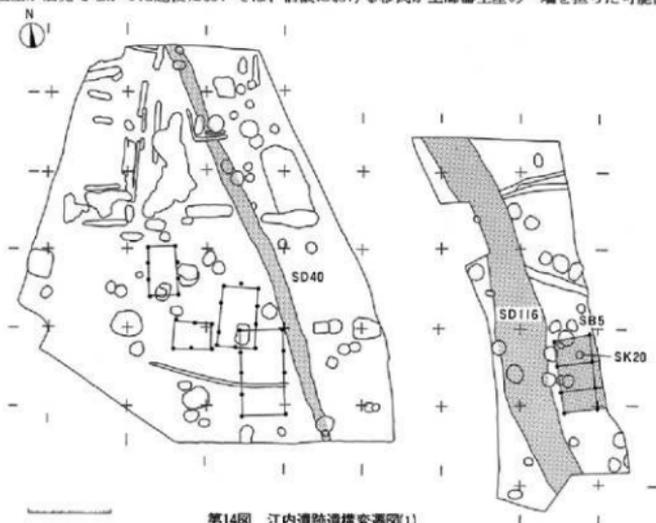
なお、出土する陶磁器の大半を肥前系のものが占め、堺・東海諸富のものがほとんど入らない様相は、江戸とは大きく異なり、金沢城下の様相に近い。近世のこのような土器・陶磁器の組成は、在地窯が存在し活発に生産を行なっている越中を除けば、おそらくは日本海側に広く見られるものであろう。ただし、金沢城下との差異をあげるとすれば、江内遺跡出土の陶磁器には見込み蛇ノ目輪割ぎの碗・皿類がより多く見られる点が上げられよう。¹⁾

(2) 近世の瓦器・土師器

江内遺跡から出土した土師器・瓦器には焙烙・火鉢・植木鉢・火入れ・火消し壺等がある。土師器・瓦器の中には胎土中に海綿骨針を多く含むものが一定量存在する。海綿骨針は阿賀野川以南の蒲原平野から出土する土器に各時代を通じてみられるものである。軟質で壊れやすく運搬に困難を伴う土師器・瓦器の特徴を考えると、土師器・瓦器の多くは近接した地域で生産された可能性が高い。SE190からは「高井」という押印を持つ土師器焙烙が出土しているが、「高井」が仮に生産地を示すものとすれば、周辺の地域では現在の白根市の高井興野があげられる。

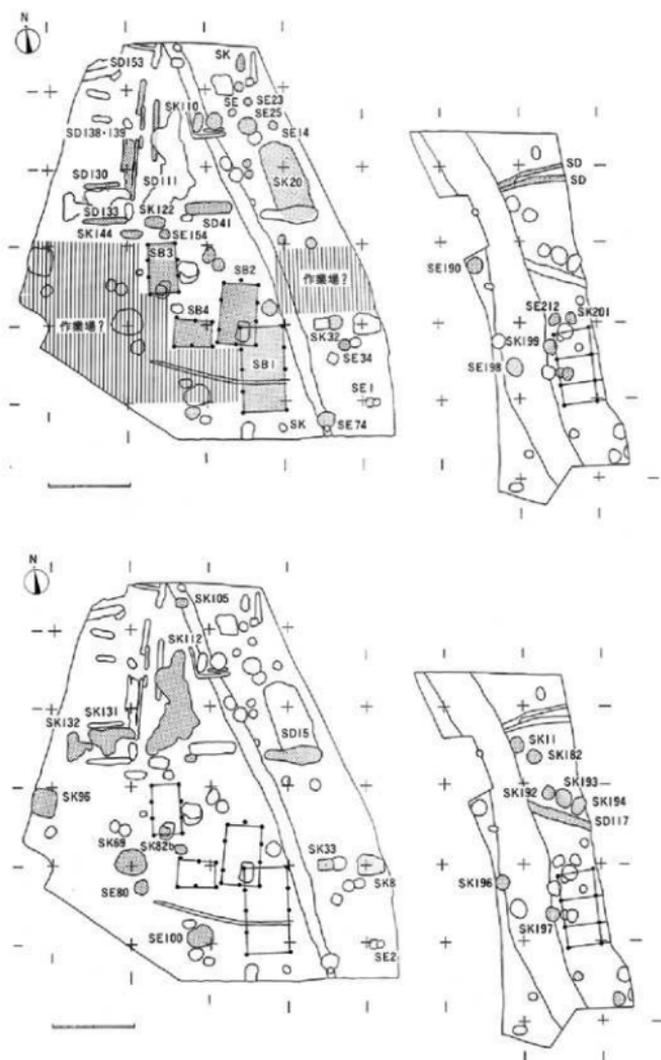
江内遺跡に先行する15・16世紀の越後における土器・陶磁器の組成をみると、在地での土師器・瓦器生産は低調で、瓦器すり鉢が現在の岩船郡から北蒲原郡北部にかけて、内耳鍋が頸城地方の内陸部で少量見られるほかは、有力者の居宅と考えられるような遺跡から少量の土師器皿が出土する程度である。

これに対し、関東地方や中部高地では15・16世紀に在地産の鍋やすり鉢が一定量存在する。蒲原平野における新田開発には北陸地方とともに信州地方からも多くの移住があった。現在の白根市の高井興野も天正から文禄年間間に信濃の高井蔵人が移住して開発したという〔小村他編1988〕。在地における土師器生産が活発でなかった越後においては、信濃における移民が土師器生産の一端を担った可能性は



第14図 江内遺跡遺構変遷図(1)

1) 89・105・126・127・210・211のような底径が小さい蛇ノ目輪割ぎの陶磁器は金沢城下ではほとんど出土していないことを木立雅明・増山仁・滝川重徳氏より御教示をいただいた。



第15図 江内遺跡遺構変遷図(2)

あろう。ただし、越後で出土する焙烙は内耳を基本的に持たず、18世紀以降は丸底化するなど信州とは異なる点も存在することは留意しておかなければならない。

2. 遺 構

今回の調査では年代を知りうるような土器・陶磁器が出土した遺構がいくつか検出された。また遺構覆土に寛政8年(1798)年の洪水堆積層と考えられる茶褐色シルトが存在する遺構も見られる。以下ではこれらのことを基に今回の調査で検出された遺構の年代的な変遷を明らかにしたい。

今回の調査で検出された遺構の中で最も古いものはB区を南北に流れるSD166である。SD166の覆土上層からは14世紀の遺物が出土しており、これは溝の埋没年代と大きくは違わないものとする。SK204も遺構底面から珠洲T種密の底部が出土しており、近接した時期のものである可能性が高い。また寛政8年の洪水堆積層が遺構覆土上面に堆積する遺構に切られるSK203も中世に遡る可能性がある。SB5は大半が調査区外にのびることから詳細は不明だが、柱穴掘方が小型であり、大型の掘方を持つものが多い近世の掘立柱建物とは異なることから、中世に遡る可能性が高い。SD40もSD166とほぼ方向が一致し、近世の遺構に切られること、近世の掘立柱建物とは主軸が一致しないことなどから考え、中世に遡る可能性が高い(第15図)。

遺跡は15世紀には一旦廃絶し、明確な遺構が再度確認できるようになるのは17世紀後半以降である。SB2は柱穴内から出土した遺物から考え17世紀後半から18世紀前半にかけて建てられたものであろう。他の掘立柱建物3棟も17～18世紀代のものである可能性が高い。SE45やSK144も覆土中の遺物から考え、これに近い時期のものであろう。また寛政8(1798)年の洪水堆積層と考える茶褐色シルトが覆土上層に堆積するSE34・47・79・90・14・21・23・25・25・28・190・202・211、SK20・27・199・201、SD41、調査区北西存在する小型の溝(SD111・115・116・130・133・138・139など)も近い時期のものとする。

重複するSB1・2の前後関係は明らかにできないが、大型の建物SB1・2は主屋と考えられ、小型のSB3・4はそれぞれに対応する副屋であろう。当期の遺構の分布を見ると、主屋に近接して井戸があり、やや離れて土坑がある。また主屋の東西には遺構の茶蔭なところそれぞれあり、これらは作業場となる可能性がある。また北西側の小型の溝は根菜類などの耕作痕の可能性もある。(第16図上)

これに後続する18世紀末から19世紀の遺構としてはSE80・100やSK8・69・96等の大型で大量の遺物を出した土坑、SK112・130・131等の大型の不整形の土坑、SK33・63・70・82a・105・120など暗茶褐色シルト質粘土を覆土に持ち、平面形が方形もしくは隅丸方形となる土坑をあげうる。

なお19世紀以降も川口集落は存続し現在に至るが、川口集落の成立を17世紀初頭であり、約400年弱集落が存続している。16～17世紀に成立した集落が現在まで存続することは、一般的に見られることであるが、これに対し弥生時代¹⁾から中世では400年以上存続する遺跡は、地域の拠点となるような大規模な遺跡を除けば極めて希である。長期間存続する集落の普遍化には複数の要因が相互に関連した結果と考えられ、政治的な理由のほかに、家督の相続方法の確立や家族および「家」、あるいは土地の所有に対する認識や価値観の変化があった可能性もあろう。

1) 坂井秀弥氏より御教示をいただいた。

要 約

- 1 江内遺跡は新潟県北部の新津市大字川口字江内に所在する。遺跡は能代川右岸の自然堤防上に位置する。
- 2 調査は普通自動車道の建設にともない、平成4年度に実施した。実質的な調査面積は3,400㎡である。
- 3 調査の結果、奈良・平安時代と中世・近世の遺物、中世・近世の遺構が検出された。
- 4 中世の遺構には用水路と考えられる大規模な溝のほか、掘立柱建物1棟・土坑2基などがある。
- 5 中世の遺物は14世紀を中心とするものである。土器・陶磁器には土師器皿、青磁碗、珠洲甕・甕・播鉢・小鉢、瓷器系陶器甕がある。瓷器系陶器は笹神丘陵産であり、珠洲播鉢との共伴は笹神丘陵の瓷器系陶器の編年を行なう上で貴重な資料となる。木製品には船形・曲物・折敷等がある。
- 6 近世の遺構には掘立柱建物4棟の他、多数の土坑・井戸・ピットなどがある。これらの遺構は、寛政8（1796）年の洪水堆積層と考える土層の有無により、その変遷がある程度明かとなった。これは遺構内から出土する遺物の既存の年代観とも大きく矛盾しない
- 7 近世の遺物には土器・陶磁器、土・陶磁製品、石製品、木製品がある。
- 8 陶磁器は肥前系のものが大半を占め、瀬戸・美濃産のものは少ない。このような様相は江戸とは異なり、金沢城下の様相に類似する。陶磁器の大半を肥前系が占める状況は日本海沿岸に広く見られるものであろう。
- 9 近世の土師器・瓦器には在地産と推測されるものが定量存在する。
- 10 遺跡は14世紀に成立し、15世紀には一旦廃絶し、再び集落が営まれるのは17世紀前半代からである。集落はこれ以後現在まで存続し、集落の存続期間は現在まで約400年である。17世紀に成立した新田村が現在まで集落として存続する状況は、江内遺跡のみに見られるものではなく、一般的にみられるものである。これは短期間で廃絶することの多い弥生時代から中世の遺跡とは大きく異なる。

別表1 土器・陶磁器観察表

SD166 (図版17 1~20)

番号	種類	形状	法量	手	法	文	様	出土地点・その他
1	甗	甗	口径17.0				外面片切彫り編蓮弁文	
2	甗	甗	口径16.0				内外面無文	
3	甗	甗	底6.6	高台	削り出し		内面片切彫り蘭花文	
4	土師器	皿	底8.3		底部回転糸切り			
5	須恵器	直口壺	口径12.0		体部外面平行タタキのちロクロナゲ			
6	珠洲	T様甗			外面平行タタキ、内面無文当て具		外面肩部に「○」の押印	
7	珠洲	小鉢	口径19.0		外面平行タタキ、内面無			
8	珠洲	小鉢	口径18.0		文当て具			
9	珠洲	小鉢						
10	珠洲	小鉢						
11	珠洲	楕鉢	口径30.0					
12	珠洲	楕鉢	口径40.0					
13	珠洲	楕鉢						
14	珠洲	楕鉢	底12.0		底部静止糸切り			
15	珠洲	楕鉢	底12.9		底部静止糸切り			
16	白瓷	壺			非ロクロ成形		肩部に2条の沈線	笹神産
17	白瓷	壺	口径38.0		非ロクロ成形			笹神産
18	白瓷	壺	底22.6		非ロクロ成形		肩部に二重の方形+「X」の押印	笹神産
19	白瓷	壺	底22.0		非ロクロ整形			笹神産
20	白瓷	壺	底17.0		非ロクロ整形			笹神産

SD15 (図版18 21~36)

番号	種類	形状	法量	手	法	文	様	出土地点・その他
21	磁器	広束碗	口径12.8		透明釉	呉須染付、外面竹・草、内面四方様		肥前系
22	磁器	広束碗?	口径11.8		透明釉	呉須染付、外面草花?・芽線、内面芽線		肥前系
23	磁器	広束碗?	口径10.0		透明釉	呉須染付、外面草花?、内面無文		肥前系
24	磁器	広束碗?	口径11.2		透明釉	呉須染付、外面草花?、内面無文		肥前系
25	磁器	丸碗	底3.8		透明釉	呉須染付、外面樹木・岩、内面無文		肥前系
26	磁器	燗灰碗	口径9.0 底4.5 高4.0		透明釉	呉須染付、外面帯織・竹・渦巻き、内面芽線、見込み宝		肥前系?
27	磁器	小杯	底3.1	高台	覆付砂	透明釉	呉須染付、外面草花、内面無文	肥前系
28	磁器	皿	口径13.0 底4.4 高4.4			透明釉、見込み蛇/目輪割ぎ、高台無輪	呉須染付、外面無文、内面唐草	肥前系
29	陶器	皿	口径12.8 底6.0 高3.9	蛇/目	凹高台	透明釉	呉須染付、外面唐草、内面不明、身込み宝	京焼系
30	陶器	鉢?	底4.4			灰釉	白泥刷毛目	肥前系
31	陶器	碗	底2.8			内面透明釉、外面鉄釉	無文	
32	陶器	鉢	口径19.0			灰釉	無文	
33	陶器	壺?				無輪	外面斜行する並行沈線	
34	陶器	徳利				外面透明釉、内面無輪	外面白虎刷毛目	肥前系
35	陶器	摺鉢				鉄釉	無文	肥前系?
36	陶器	摺鉢	底12.2			鉄釉	無文	肥前系?・見込み放射状節目

SK20 (図版 37~53)

37	磁器	丸碗	口径11.0 底4.4 高5.9		透明釉	呉須染付、外面草花・岩、内面無文		肥前系、「太明年製」銘
38	磁器	丸碗	底4.2	高台	覆付砂	透明釉	呉須染付、外面草花、内面無文	肥前系、「太明年製」銘
39	磁器	丸碗	底4.2			透明釉	呉須染付、外面岩・草、内面無文	肥前系、「太明年製」銘
40	磁器	皿	口径12.0			透明釉	呉須染付、外面無文、内面芽線	肥前系
41	磁器	皿	底4.2			透明釉、見込み蛇/目輪割ぎ、高台無輪	無文	肥前系
42	磁器	皿	底7.0		ロクロ打ち型成形、高台覆付砂	透明釉	呉須染付、外面無文、見込み草花	肥前系

番号	種類	器種	法量	手法	施 釉	文 様	出土地点・その他
43	陶 器	講録皿	口12.0 底 4.4 高 4.0	身込み砂目	灰釉、高台無釉	無文	肥前系
44	陶 器	講録皿	口12.0		灰釉	無文	肥前系
45	陶 器	皿	口11.0 底 3.2 高 1.8	底部回転系切り 体部下半ロクケズリ	無釉	無文	肥前系?
46	陶 器	天目台	口 6.6 底 5.3 高 5.6	底部回転系切り	無釉	無釉	肥前系?
47	陶 器	鉢	口24.0		灰釉	無文	
48	陶 器	鉢	口33.0		透明釉、体部外面無釉	白虎刷毛目	肥前系
49	陶 器	鉢	口34.6 底12.6 高20.3		透明釉、体部・底部外面無釉	白虎刷毛目	肥前系
50	陶 器	盃 鉢	口35.0		口縁部透明釉	無文	肥前系
51	陶 器	盃 鉢	口31.4		口縁部鉄釉	口縁部外面沈線2条	瀬戸?
52	陶 器	壺	口10.4 底11.4 高15.2	体部内面格子目 文当て具、底部不調整	無釉	肩部外面沈線2条	肥前系
53	陶 器	甕		体部内面格子目 文当て具	無釉	肩部外面凸帯2条	肥前系

S D 41 (図版19 54~60)

54	磁 器	丸 椀	口11.6 底 5.6 高 7.4		透明釉	呉須染付、外面よろけ織錦、内面無文	肥前系
55	磁 器	丸 椀	底 4.4		透明釉	呉須染付、外面界線、内面無文	肥前系、「大明年製」銘
56	磁 器	皿	口22.0		透明釉	呉須染付、外面無文、内面草花?	肥前系
57	磁 器	皿	底 4.0		透明釉、身込み 蛇ノ目軸割ぎ、 高台無釉	呉須染付、外面無文、内面界線	肥前系
58	磁 器	皿	底 7.4		透明釉	呉須染付、外面無文、内面界線	肥前系
59	陶 器	丸椀?	底 5.2		透明釉	無文	京焼系
60	陶 器	壺	底部不調整		透明釉	無文	肥前系

S K 45 (図版19 61~63)

61	磁 器	丸 椀	底 4.0		透明釉	呉須染付、外面一重網目、内面無文	肥前系
62	磁 器	丸 椀	底 3.6		透明釉	呉須染付、外面不明、内面無文	肥前系、被熱
63	磁 器	皿	口13.0 底 2.8 高 7.4		透明釉	呉須染付、外面唐草・界線、内面不明	肥前系

S K 47 (図版19 64~68)

64	磁 器	丸 椀	底 4.0		透明釉	呉須染付、外面若・草花、内面無文	肥前系
65	陶 器	鉢	底13.2		鉄釉、内面・高台無釉	無文	
66	陶 器	盃 鉢	底13.0	非ロク口成形?	鉄釉		胎土中に墓石多く含む、見込み放射状御目
67	陶 器	盃 鉢	底14.0	底部回転系切り	無釉	無文	肥前系、見込み放射状御目
68	陶 器	盃 鉢	底10.0		無釉	無文	肥前系、見込み放射状御目

E 7・ピット10 (図版19 69~72)

69	磁 器	広腹椀	口11.8 底 6.4 高 6.8		透明釉	呉須染付、外面よろけ織錦、内面界線、見込み二重弁形・界線	肥前系
70	陶 器	皿	口16.0		透明釉	呉須染付、外面唐草、内面不明	京焼系
71	磁 器	仏飯器	口 6.0 底 5.6 高 5.7		透明釉	呉須染付、外面唐草、内面無文	肥前系
72	陶 器	鉢	底 8.0		透明釉	白虎刷毛目	肥前系

S K 95 (図版19 73・74)

番号	種類	器種	法量	手法	施釉	文様	出土地点・その他
73	陶器	灯明皿	底 4.8	底部回転糸切り	透明釉、底部外面無釉	無文	肥前系
74	陶器	掛鉢	底11.0	底部回転糸切り	無釉	無文	肥前系、見込み放射状跡目

S K 100 (図版19 75・76)

75	磁器	小杯	口13.2		透明釉	呉須染付、外面無文、内面唐草?	肥前系
76	磁器	小杯	口10.0		透明釉	呉須染付、外面銅干?・岩・界線、内面無文	肥前系

S K 21 (図版19 77・78)

77	磁器	丸碗	口11.0	高台置付砂	透明釉	呉須染付、外面界線、内面無文	肥前系
78	磁器	皿	底 5.0	高台置付砂	透明釉	呉須染付、外面無文、内面不明	肥前系

S K 91 (図版19 79・80)

79	磁器	開碗	口 8.6 底 6.2 高 6.2	蛇ノ目凹高台	透明釉、底部蛇ノ目釉割ぎ	呉須染付、外面高橋・岩、内面四方様	肥前系
80	磁器	広葉碗	口11.0 底 3.8 高 3.8		透明釉	呉須染付、外面平菊?・渦巻・水玉、内面鎌倉・界線、見込み「寿」	肥前系

S D 130 (図版19 81・82)

81	磁器	丸碗	口11.0		透明釉	呉須染付、外面一重刷目、内面無文	肥前系
82	磁器	丸碗	口 8.4 底 3.2 高 5.8		透明釉	呉須染付、外面笹・岩、内面界線、身込み手	

S D 116 (図版20 83・84)

83	磁器	丸碗	口12.0		透明釉	呉須染付、外面一重刷目文、内面無文	肥前系
84	磁器	徳利	口 4.0		透明釉、体部内面無釉	呉須染付、外面唐草、内面無文	肥前系

S K 122 (図版20 85~87)

85	磁器	皿	底 5.0	高台置付砂	透明釉	呉須染付、外面無文、内面草花	肥前系
86	磁器	皿	底 8.0	高台置付砂	透明釉	呉須染付、外面無文、内面草花	肥前系
87	磁器	皿	底 6.0		透明釉	呉須染付、外面無文、内面界線・草花、見込み蝶	肥前系

S K 144 (図版20 88・89)

88	磁器	皿	口13.8 底 2.7 高 6.0	ワタロ置押し成形	透明釉、端あり	呉須染付、外面無文、内面不明	肥前系
89	陶器	皿	口14.0 底 4.8 高 3.6		灰釉、見込み蛇ノ目釉割ぎ、高台無釉	鉄絵染付、外面無文、内面帆倉舟?	肥前系

S D 178 (図版20 90~96)

90	磁器	広葉碗	底 4.1		透明釉	呉須染付、外圍縁線・笹・界線、内面界線	肥前系
91	磁器	丸碗	底 3.4		透明釉	呉須染付、外面縁線・笹・界線、内面界線、身込み手書き五弁花	肥前系
92	磁器	皿	口14.0		透明釉	呉須染付、外面唐草、内面界線・度木	肥前系
93	磁器	椀?	口11.0		透明釉	無文	肥前系
94	磁器	皿	口20.0		透明釉	呉須染付、外面唐草、内面嬰紐刺り牡丹唐草	肥前系
95	陶器	杉形碗	底 3.0		透明釉・高台無釉	鉄絵染付、外面若松、内面無文	京畿系
96	土器	塔 塔	口31.0	非ワタロ成形、口縁部ヨコナデ		無文	

S E 176 (図版20 97~107)

97	磁器	碗	口10.0		透明釉	呉須染付、外面二重刷目、内面一重刷目	肥前系
98	磁器	碗	底 4.0		透明釉	呉須染付、外面不明、内面無文	肥前系、「太」銘
99	磁器	椀?	底 4.4	高台置付砂	透明釉	無文	肥前系?
100	磁器	碗	底 3.4		透明釉	呉須染付、外面界線・雲雷錯像、内面素書菊花?	肥前系
101	磁器	小杯	底 2.8		透明釉	無文	肥前系
102	磁器	小杯	口 7.4		透明釉	無文	肥前系

番号	種類	器種	法量	手法	窯 輪	文 様	出土地点・その他
103	陶器	碗?	口9.1		灰輪	無文	京焼系
104	陶器	天目椀	底2.8		透明釉、高台無輪	鉄絵染付、外面不明、内面無文	京焼系
105	陶器	皿	口13.4 高3.5 底5.0	回転糸切り、見込み砂目	透明釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無輪	無文	肥前系
106	陶器	皿	口19.5		鉄輪、高台無輪	白泥刷毛目	肥前系
107	磁器	徳利	口4.0		透明釉	無文	肥前系

S E 190 (図版20 108~113)

108	磁器	丸 碗	口9.0		透明釉	呉須染付、外面界線・樹木、内面横線・界線	肥前系
109	磁器	碗	口9.0 底4.0 高5.3		透明釉	呉須染付、外面輪・巻、内面無文	肥前系
110	磁器	碗	底2.8		透明釉	呉須染付、外面水・斜格子、内面界線	肥前系
111	陶器	摺鉢	底14.0	高台置付砂、見込み重ね焼き痕	鉄輪	無文	肥前系、見込み放射状御目
112	土師器	焙 烙	口30.2 高7.0	葬口クロ成形、口縁部コナナデ	無輪	口縁部に「高井」の押印	在地?、胎土中に海綿骨針
113	土師器	焙 烙	口31.0	葬口クロ成形、口縁部コナナデ	無輪	無文	在地?、胎土中に海綿骨針

S E 198 (図版21 114~123)

114	磁器	碗	口10.4 底4.4 高5.6		透明釉	呉須染付、外面二重御目、内面無文	肥前系、覆土上層
115	磁器	碗	口11.2 底4.0 高6.0		透明釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面界線・帯線・折枝梅、内面無文	肥前系
116	磁器	皿	口20.0 底11.0 高5.8		透明釉	呉須染付、外側草、内側面・花器、見込みコンニャク印判五分花・底部外面「高福」	肥前系
117	陶器	碗	口12.6 底4.0 高4.5	削り出し高台	灰輪・見込み蛇ノ目割ぎ・高台無輪	鉄絵染付、内・外無文、見込み輪?	京焼系
118	陶器	灯明皿	口11.0 底4.0 高2.3	底部外面下手・底面外面ヘラケズリ	灰輪、底部外面下手・底面外面無輪	無文	信濃系?
119	土師器	火入れ	口10.4 底10.0 高8.8		無輪	褐色土と白色土の混合による木目状の文様	在地?
120	陶器	鉢	口14.2 底8.8 高10.1	削り出し高台	鉄輪、高台無輪	無文	
121	陶器	摺鉢	底11.0	高台置付砂、見込み重ね焼き痕	鉄輪	無文	肥前系、見込み放射状御目
122	陶器	摺鉢	口35.5 底13.2 高13.1	高台置付砂、見込み重ね焼き痕	鉄輪	無文	肥前系、見込み放射状御目
123	陶器	摺鉢	口32.0 底15.0 高15.4	高台置付に砂目5ヶ所	鉄輪	無文	長石粒含む、見込み放射状御目

S E 202 (図版21 124・125)

124	陶器	壺	底6.0		鉄輪、高台無輪	無文	肥前系?
125	陶器	摺鉢	底16.0		鉄輪	無文	越中瀬戸?、見込み放射状御目

S B 1 (図版22 126・127)

126	磁器	皿	口13.2 底4.4 高3.8	削り出し高台	透明釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無輪	呉須染付、外面無文、内面枝折梅	肥前系
127	陶器	皿	口13.6 底4.8 高3.1	回転糸切り、削り出し高台、見込み砂目	透明釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無輪	無文	肥前系

S K 8 (図版22 128~148)

128	磁器	皿	口14.4 底8.4	蛇ノ目凹高台	透明釉	呉須染付、外面無文、内面界線・二重格子目、見込みコンニャク印判竹	肥前系
-----	----	---	---------------	--------	-----	----------------------------------	-----

番号	種類	器種	寸法	手法	施釉	文様	出土地点・その他
129	磁器	皿	口14.0 底7.2 高3.0		透明釉、見込み 蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面無文、内面唐草、見込み コンニャク印判五弁花	肥前系
130	磁器	皿	口10.0 底4.0 高2.6	ロクロ型打ち成 形	透明釉	呉須染付、外面宝、内面獅子・雲	肥前系
131	磁器	皿	口8.0 底4.4 高2.0		透明釉、口割	呉須染付、外面無文、内面家屋・山水	肥前系
132	磁器	皿	口21.8 底13.4 高3.4	ハリ交え	透明釉	呉須染付、外面唐草、内面界線・ひょう たん・宝、見込み松葉・梅花・竹	肥前系、「成化年製」銘
133	磁器	丸椀	口9.4 底3.6 高5.0		透明釉	呉須染付、外面界線・半菊・獅子、内面 界線、見込み「寿」	肥前系
134	磁器	灯明皿	口7.4 底2.7 高1.5		透明釉、底部無 釉	無文	肥前系?
135	陶器	灯明皿	口11.0 底4.2 高2.3	底部外面・体部 外面へラケズリ 見込みハリ交え	透明釉、底部外 面無釉	外面無文、内面旋輪・沈線・菊花浮文	
136	陶器	小皿	口7.0 底3.2 高1.8		灰釉	無文	瀬戸・美濃
137	陶器	土瓶蓋	口5.8 高3.1		濃緑釉	無文	肥前系?
138	陶器	壺	底5.2	回転糸切り	無釉	無文	肥前系
139	磁器	徳利	底8.0		透明釉、体部内 面無釉	呉須染付、外面縁線・山・竹、内面無文	肥前系
140	陶器	摺鉢	底16.0		鉄釉、高台畳付 無釉	無文	肥前系、見込み放射状印 目
141	陶器	摺鉢	底13.8		鉄釉、高台畳付 無釉	無文	肥前系、見込み放射状印 目
142	陶器	摺鉢	底17.0		鉄釉	無文	肥前系、見込み放射状印 目

S K69 (図版22・23 143~167)

143	磁器	皿	口13.8 底8.4 高3.5		透明釉	呉須染付、外面唐草、内面花器、見込み コンニャク印判五弁花、高台内側渦巻	肥前系
144	磁器	皿	口12.2 底7.4 高3.3		透明釉、見込み 蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、内・外面唐草、見込みコンニャ ク印判五弁花	肥前系
145	磁器	皿	口13.5 底8.8 高4.2	蛇ノ目凹高台	透明釉、底部蛇 ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面宝、内面界線・雲・草?・ 宝、見込み界線・宝	肥前系
146	磁器	皿	口14.0 底8.0 高4.7	蛇ノ目凹高台、 ロクロ型打ち成 形	透明釉、底部蛇 ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面唐草、内面唐	肥前系
147	磁器	皿	口14.2 底8.4 高3.5	蛇ノ目凹高台	透明釉、底部蛇 ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面唐草、内面界線・雲・竜 目・草	肥前系
148	磁器	皿	口10.0 底6.4 高2.6	ロクロ型打ち成 形	透明釉	呉須染付、外面界線・宝、内面獅子・雲	肥前系
149	磁器	皿	口10.0 底6.4 高2.6	ロクロ型打ち成 形	透明釉	呉須染付、外面界線・宝、内面獅子・雲	肥前系
150	磁器	広東碗蓋	口9.6 径5.3 高2.8		透明釉	呉須染付、外面葡萄・獅子、内面界線、 見込み不明	肥前系
151	磁器	広東碗蓋	口10.0 径5.4 高2.8		透明釉	呉須染付、外面松、内面界線	肥前系
152	磁器	広東碗蓋	口10.0 径5.4 高2.8		透明釉	呉須染付、外面半菊・雲・宝、内面界線・ 帯線・龍歯、見込み「寿」	肥前系

番号	種類	器種	法量	手法	施繪	文様	出土地点・その他
153	磁器	広東碗蓋	口10.0 径 5.4 高 2.8		透明釉	灰須染付、外面界線・半菊・高・宝、内面界線・帯線・蓮瓣、見込み「寿」	肥前系
154	磁器	広東碗	口11.2 底 7.0 高 6.4		透明釉	灰須染付、外面界線・帯線・草花、内面界線、見込み紫雲牡丹、底面二重方形柿「福」?	
155	磁器	広東碗	口11.2 底 6.4 高6.06		透明釉	灰須染付、外面桃御舟・松、内面界線、見込み帆掛舟	肥前系
156	磁器	小広東碗	口10.8 底 5.5 高 3.8		透明釉	灰須染付、外面界線・半菊・高・宝、内面界線・帯線・蓮瓣、見込み「寿」	肥前系
157	磁器	小広東碗	口11.0 底 4.4 高 5.5		透明釉	灰須染付、外面界線・半菊・高・宝、内面界線・帯線・蓮瓣、見込み「寿」	肥前系
158	陶器	皿	口21.0 径 12.5 底 9.0 高 4.3	体部・口縁部系切り細工	透明釉	灰須染付、内・外面無文、見込み笹	京焼系
159	陶器	撥鉢	口33.6 底16.0 高16.4	見込み重ね挽合痕	鉄釉、高台無釉	無文	見込み放射状御目
160	磁器	徳利	口 4.0		透明釉	灰須染付、外面不明、内面無文	肥前系
161	磁器	瓶	口 7.6		透明釉	灰須染付、外面界線・界線、内面無文	肥前系
162	陶器	徳利	口 3.8		鉄釉	無文	肥前系
163	陶器	壺	底 5.2	回転系切り	鉄釉・底部外面無釉	無文	
164	陶器	甕		内面同心門当て具	無釉	無文	肥前系
165	陶器	行平鍋	口16.4	底部外面・体部外面下半ヘラケズリ	鉄釉、口縁部・底部無釉	外面筋状工具による刺突4段、把手草花のスタンプ	
166	陶器	行平鍋	口16.6 底 8.4 高 8.7	底部外面・体部外面下半ヘラケズリ	灰釉、口縁部・底部無釉	外面筋状工具による刺突6段、把手草花のスタンプ	
167	陶器	行平鍋	口15.0 底 7.0 高 9.8	底部外面・体部外面下半ヘラケズリ	鉄釉、口縁部・底部無釉	外筋状工具による刺突5段	

S K 96 (図版24 168~174)

168	磁器	広東碗	底 6.0		透明釉	灰須染付、外面帯線、内面界線、見込み不明	肥前系
169	土師器	楕木鉢	口18.0		無釉	無文	在地?
170	土師器	楕木鉢	口20.0 底12.0 高13.0		無釉	無文(墨書による人物画あり)	在地?
171	瓦器	火鉢			無釉	摺押し陽刻、外面草花、内面無文	在地?
172	瓦器	火鉢			無釉	摺押し陽刻、外面草花、内面無文	在地?
173	瓦器	火鉢			無釉	無文	在地?
174	土師器	楕木鉢	口42.4		無釉	無文	在地?胎土中に歯縁骨針

S K 112 (図版24 168~174)

175	磁器	小広東碗	口11.0 底 4.0 高 5.6		透明釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ	灰須染付、外面界線・格子目、内面界線、見込み宝	肥前系
176	磁器	小広東碗	底 4.0		透明釉	灰須染付、外面界線・格子目、内面界線	肥前系
177	磁器	端反碗	口11.0 高 5.6 底 4.2		透明釉	灰須染付、外面界線・宝、内面界線、見込み宝	肥前系
178	磁器	端反碗	口 8.0 底 3.2 高 4.0		透明釉	灰須染付、外面界線・不明、内面界線、見込み宝	肥前系
179	磁器	皿	口12.0 底 3.0 高 4.4	高台置付砂	透明釉	灰須染付、外面無文、内面界線、見込み遠山・樹木	肥前系
180	磁器	皿	口 9.4 底 2.4 高 5.0		透明釉	灰須染付、外面唐草、内面無文線、見込み山水・東鑑	肥前系

番号	種類	器種	法量	手法	施釉	文様	出土地点・その他
181	陶器	灯明籠	口 8.4 底 4.0 高 1.8	底部外面・体部外面下半へラケズリ	透明釉、底部無釉	無文	肥前系
182	陶器	甕	口39.0		透明釉	無文	肥前系

S E 80 (図版24 183~185)

183	陶器	灯明籠	口11.0 底 4.6 高 2.9	回転系切り	鉄釉、体部外面下半無釉	無文	
184	陶器	鉢	底 9.6	削出し高台	鉄釉、高台無釉	無文	
185	陶器	甕	口15.4		鉄釉、口縁部無釉	無文	

S K 131 (図版24 186~186)

186	陶器	摺鉢	口36.8		鉄釉	無文	見込み放射状御目
187	陶器	碗	口10.0 底 3.7 高 5.0		透明釉	呉須染付、外面不明、内面無文	
188	磁器	皿	口14.4 底 7.4 高 5.1	蛇ノ目凹高台	透明釉、底部外面蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面無文、内面家屋・山水	肥前系

S K 177 (図版24 189・190)

189	磁器	小杯	口 7.0 底 4.0 高 5.4		透明釉	呉須染付、外面牡丹・四方障・蓮弁、内面喫塔	肥前系
190	陶器	甕	底13.6	回転系切り無釉	灰釉、底部外面無釉	無文	

包含層・その他の遺構 (図版24 191・202)

191	青磁	碗	口17.0			片切彫り、鍋蓮弁	
192	土師器	皿	口11.0 高 2.3		非ロクロ成形		
193	珠洲	T種壺	底	外部平行タタキ、内面無文当て具			S K 204
194	珠洲	摺鉢	口34.0				
195	珠洲	摺鉢	口34.0				
196	珠洲	N種壺	底	静止系切り			
197	珠洲	T種壺or 甕		外部平行タタキ、内面無文当て具			
198	珠洲	T種壺or 甕		外部平行タタキ、内面無文当て具			
199	珠洲	T種壺or 甕		外部平行タタキ、内面無文当て具			
200	白瓷	甕		非ロクロ、外面ハケメ			笹神
201	白瓷	甕		非ロクロ			笹神
202	白瓷	甕		非ロクロ			笹神

包含層・その他の遺構 (近世) (図版 203~351)

203	陶器	丸碗	底 4.6 底 4.4 高 6.9		鉄釉、高台無釉	無文	F 6
204	陶器	端反碗	口11.8 高 6.9		透明釉	無文	S K 101, 被熱
205	陶器	丸碗	口10.8		透明釉	無文	一次調査18T, 京焼系
206	陶器	両縁皿	口10.0 底 2.1 高 4.0	見込み砂目直	灰釉	無文	G 7
207	陶器	両縁皿	口13.0		灰釉	無文	
208	陶器	皿	底 4.0	回転系切り	灰釉	無文	C 6, 被熱
209	陶器	皿	底 5.7	回転系切り	鉄釉、体部外面下半・底部無釉	無文	肥前系
210	陶器	皿	口14.0 底 5.0 高 3.7	見込み、見込み砂、高台壺付砂	鉄釉、見込み蛇の目輪割ぎ、高台無釉	鉄絵染付、外面無文、内面帆裏付絵	E 8, 肥前系

番号	種類	器種	法量	手法	施釉	文様	出土地点・その他
211	陶器	皿	口13.6 底 4.8 高 3.4	見込み・高台兼付付け砂、削り出し高台	灰釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無釉	鉄絵染付、外面無文、内面帆裏付絵	F 7、肥前系
212	陶器	皿	口15.0 底 7.0 高 5.0	削り出し高台	鉄釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無釉	外面無文、内面白泥刷毛目	E 7、肥前系
213	陶器	皿	口15.8 底 7.2 高 5.3	削り出し高台	鉄釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無釉	外面無文、内面白泥刷毛目	E 5、肥前系
214	陶器	皿	底 4.8	削り出し高台	透明釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無釉	無文	F 7、肥前系
215	陶器	皿	底 5.4	削り出し高台、見込み砂	鉄釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無釉	無文	F 8、肥前系
216	陶器	皿	口22.0	体部外面下半ヘラケズリ	鉄釉、体部外面下半無釉	白泥、内面白泥刷毛目	E 8、肥前系
217	陶器	皿	口14.2 底 6.2 高 4.7	蛇ノ目凹高台	透明釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面無文、内面花、見込み竹	D 7、瀬戸?
218	陶器	皿	底 8.0	削り出し高台	灰釉、高台無釉	鉄絵染付、外面無文、見込み草	E 8、肥前系
219	陶器	灯明器	口10.6 底 4.3 高 2.0	底部外面・体部外面下半ヘラケズリ	透明釉、体部・底部外面無釉	無文	SE 1、飯前系
220	陶器	皿	口10.0 底 4.0 高 2.1	底部外面・体部外面下半ヘラケズリ	無釉	無文	E 8、肥前系
221	陶器	小皿	口 6.5 底 3.0 高 1.8		灰釉	無文	E 8、瀬戸・美濃
222	陶器	小杯	口 7.4 底 3.1 高 5.2	回転糸切り	灰釉、底部外面無釉	無文	F 6、肥前系
223	陶器	椀	口17.2 底 8.4 高 7.8	口クロ型押し成形	灰釉?、高台無釉	無文	E 7
224	陶器	蓋	口 4.8 底 6.4 高 1.4		灰釉、内面無釉	無文	F 6
225	陶器	おろし皿	口13.8 底 8.0 高 3.4	削り出し高台	鉄釉、高台無釉	無文	D 7、瀬戸・美濃
226	陶器	おろし皿	口15.0 底 7.8 高 3.1	削り出し高台	灰釉、高台無釉	無文	E 7
227	磁器	丸椀	口 9.0 底 5.0 高 6.6	口クロ型押し成形	透明釉	呉須染付、外面人・樹木・建物、内面雷文	D 5、肥前系
228	磁器	丸椀	口 9.0 底 3.6 高 5.5		透明釉	呉須染付、外面花・草、内面無文、見込み「福」	F 8、肥前系
229	磁器	丸椀	口10.8 底 4.4 高 5.8	高台曇付砂	透明釉	呉須染付、外面界線・「寿」、内面無文	SE 74、肥前系
230	磁器	丸椀	底 4.6	高台曇付砂	透明釉	呉須染付、外面一重網目文、内面無文	F 2、肥前系
231	磁器	丸椀	口 9.6 底 3.8 高 4.9		透明釉	呉須染付、外面界線・二重網目文、内面一重網目文、見込み菊花	H 6、肥前系
232	磁器	小広東椀	口11.2 底 3.8 高 5.3		透明釉、見込み蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面界線・二重格子目、内面界線、見込み二重弁荷	E 7カクラン、肥前系
233	磁器	小広東椀	口11.0 底 4.4 高 6.0		透明釉	呉須染付、外面界線・不明、内面界線・宝、見込み界線・宝	E 7ービート30、肥前系
234	磁器	丸椀	底 5.4	高台曇付砂	透明釉	呉須染付、外面界線、内面無文	F 8、肥前系
235	磁器	丸椀	底 3.8		透明釉	呉須染付、外面界線・草花、内面無文	F 8、肥前系
236	磁器	丸椀	底 4.2		透明釉	呉須染付、外面界線・草花、内面無文	F 7、肥前系、高台内面「天明年創」銘

番号	種類	器種	流量	手法	施種	文様	出土地点・その他
237	磁器	丸椀	底 4.2		透明釉	呉須染付、外面界線・草花、内面無文	D 5 カクラン、肥前系、高台内側「太明年製」跡
238	磁器	丸椀	底 4.4		透明釉	呉須染付、外面界線・草花、内面無文	F 7、肥前系、高台内側「太明年製」跡
239	磁器	丸椀	底 4.0		透明釉	呉須染付、外面界線・半菊花・斜格子・獅子、内面無文	E 7、肥前系
240	磁器	丸椀	底 3.8		透明釉	呉須染付、外面界線・菊花・草、内面無文	E 7、肥前系
241	磁器	丸椀	底 3.4		透明釉	呉須染付、内・外面二重網目、見込み菊花	E 5、肥前系
242	磁器	小広東椀?	底 4.4		透明釉	呉須染付、外面界線・二重網目、見込み雲	G 7、肥前系
243	磁器	丸椀	口11.0		透明釉	呉須染付、外面草花?、内面無文	SD 18、肥前系
244	磁器	丸椀	口10.4		透明釉	呉須染付、外面草花?、内面無文	D 5 カクラン、肥前系
245	磁器	丸椀	口11.0		透明釉	呉須染付、外面草花、内面無文	G 8、肥前系
246	磁器	丸椀	口11.0		透明釉	呉須染付、外面草花、内面無文	D 7、肥前系
247	磁器	丸椀?	口11.0		透明釉	呉須染付、外面界線・花・水、内面斜格子・界線	E 7、肥前系
248	磁器	丸椀	口14.0		透明釉	呉須染付、外面水、内面無文	肥前系
249	磁器	筒椀	口 8.0 底 6.4 高 6.5	蛇ノ目凹高台	透明釉、底部蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面岩・葛葉、内面四方障、見込み手書き五弁花	E 5、肥前系
250	磁器	筒椀	口 8.0 底 6.2	蛇ノ目凹高台、口縁び	透明釉、底部蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面葡萄・丸に網目、内面無文	E 8 カクラン、肥前系
251	磁器	筒椀	口 6.4 高 4.9 底 3.2		透明釉	呉須染付、外面半菊・斜格子、内面界線	F 8、肥前系
252	磁器	小杯	口 7.0		透明釉、底あり	呉須染付、外面界線・一重網目、内面界線	G 8、肥前系
253	磁器	小杯	口 7.0 底 3.2 高 5.0	高台疊付砂	透明釉	呉須染付、外面草花、宝、内面無文	肥前系
254	磁器	小杯	口 7.2 高 5.4 底 3.8		透明釉	呉須染付、外面牡丹・蓮弁・四方障、内面磨路	E 7、肥前系
255	磁器	小杯	口 7.0		透明釉	呉須染付、外面草花、内面無文	E 9 カクラン、肥前系
256	磁器	小杯	底 3.2		透明釉	呉須染付、外面草花、内面無文	D 5 カクラン、肥前系
257	磁器	小杯	口 7.8 底 4.1 高 2.0		透明釉	呉須染付、外面界線・「寛」、内面無文	E 7 カクラン、肥前系?
258	磁器	広東椀蓋	径 5.2		透明釉	呉須染付、外面葡萄・茄子、内面界線・不明	D 5、肥前系
259	磁器	広東椀蓋	口 9.0 高 2.9 径 3.1		透明釉	呉須染付、外面界線・半菊?・渦・宝、内面獅子・帯縁・界線、見込み「寿」	E 6、肥前系
260	磁器	広東椀蓋	口 9.0 高 2.9 径 3.1		透明釉	呉須染付、外面界線・半菊?・渦・宝、内面獅子・帯縁・界線、見込み「寿」	E 8、肥前系
261	磁器	広東椀蓋	径 3.6		透明釉	呉須染付、外面界線・樹木、内面界線、見込み「寿」	G 8、肥前系
262	磁器	広東椀蓋	口 9.8 高 3.0 径 5.4		透明釉	呉須染付、外面松・帆掛舟、内面界線、見込み帆掛舟	G 8、肥前系
263	磁器	広東椀蓋	口 9.8 高 2.9 径 5.2		透明釉	呉須染付、外面松・帆掛舟、内面界線、見込み帆掛舟	A 2、肥前系
264	磁器	広東椀蓋	口 9.8 高 3.1 径 5.2		透明釉	呉須染付、外面松・帆掛舟、内面界線、見込み帆掛舟	E 7、肥前系
265	磁器	広東椀蓋	口 9.4 高 3.3 径 3.8		透明釉	呉須染付、素焼、外面双喜・菊・宝・方形枠に「禄」内面雷文、見込み款	F 3、肥前系
266	磁器	広東椀蓋	口 9.4 高 3.3 径 3.8		透明釉	呉須染付、素焼、外面双喜・菊・宝・方形枠に「禄」内面雷文、見込み款	F 3、肥前系
267	磁器	広東椀	口11.0 高 6.2 底 5.0		透明釉	呉須染付、外面松・帆掛舟・界線、内面界線	E 8、肥前系

番号	種類	器種	法量	手法	施軸	文様	出土地点・その他
266	磁器	広東碗			透明軸	呉須染付、外面草花・界線、内面界線、見込み不明	E 8、肥前系
269	磁器	広東碗	□11.4 底 6.0 高 6.2		透明軸	呉須染付、外面草花・界線、内面界線見込み十字花、高台内側方形特に「豫」	E 8、肥前系
270	磁器	広東碗	底 5.2		透明軸	呉須染付、外面不明・界線、内面界線、見込み「寿」	D 7、肥前系
271	磁器	広東碗	底 5.6		透明軸	呉須染付、外面不明・界線、内面界線、見込み不明	D 8・E 8、肥前系
272	磁器	小広東碗	□11.0 底 4.2 高 5.7		透明軸	呉須染付、外面半菊?・渦・宝・界線、内帯様・菊子・界線、見込み「寿」	E 7・8、肥前形
273	磁器	皿	□12.6 底 4.4 高 3.1	高台疊付砂	透明軸	呉須染付、外面無文、内面界線・不明	G 8、肥前系
274	磁器	皿	□12.4 底 6.6 高 2.8	高台疊付砂	透明軸	無文	E 8、肥前系
275	磁器	皿	底 7.8		透明軸	呉須染付、外面界線、内面景押き不明	肥前系
276	磁器	皿	□13.6 底 4.6 高 3.4		透明軸、見込み蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面無文、内面唐草、見込みコンニャク印判五弁花	D 8・9、肥前系
277	磁器	皿	□13.6 底 8.0 高 3.0		透明軸、見込み蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面無文、内面唐草	E 4、肥前系
278	磁器	皿	□11.8 底 4.0 高 3.4	削り出し高台	透明軸、見込み蛇ノ目輪割ぎ、高台無軸	呉須染付、外面無文、内面唐草	肥前系
279	磁器	皿	□11.8		透明軸・見込み蛇ノ目輪割ぎ	呉須染付、外面無文、内面風凰	F 7、肥前系
280	磁器	皿	底 7.8		透明軸、体部下半無軸	呉須染付、外面波・蝶子、内面無文、見込み流	G 7、肥前系
281	磁器	皿	□16.0		透明軸	呉須染付、外面唐草、内面不明	F 3、肥前系、漆掻ぎ
282	磁器	皿	□21.0 高 4.4 底 12.2		透明軸・口鈎	呉須染付、外面唐草・界線、内面繪唐草・界線、見込みコンニャク印判五弁花	D 6、肥前系、高台内側「成化年製」
283	磁器	皿			透明軸・ハリ支え	呉須染付・コンニャク印判、外面渦福、内面菊	E 8、肥前系
284	磁器	小皿	□ 7.4 底 2.6 高 2.9		透明軸	呉須染付、外面三重弁折、内面無文	D 5、肥前系
285	磁器	小皿	□ 6.2 底 3.4 高 2.1		透明軸・口鈎	呉須染付、外面無文、内面東屋・山水	D 8、肥前系
286	磁器	皿	□ 8.8 底 5.0 高 2.1		透明軸・底部外面無軸	無文	F 8、肥前系
287	磁器	蓋	□ 9.2 高 2.2		透明軸・口縁底部無軸	呉須染付、外面草花?・界線、内面無文	S D130、肥前系
288	磁器	蓋	□ 6.8 高 2.9		透明軸・口縁内面無軸	呉須染付、外面界線、内面無文	D 7、肥前系
289	磁器	蓋	□ 4.6 高 2.7		透明軸、口縁内面無軸	呉須染付、外面渦・草?・界線、内面無文	肥前系
290	磁器	香伊	□10.		透明軸	呉須染付、外面七宝・界線、内面四方摩・界線	D 2、肥前系
291	磁器	香伊	□ 8.4		透明軸、体部内面無軸	呉須染付、外面コウモリ・界線、内面無文	E 7、肥前系
292	陶器	香伊	□ 9.8		鉄軸、体部内面無軸	外面沈線	
293	磁器	仏飯鉢	□ 7.2 底 4.2 高 5.8		透明軸・底部外面無軸	呉須染付、外面半菊・界線、内面無文	D 8 カクラン、肥前系
294	磁器	仏飯鉢	底 5.0		透明軸・底部外面無軸	無文	D 8、肥前系
295	磁器	徳利	底 9.0		透明軸内面無軸	無文	E 7、肥前系
296	磁器	徳利	□ 3.4		透明軸	無文	E 7、肥前系
297	磁器	徳利	□ 3.8 底 4.0 高 10.2		透明軸	呉須染付、外面遠山・執事付鳥・界線、内面無文	肥前系

番号	種類	器種	流量	手法	無軸	文	出土地点・その他
298	磁器	德利	底4.6		透明釉	焼付け、外面網目・界線、内面無文	確認S T、肥前系
299	磁器	瓶	口10.8		淡緑色釉、体部内面無釉	体部外面陽刻の縞	E 8、肥前系
300	陶器	德利	口4.8		鉄釉、体部内面無釉	白泥、刷毛目	H 6、肥前系
301	陶器	德利	底7.0		透明釉、体部内面無釉	白泥、刷毛目	F 7、肥前系
302	陶器	德利	口6.0		鉄釉	無文	S K126、肥前系
303	陶器	德利	口6.0		透明釉、内面無釉	鉄絵、不明	E 8、瀬戸?
304	陶器	壺	口7.2		鉄釉、内面無釉	無文	確認S T、肥前系?
305	陶器	壺	口13.2		鉄釉	胴部に沈線2条	肥前系?
306	陶器	壺	口12.2 底9.6 高17.0	底部外面不調整	外面アメ色釉、内面鉄釉	無文	D 7、在地位?
307	陶器	壺	底7.7	回転糸切り	無釉	無文	F 7、肥前系
308	陶器	壺	口19.8		透明釉	白泥・刷毛目	D 6・E 7、備前系
309	陶器	壺	口36.2		透明釉	胴部波糸沈線	E 8、肥前系
310	陶器	壺		格子面て具	無釉		肥前系
311	陶器	壺	口82.0	非口クロ成形	無釉	無文	D 6、越前
312	陶器	鉢	口25.0		透明釉、体部外面下半無釉	白泥・刷毛目	E 7カクラン、肥前系
313	陶器	鉢	底15.4	削り出し高台	灰釉、見込み・高台無釉	白泥・刷毛目	SK110、肥前系
314	陶器	鉢	底12.0	削り出し高台	外面鉄釉、内面灰釉、高台無釉	外面無文、内面削り出し幾何学文	F 8、肥前系
315	陶器	鉢	口23.4		灰釉	外沈線による唐草文	E 7
316	陶器	鉢	口16.0		無釉	無文	E 7カクラン、肥前系
317	陶器	鉢	底5.8	削り出し高台	体部外面鉄釉、内面高台無釉	無文	G 7
318	陶器	鉢	底11.0	削り出し高台	灰釉、高台無釉	無文	E 5
319	陶器	摺鉢	口23.4 底10.0 高10.4		鉄釉	無文	S E80、見込み放射状脚目
320	陶器	摺鉢	口35.4 底14.0 高16.1	削り出し高台	鉄釉	無文	肥前系、見込み放射状脚目
321	陶器	摺鉢	口33.2 底16.0 高15.7	削り出し高台	鉄釉	無文	見込み放射状脚目
322	陶器	摺鉢	口33.8 底16.0 高16.5	削り出し高台	鉄釉	無文	見込み放射状脚目
323	陶器	摺鉢	口33.9 底15.2 高12.8	削り出し高台	鉄釉	無文	見込み放射状脚目
324	陶器	摺鉢	口23.2		口縁部鉄釉	無文	S K136、肥前系
325	陶器	摺鉢	口28.6		口縁部鉄釉	無文	S D43、肥前系
326	陶器	摺鉢	口35.2		鉄釉	無文	E 8、肥前系
327	陶器	摺鉢	口34.0		鉄釉	無文	S E93、肥前系?
328	陶器	摺鉢	口36.2		鉄釉	無文	F 5、肥前系?
329	陶器	摺鉢	口27.2		鉄釉	無文	S E34、肥前系?
330	陶器	摺鉢	口19.7 底7.6 高9.0	削り出し高台	鉄釉、体部内面・高台無釉	無文	確認S T、見込み放射状脚目
331	陶器	摺鉢	口38.8				
332	陶器	摺鉢	口36.6				E 9
333	陶器	摺鉢	底10.0	回転糸切り	無釉		S K132、肥前系、見込み放射状脚目
334	陶器	摺鉢	底10.0	回転糸切り	無釉	無文	E 5、肥前系、見込み放射状脚目
335	陶器	摺鉢	底11.4	削り出し高台	鉄釉、高台畳付無釉	無文	見込み放射状脚目
336	陶器	行平鍋蓋	口13.6 径1.8 高4.0		鉄釉	縦方向の沈線	
337	陶器	行平鍋蓋	口12.0 径6.0 高4.5		白色釉	無文	D 8カクラン

番号	種類	器種	法量	手法	施 輪	文 様	出土地点・その他
336	陶 器	行平鍋	□12.0		鉄軸、口縁部底 部無軸	体部列点	E 8 カタラン
339	陶 器	行平鍋	□18.0		白色釉	無文	D 8 カタラン
340	土 師 器	火入れ	□15.2			無文	D 5
341	土 師 器	火入れ?	底10.2	底部ヘラケズリ		無文	D 5
342	土 師 器	鉢	□13.0			無文	D 8 カタラン
343	瓦 器	火入れ	□17.6			列点	E 8 カタラン
344	土 師 器	火 鉢	□24.6			押印 体部外面花・斜帯子	E 7
345	土 師 器	火 鉢	□24.6			押印 体部外面花・斜帯子	E 7
346	土 師 器	火 鉢	底17.8			無文	E 7
347	土 師 器	火 鉢	底18.6			無文	E 7
348	土 師 器	榑木鉢	□39.6			無文	D 5
349	土 師 器	楕 楕	□33.8	非ロクロ成形、 底外ヘラケズリ		無文	
350	土 師 器	火消し 重 蓋	□26.2 高 1.4			無文	D 8 カタラン
361	土 師 器	火消し壺	□26.0 底26.0 高22.0			無文	D 8 カタラン

別表2 土・陶磁製品・石製品観察表

土・陶磁製品 (図版32 1~19)

番号	器 種	現存長	現存幅	現存厚	重量g	素 材	備 考
1	磁器片円盤	5.1	4.8	1.1	44.0	肥前系磁器 機	呉須染付 S B 198
2	磁器片円盤	4.5	2.2	0.7	14.3	肥前系磁器 機	呉須染付 S K 208
3	磁器片円盤	5.4	5.1	1.1	46.6	肥前系磁器 機	見込み蛇ノ 目輪割ぎ S K 20
4	磁器片円盤	4.8	4.4	0.6	22.7	肥前系磁器 機	呉須染付 「太明草」 鉢、S K 20
5	磁器片円盤	6.0	3.1	1.3	31.5	肥前系磁器 機	呉須染付 S B 198
6	磁器片円盤	5.0	4.8	1.0	37.4	肥前系磁器 機	呉須染付 E 5-11
7	陶器片円盤	6.5	6.0	1.3	91.0	肥前系陶器	E 8-13
8	陶器片円盤	5.2	4.9	1.0	31.9	肥前系陶器 機	見込み蛇ノ 目輪割ぎ 銅輪軸 S K 118
9	陶器片円盤	5.5	5.3	0.6	27.2	肥前系陶器	瀬毛目白泥 透明釉 E 8-16
10	研 磨 具	9.3	6.2	1.4	96.5	埴野産or壺	
11	研 磨 具	10.2	8.9	1.2	122.2	埴野産or鉢	埴野産or鉢 S K 455
12	泥 人 形	8.2	6.7	4.2	-	土師器	S K 112
13	泥 人 形	5.5	6.6	0.8	-	土師器	S K 112
14	泥 人 形	5.2	5.4	5.3	-	土師器	

番号	器 種	最大径	頂部径	高さ	重量g	素 材	備 考
15	練炭容器蓋	10.4	-	3.5	-	土師器	
16	練炭容器蓋	11.0	5.0	2.6	-	土師器	
17	練炭容器蓋	7.6	3.8	2.5	-	土師器	
18	練炭容器蓋	4.6	5.2	2.1	-	土師器	
19	土 罎	4.2	2.5	6.3	-	土師器	

石製品 (図版32 20~28)

番号	器 種	現存長	現存幅	現存厚	重量g	素 材	備 考
20	碗	7.0	6.5	2.3	153.0	凝灰岩	
21	碗	5.8	4.6	0.9	56.3	凝灰岩	
22	碗	5.1	2.6	1.1	10.6	凝灰岩	
23	碗	13.2	6.7	2.3	302.6	凝灰岩	
24	石 臼	36.0	14.8	9.2	2543.5 (重20.0)	花崗岩	S B 3-ビ ット
25	研 磨 具	8.6	7.2	3.0	112.7	輝石	
26	研 磨 具	8.0	5.0	1.9	31.8	輝石	
27	研 磨 具	10.7	5.5	4.9	161.3	輝石	
28	研 磨 具	5.0	3.9	1.8	25.0	輝石	

S D 166 (図版33 29~33)

29	研 磨 具	8.7	7.5	4.4	127.3	輝石	
30	叩 石	14.5	6.5	4.0	596.5		
31	底 石	14.5	14.5	7.2	2386.5	凝灰岩	
32	底 石	16.1	9.2	4.7	600.3	凝灰岩	被熱
33	底 石	7.8	7.0	4.8	178.3	凝灰岩	被熱

S K 20 (図版33 34・35)

34	底 石	11.6	6.9	5.4	767.5		
35	底 石	9.7	4.5	1.7	88.3	凝灰岩	

S E 198 (図版33 36~41)

36	底 石	6.0	4.7	2.6	120.5	凝灰岩	
37	底 石	7.1	4.3	2.2	74.3	凝灰岩	
38	底 石	4.8	3.5	4.2	64.3	凝灰岩	
39	底 石	8.2	6.5	2.7	204.3	砂岩	
40	底 石	5.5	4.5	1.5	65.8	砂岩	
41	底 石	9.0	8.5	3.5	281.5	砂岩	

S D 15 (図版34 42~44)

42	底 石	8.2	6.1	4.0	323.0	凝灰岩	
43	底 石	7.2	5.1	3.6	219.3		
44	底 石	6.5	3.0	2.3	54.5	凝灰岩	

S K 112 (図版35 45・46)

45	底 石	5.7	3.2	3.1	98.0	凝灰岩	
46	底 石	5.1	2.8	2.3	52.0	凝灰岩	

包含層その他の遺構 (図版35 47~58)

番号	器種	現存長	現存幅	現存厚	重量(g)	石材	備考
47	砥石	8.5	4.0	2.2	122.0	凝灰岩	SD130出土
48	砥石	7.8	2.6	1.0	38.0	凝灰岩	SD69出土
49	砥石	8.2	5.2	1.0	37.0	凝灰岩	SE190出土
50	砥石	9.5	5.5	1.0	76.0	凝灰岩	F9-4出土
51	砥石	8.2	3.9	4.0	372.0		SK69出土、 被熱
52	砥石	10.0	6.7	3.8	418.0	凝灰岩	SK8出土
53	砥石	6.0	6.0	1.7	87.0		E7-20、 ビット30

番号	器種	現存長	現存幅	現存厚	重量(g)	石材	備考
54	砥石	6.0	5.5	3.0	161.0	凝灰岩	D6-25、 ビット30出土
55	砥石	7.7	5.5	6.0	275.0		SK208出土、 被熱
56	砥石	11.0	6.0	7.0	566.0	凝灰岩	SK42出土
57	砥石	8.8	4.2	3.3	142.0	凝灰岩	SK226出土
58	叩き石	5.4	5.2	2.9	147.0	花崗岩	SK75出土、 被熱

木製品観察表

S D116 (図版35 1~13)

番号	器種	現存長	現存幅	現存厚	木取り	備考
1	舟形	16.5	7.1	1.0	木製 (高さ4.4)	略写形
2	円形底板	14.6	9.8	1.4	柾目	右端欠損、5箇の孔あり
3	角材	26.3	3.6	1.8	柾目	下端欠損
4	板材	23.5	10.1	1.5	柾目	下端欠損
5	板材	34.8	11.8	1.1	柾目	上下端欠損、6と同一個体
6	板材	14.3	4.5	1.4	柾目	上下・左端欠損、5と同一個体
7	板材	28.0	3.6	1.0	柾目	右端欠損
8	折敷底板	29.3	5.0	0.3	柾目	左右端欠損、8と同一個体
9	折敷底板	29.3	3.1	0.3	柾目	右端欠損、9と同一個体か
10	板材	17.1	3.3	0.4	柾目	上下端欠損、折敷部材の再加工?
11	板材	28.0	3.6	0.4	柾目	上下・右端欠損
12	板材	16.5	2.4	0.4	柾目	下・左端欠損、折敷部材の再加工?
13	円形板材	16.0 (径27.0)	4.5	0.5	柾目	

S E25 (図版36 14~16)

14	板材	15.2	3.3	0.5	柾目	上下・左端欠損
15	角材	16.2	2.1	1.5	柾目	略写形、一枚組手
16	板材	14.5	1.7	0.3	柾目	上下・左端欠損

S E47 (図版36 17~20)

17	円形組物側板	28.2	6.4	0.5	柾目	下端欠損
18	角材	21.3	1.9	1.2	柾目	下端欠損
19	板材	9.4	2.6	0.9	板目	裏面に円弧状の段差あり、20と同一機材の部材か、下端欠損
20	角材	12.3	1.0	0.9	板目	裏面に円弧状の段差あり、19と同一機材の部材か、下端欠損

S K69 (図版36 21~26)

21	円形板	21.7 (径23.0)	8.0	0.7	柾目	表面黒漆塗り、左端を欠損
22	円形板	19.5	19.5	1.2	板目?	径約23cmの円形板を再加工、円形容器の蓋?
23	角材	32.9	3.6	3.0	板目	円形組物の柄、略写形
24	板材	8.0	13.4	1.4	板目	上端欠損
25	下駄(歯)	4.8	9.0	0.8	板目	略写形
26	木屑	12.1	7.2	1.1		

S E80 (図版37 27~34)

27	下駄	台21.5 歯4.6	7.2 6.7	3.4 1.0	板目・木製	黒漆塗り、左端を欠損
28	下駄	台15.9 歯3.4	7.7 5.0	3.0 2.4	板目・木製	黒漆塗り、右・下端を欠損
29	円形組物側板	48.2	9.2	1.0	板目	上部に柄を通すための円形の孔あり、下端一部欠損
30	円形組物側板	36.2	8.0	1.2	板目	上部に柄を通すための方形の孔あり、下端欠損
31	板材	33.8	5.8	0.3	柾目	右端欠損
32	不明	52.2	3.8	3.8		上下端欠損
33	下駄(歯)	8.8	10.0	1.3	柾目	黒漆塗り、左右端欠損
34	円形板	8.0 (径9.0)	3.0	0.6	柾目	右端欠損

S E 198 (図版38・3935~47)

番号	部 名	現存長	現存幅	現存厚	本取り	備 考
35	円形板	21.2 (径21.2)	21.0	1.2	板目	36に対応する蓋か?、略完形
36	円形板	21.2 (径21.2)	21.2	1.2	板目・木表	略完形
37	円形板	17.7 (径18.0)	7.0	1.4	板目	右端欠損・劣化著しい
38	円形組物側板	14.3	3.5	0.5	板目	39・40・42と同一個体か?、略完形
39	円形組物側板	14.4	4.0	0.5	板目	38・40・41と同一個体か?、略完形
40	円形組物側板	14.2	3.5	0.5	板目	38・39・42と同一個体か?、略完形
41	円形組物側板	34.0	15.1	1.0	板目	上端を欠損
42	円形組物側板	14.4	7.0	0.6	板目	38~40と同一個体か?、略完形
43	角材	12.8	2.5	1.3	板目	下部側縁に孔あり、上端欠損
44	角材	13.0	2.5	1.3	板目	上下端欠損
45	角材	11.7	3.2	2.7	板目	下端一部欠損
46	漆器柄				横木取り	内面朱漆、外面黒漆に草花の文様
47	漆器皿	口10.6	底 5.2	高 2.7	横木取り	内外面朱漆、略完形

その他の遺構 (図版39・40 48~57)

48	楕円形底板	19.7	11.2	1.2	板目	両端径約5.5cmの円蓋、略完形
49	円形板	22.0 (径22.0)	7.0	1.0	板目	下端に結合のための小孔あり、上端を一部欠損、S D41
50	下 駄					S D15
51	円形板	18.5	11.9	0.7	板目	下端一部欠損、S K144
52	板材	37.1	5.6	1.1	板目	下端欠損
53	板材	20.4	7.1	1.5	板目	略完形、S E176
54	板材	43.5	8.4	1.8	板目	上端欠損
55	杭	39.3	6.5	5.8	丸太材	上部に快りあり、上端欠損、出土地点不明
56	柱 根	41.5	13.5	12.5		S B1-ビット4
57	柱 根	54.7	26.2	21.8		S B1-ビット5

S E 90井戸側材 (図版41 58~65)

58	桶側板	90.7	14.4	2.7	板目	上段、上端欠損
59	桶側板	92.8	11.5	2.7	板目	上段、上端欠損
60	桶側板	92.0	16.0	2.1	板目	上段、上端欠損
61	桶側板	91.7	12.0	2.7	板目	上段、上端欠損
62	桶側板	91.7	13.9	2.1	板目	下段、略完形
63	桶側板	91.2	13.6	1.8	板目	下段、略完形
64	桶側板	93.3	10.9	2.1	板目	下段、略完形
65	桶側板	92.0	10.7	2.7	板目	下段、略完形

S E 45井戸側板 (図版42~44 66~79)

66	桶側板	90.1	13.9	2.4	板目	上段、上端欠損
67	桶側板	90.9	16.8	2.4	板目	上段、上端欠損
68	桶側板	89.3	19.7	2.1	板目	上段、上端欠損
69	桶側板	91.5	14.4	2.3	板目	中段、略完形
70	桶側板	91.7	16.2	2.9	板目	中段、略完形
71	桶側板	89.0	19.7	2.7	板目	中段、略完形
72	桶側板	93.6	13.2	2.5	板目	下段、略完形
73	桶側板	94.4	12.8	2.6	板目	下段、略完形
74	桶側板	91.2	15.8	2.4	板目	下段、略完形
75	桶側板	91.4	10.2	2.5	板目	下段、略完形
76	井戸側板	242.4	98.2	3.6	板目	上端欠損
77	井戸側板	240.5	98.0	1.4	板目	上端欠損
78	井戸側板	258.2	33.6	1.8	正目	略完形
79	井戸側板	256.8	49.2	1.4	正目	略完形

引用・参考文献

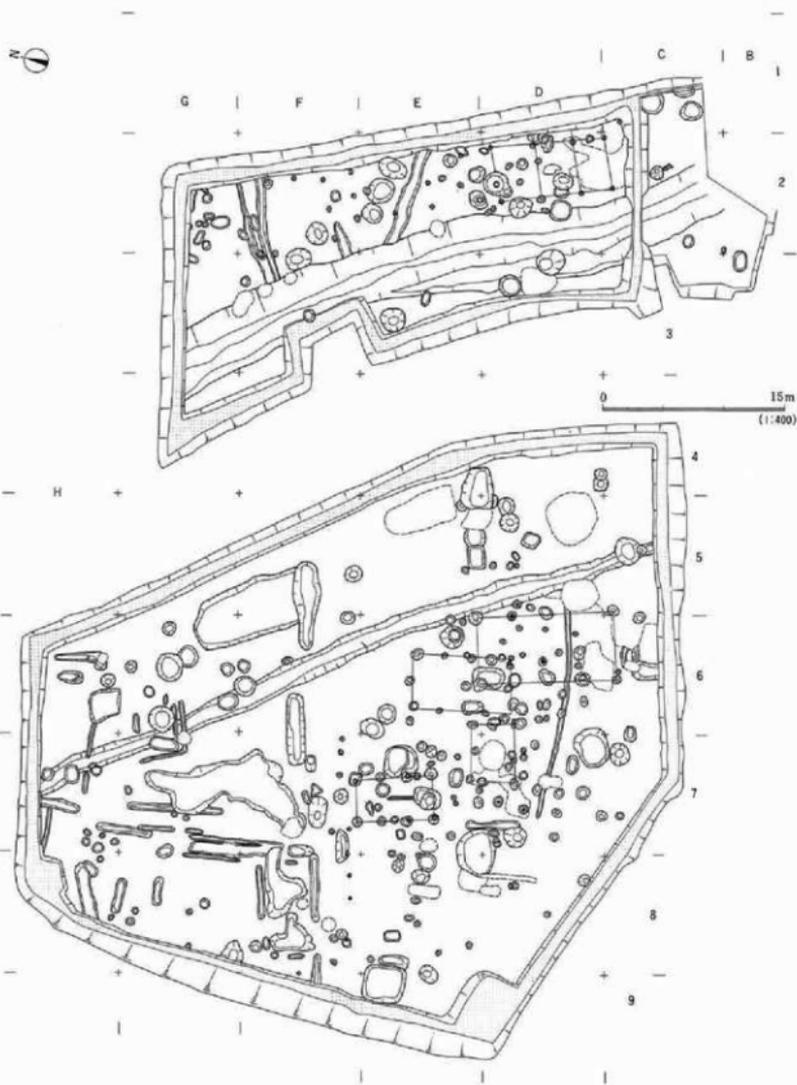
- ア甘粕 健 1993 「みちのくを目指して 日本海ルートにおける東日本の古墳出現期にいたる政治過程の予察」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- イ石川智紀他 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第58集 沖ノ羽遺跡Ⅰ（A地区）』新潟県教育委員会
- 飯村 均他 1993 「第3編 鍛冶久保遺跡」『福島県文化財調査報告書第294集 東北自動車道遺跡発掘調査報告23 谷津作館 鍛冶久保遺跡』(財)福島県文化センター・福島県教育委員会
- 井汲隆夫他 1992 『内藤町遺跡』新市区内藤町遺跡調査会
- 井野 進 1994 第二編—第三章「第一節 水利と新田開発」『新津市史』通史編上巻 新津市
- ウ上田秀夫 1982 「14—16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻5号 史学研究会
- エ江戸遺跡研究会 1990 『江戸の陶磁器』
- 江戸遺跡研究会編 1991 『江戸の食文化』吉川弘文館
- オ大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- 大橋康二 1994 『古伊万里の文様』理工学社
- 大八木謙司他 1991 『四谷三丁目遺跡』新市区四谷三丁目遺跡調査会
- 小村 弑 『幕藩体制成立史の研究』吉川弘文館
- 小村 弑他編 1989 『角川日本地名大辞典 15 新潟県』角川書店
- カ河西健二 1993 「越中における様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究会
- 河西健二 1994 「中世末から近世の建物」『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第5集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 川上貞雄 1989 「第2編 考古」『新津市史』資料編第1巻 原始・古代・中世 新津市
- 川上貞雄 1993 『川口甲遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 川村浩司 1993 「北陸北東部の古墳出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- キ九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』
- ク小池義人他 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 細池・寺道上遺跡』新潟県教育委員会
- 小泉 弘 1983 『江戸を掘る』柏書房
- 小泉 弘 1996 「江戸の町屋」『考古学による日本歴史15 家族と住まい』雄山閣
- 小林 克 1995 「近世照明具研究へのアプローチ」『季刊考古学53—特集江戸時代の発掘と文化』雄山閣
- サ坂井秀弥 1988 「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』1号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥他 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集 坪ノ内館跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥他 1987 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 番場遺跡』新潟県教育委員会
- シ品田高志 1991 「越後の中世土器—編年の研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』8号 新潟考古学談話会
- ス鈴木郁夫 1975 「地形分類図」『下越開発地域土地分類基本調査』新潟県農地建設課

- ツ鶴巻康志 1991 「石器系征神窯製品について」『新潟考古学談話学会報』7号 新潟考古学談話
会
- 鶴巻康志 1992 「越後の様相」『中世前期の土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- ト東京大学遺跡調査室 1990 『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 戸根与八郎他 19 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第41集 高田城下鍋屋町遺跡』新潟県教育委
員会
富山大学考古学研究室 1993 『珠洲大畑窯跡』
- ナ長佐古真也 1993 「『受け付き灯明皿』に見る生産と流通」『東京都埋蔵文化財センター研究論集
XI』(財)東京都埋蔵文化財センター
- 長佐古真也 1995 「農村-多摩ニュータウン遺跡」『季刊考古学53-特集江戸時代の発掘と文化』
雄山閣
- 中条町教育委員会 1993 『中条町埋蔵文化財調査報告第2集 江上船跡1』
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代編』
- フ藤本 強 1990 『埋もれた江戸 東大の地下の大名屋敷』平凡社
- マ前山精明他 1985 『城願寺跡・坊ヶ入墳墓-東北電力巻原子力発電所建設計画用地内埋蔵文化財
発掘調査報告書』巻町教育委員会
- 増山 仁他 1995 『本町一丁目遺跡』金沢市・金沢市教育委員会
- 水沢幸一 1993 「越後における中世村落の様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世
土器研究会
- ヤ矢田俊文 1991 「中世越後における集落の移動に関する一考察」『新潟史学』第26号 新潟史学
会
- ヨ吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 四柳嘉章 1991 「古代~近世漆器の変遷と塗飾技術」『石川考古学研究会会誌』石川考古学研
究会
- ワ渡邊朋和 1991 『長沼遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡邊朋和 1992 『上浦遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡邊ますみ 1991 『荒木前遺跡』亀田町教育委員会

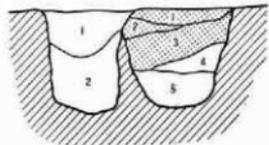
図 版

凡 例

- 1 ここにはおもな遺構・遺物の実測図と写真をおさめる。
- 2 遺構は掘立柱建物（SB）を除き、種別毎に一連番号を付し、土坑（SK）、井戸（SE）、溝（SD）などで分類した。
- 3 遺物は、種類毎（土器・陶磁器、土・陶磁製品・石製品、木製品）に一連番号を付し、写真もこれにしたがった。
- 4 遺物実測図において、口径復元が困難なものは、中心線と外形線を離すか、断面と外形線のみ表示した。
- 5 実測図・写真の縮尺は各図版に示した。



SE12 a 3,800



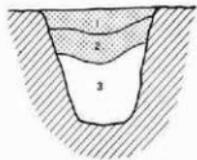
- SE1
1 灰色シルト (しまりあり)
2 暗青灰色粘土 (粘性強い)
- SE2
1 茶褐色シルト
2 灰色シルトブロック混入茶褐色シルト
3 灰色シルトI (マンガン粒多く含む)
4 灰色シルトブロック混入茶褐色シルトII (2に比べ灰色シルトブロックが少ない)
5 黄褐色粘土ブロック混入灰色シルト
6 暗青灰色粘土ブロック混入青灰色粘土

SE9 b 3,800



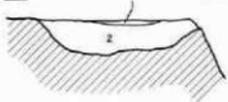
- 1 黄褐色シルトブロック混入茶褐色シルトI
2 黄褐色シルトブロック混入茶褐色シルトII (1に比べ黄褐色シルトブロックを多く含む。マンガン粒を含む)
3 暗青灰色粘土 (粘性強い)

SE10 c 3,800



- 1 茶褐色シルトI
2 茶褐色シルトII (1に比べやや明るい)
3 暗青灰色粘土 (粘性強い)

SK7 e 3,800



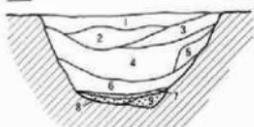
- 1 黒褐色土
2 灰色シルト (しまりあり)

SE34 d 3,800



- 1 茶褐色シルトI (最少量含む)
2 茶褐色シルトII (黄褐色シルトブロック少量含む)
3 茶褐色シルトIII (2に比べ黄褐色シルトブロックの量が多い)
4 暗青灰色粘土ブロック混入茶褐色シルト
5 暗青灰色粘土 (粘性強い)

SK33 f 3,800



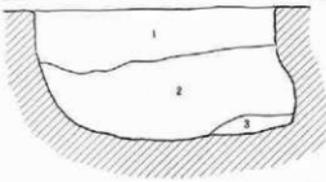
- 1 暗茶褐色シルト質粘土 (最少量含む)
2 灰白色シルトブロック混入暗茶褐色シルト質粘土I
3 灰白色シルトブロック混入暗茶褐色シルト質粘土II (2に比べ灰色シルトの量が多い)
4 暗灰褐色シルトI (灰白色シルトブロック少量混入)
5 灰白色粘土
6 暗灰褐色シルトII
7 茶褐色シルト (最少量混入)
8 黄褐色砂層
9 青灰色粘土ブロック混入青灰色砂層

SE47 g 3,800



- 1 茶褐色シルト (マンガン粒含む)
2 灰色粘土ブロック混入茶褐色シルト (マンガン粒含む)
3 青灰色粘土ブロック混入灰色シルト
4 青灰色シルト
5 暗青灰色粘土

SE74 h 3,800



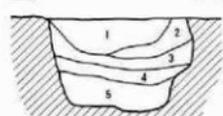
- 1 暗青灰色粘土
2 暗青灰色粘土ブロック混入灰色粘土
3 青灰色粘土

SK8 i 3,800



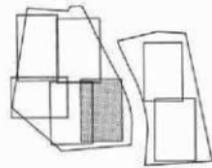
- 茶褐色シルト
黄褐色を多く含む層
砂層

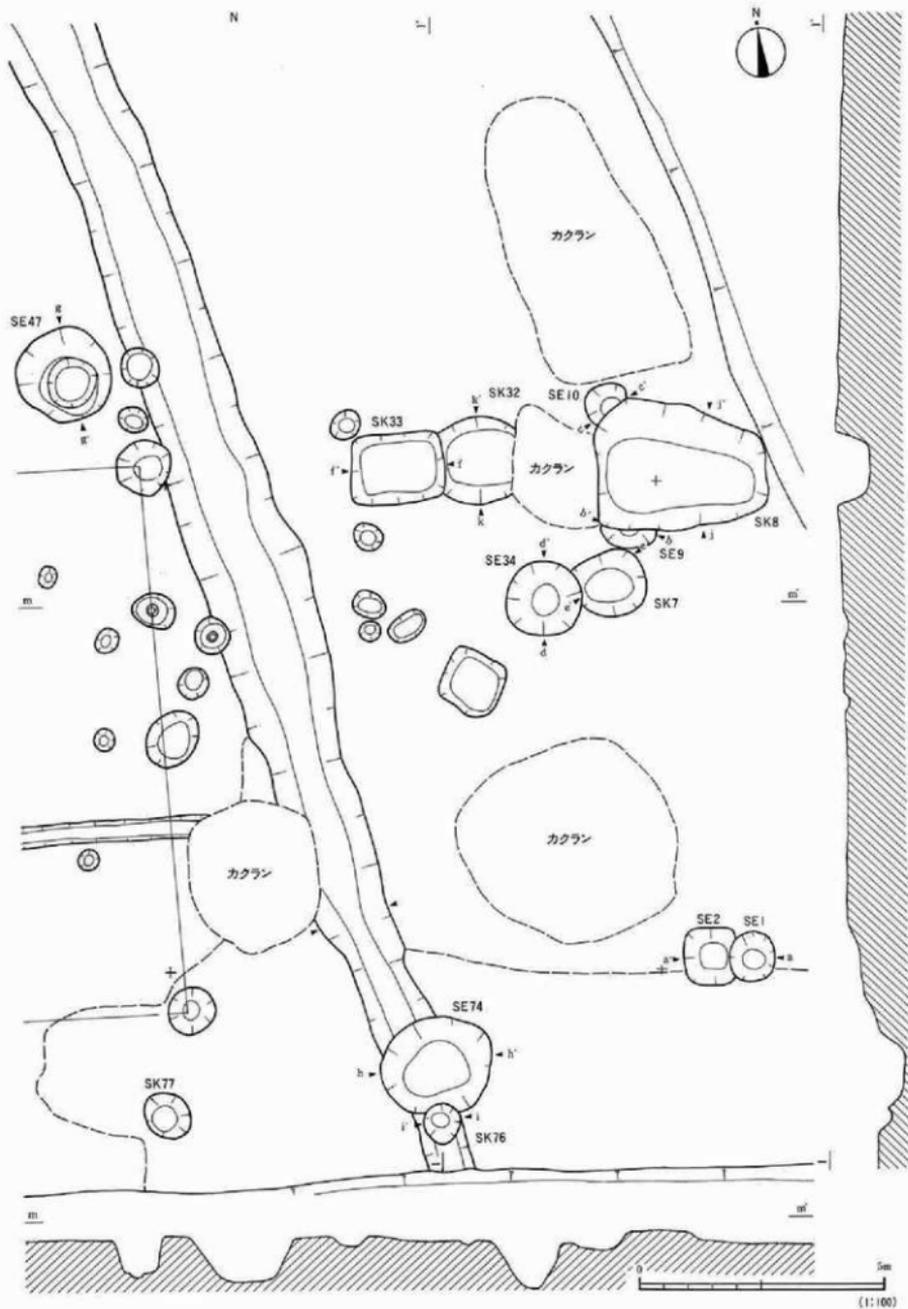
SK76 j 3,800



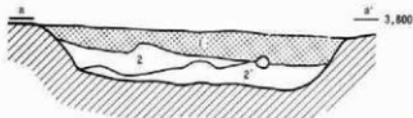
- 1 白色粘土ブロック混入黄褐色粘土
2 黄褐色シルト質粘土
3 暗青灰色粘土
4 黒褐色粘土
5 暗青灰色粘土

SK32 k 3,800





SK49



- 1 灰色粘土ブロック混茶褐色シルト
- 2 灰色粘土
- 2' 青灰色粘土 (2がブライ化したもの)

SK70



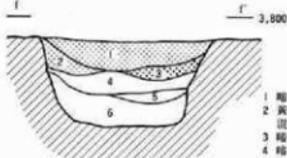
- 1 褐色褐色シルト質粘土
- 2 暗青灰色粘土混青灰色粘土
- 3 青灰色粘土

SE72



- 1 茶褐色シルト
- 2 青灰色粘土
- 3 砂混青灰色粘土I
- 4 青灰色シルト
- 5 砂混青灰色粘土II
- 6 青灰色粘土
- 7 黄褐色砂層

SE79



- 1 暗茶褐色シルト
- 2 黄茶褐色シルトブロック
- 混茶褐色シルト
- 3 暗茶褐色砂層
- 4 暗青灰色粘土I
- 5 青灰色砂層
- 6 暗青灰色粘土II

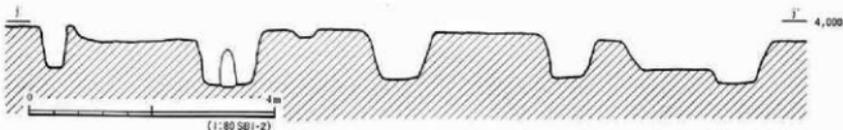
SB2



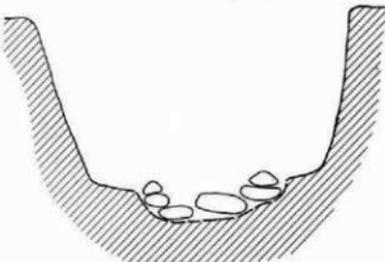
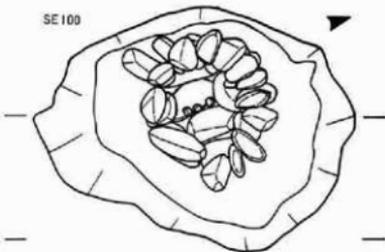
b



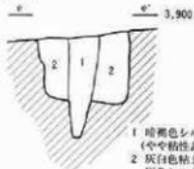
SB1



SE100



SB1ピット7

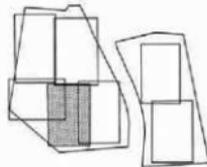


- 1 暗褐色シルト質粘土 (やや粘性あり)
- 2 灰白色粘土ブロック混灰色シルト質粘土 (やや粘性あり)

SB1ピット2



- 1 黒褐色シルト質粘土 (やや粘性あり)
- 2 灰色シルト質粘土 (中や粘性あり)



- 茶褐色シルト
- 砂層

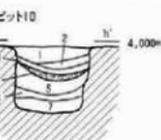




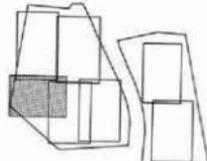
- 1 暗灰色シルトブロック混雑茶褐色シルト質粘土
- 2 灰褐色シルト I
- 3 暗褐色砂層
- 4 灰褐色シルト II
- 5 茶褐色シルト



- 1 黄褐色シルト I
- 2 黄褐色シルト II
- 3 暗褐色シルト (I に比べやや暗い)
- 4 灰色シルトブロック混雑茶褐色シルト
- 5 暗褐色シルト
- 6 暗褐色土 (植物遺体を多量に含む)



- 1 褐色シルト混雑茶褐色シルト質粘土 I
- 2 褐色シルト混雑茶褐色シルト
- 3 褐色シルト混雑茶褐色シルト質粘土 II
- 4 暗褐色シルト (炭化物多く含む)
- 5 褐色シルト混雑茶褐色シルト質粘土 III
- 6 暗褐色シルト質粘土
- 7 暗青灰色粘土



茶褐色シルト

炭化物を多く含む層

植物遺体を多く含む層



- 1 茶褐色シルト混雑茶褐色シルト
- 2 暗褐色シルト混雑茶褐色シルト
- 3 茶褐色砂層
- 4 灰色シルト混雑青灰色シルト



- 1 黄褐色シルト混雑茶褐色シルト質粘土
- 2 暗褐色シルト質粘土 (炭・軽石の砂片を含む)
- 3 暗褐色シルト



- 1 茶褐色シルト I
- 2 暗褐色土 (植物遺体多く含む)
- 3 茶褐色シルト II (I に比べやや暗い、マンガン酸を含む)
- 4 灰色粘土



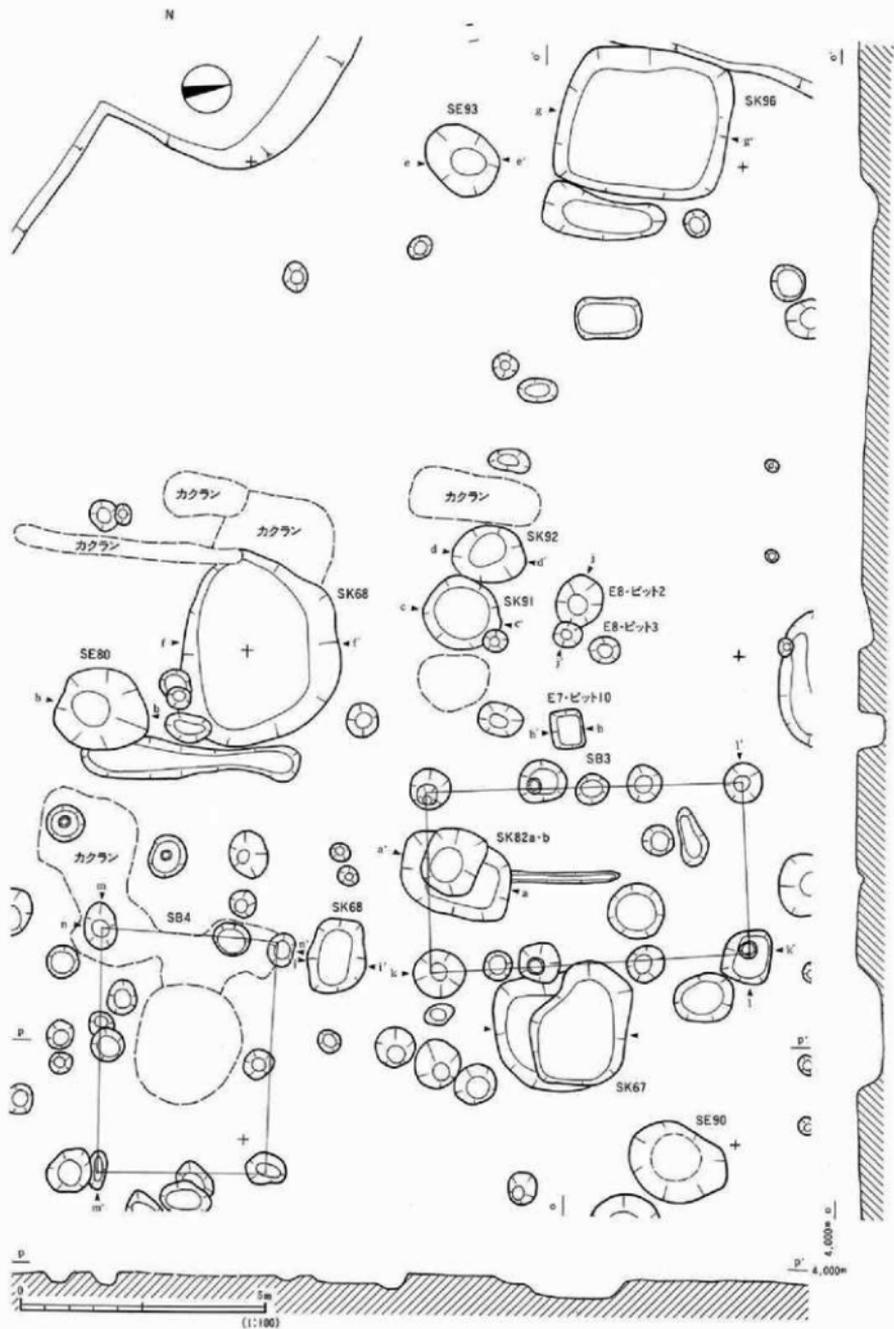
- 1 暗茶褐色シルト質粘土 I
- 2 暗褐色砂層 I
- 3 暗茶褐色シルト質粘土 II
- 4 灰色シルト質粘土 I
- 5 黒色砂層 II
- 6 灰色シルト質粘土 II



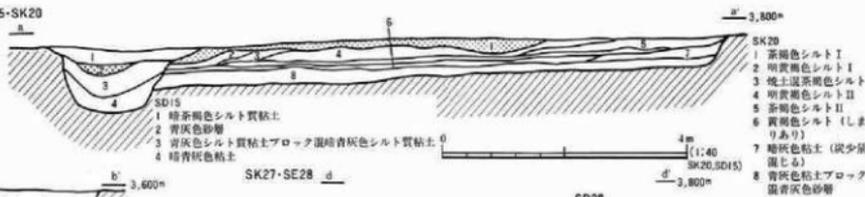
- 1 灰色シルト混雑茶褐色シルト (マンガン酸含む)
- 2 暗青灰色粘土ブロック混雑青灰色粘土



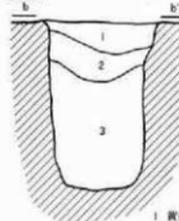
0 2m (1:40 その他)



SD15-SK20



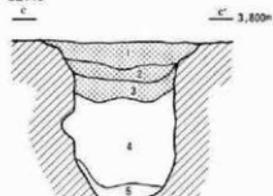
SE14i



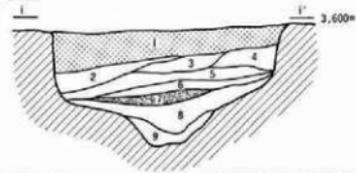
SK27-SE28



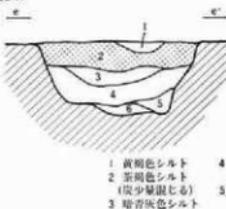
SE140



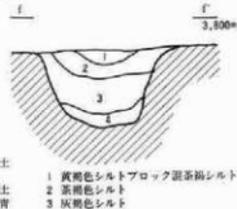
SE25



SD41



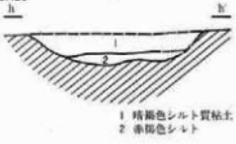
SE21



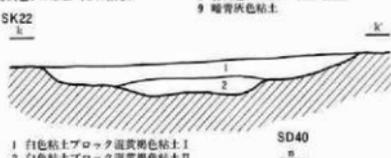
SE23



SK26



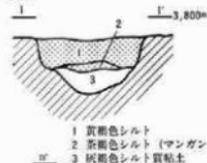
SK22



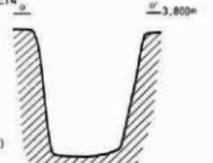
SK17



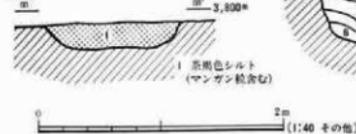
SK29



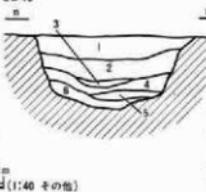
SE14j

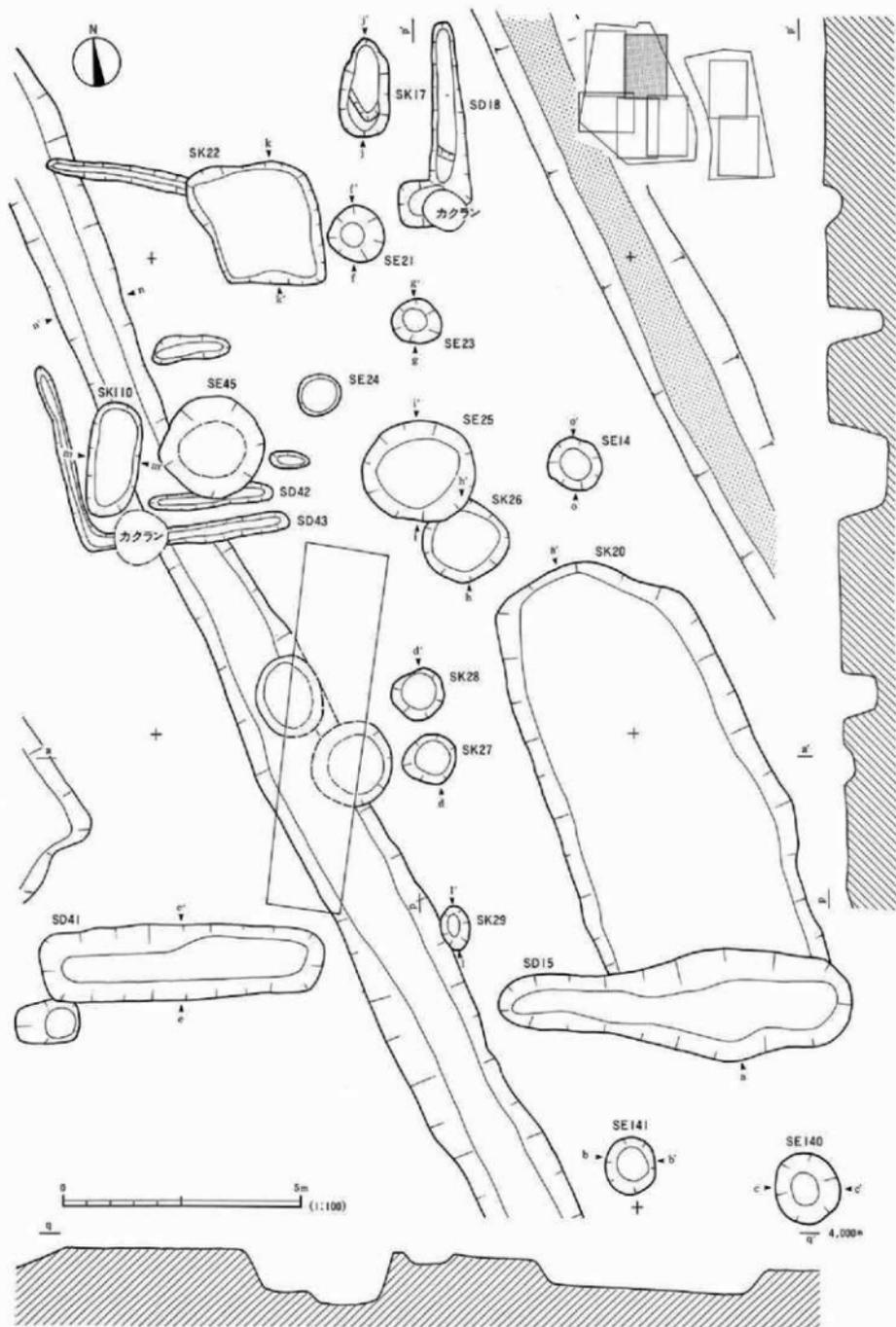


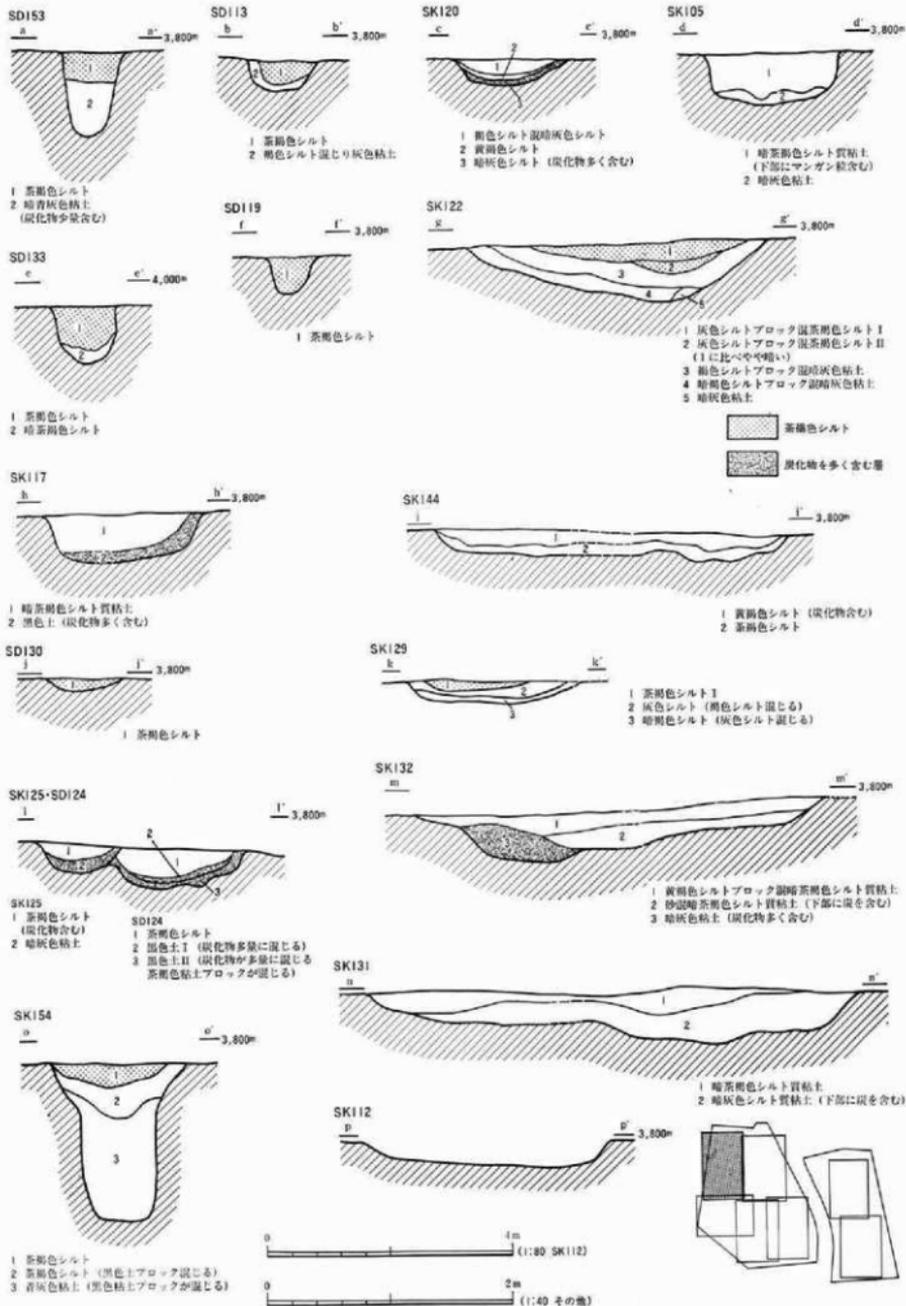
SK110

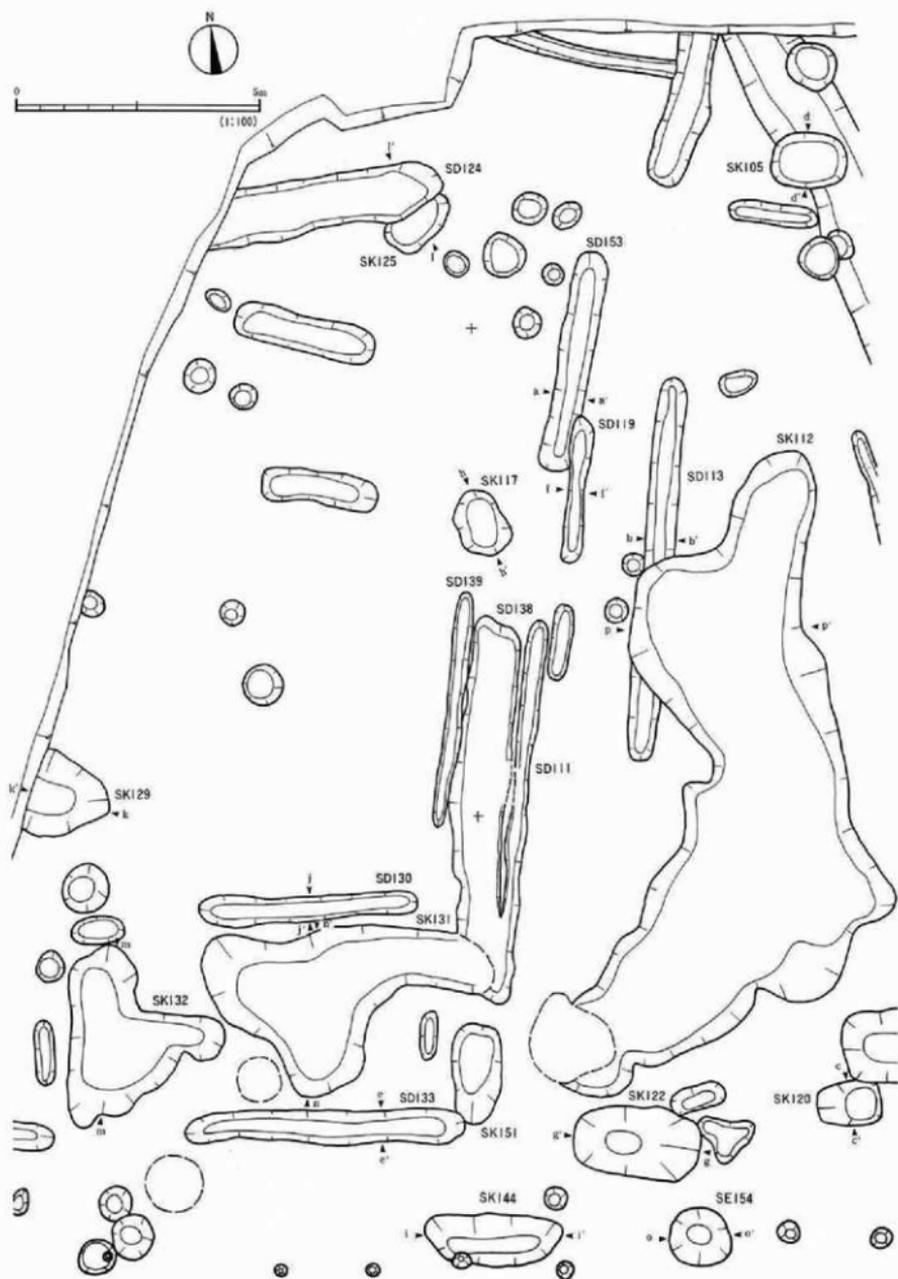


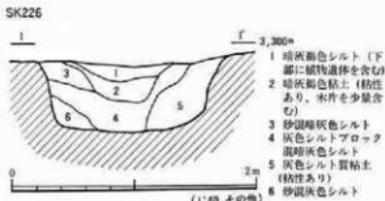
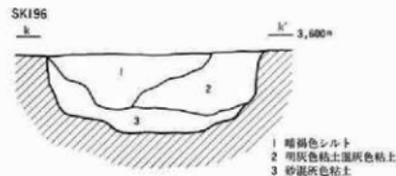
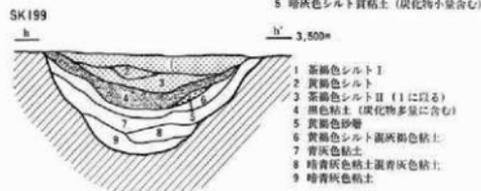
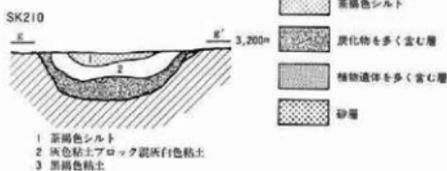
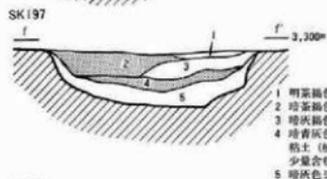
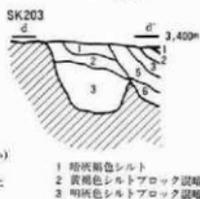
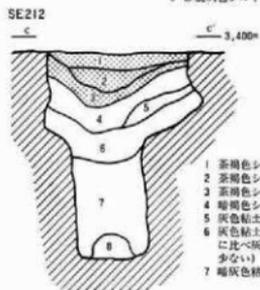
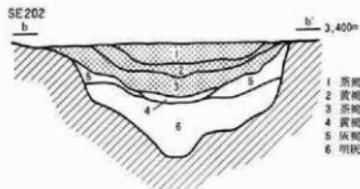
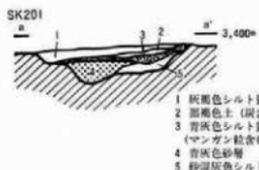
SD40

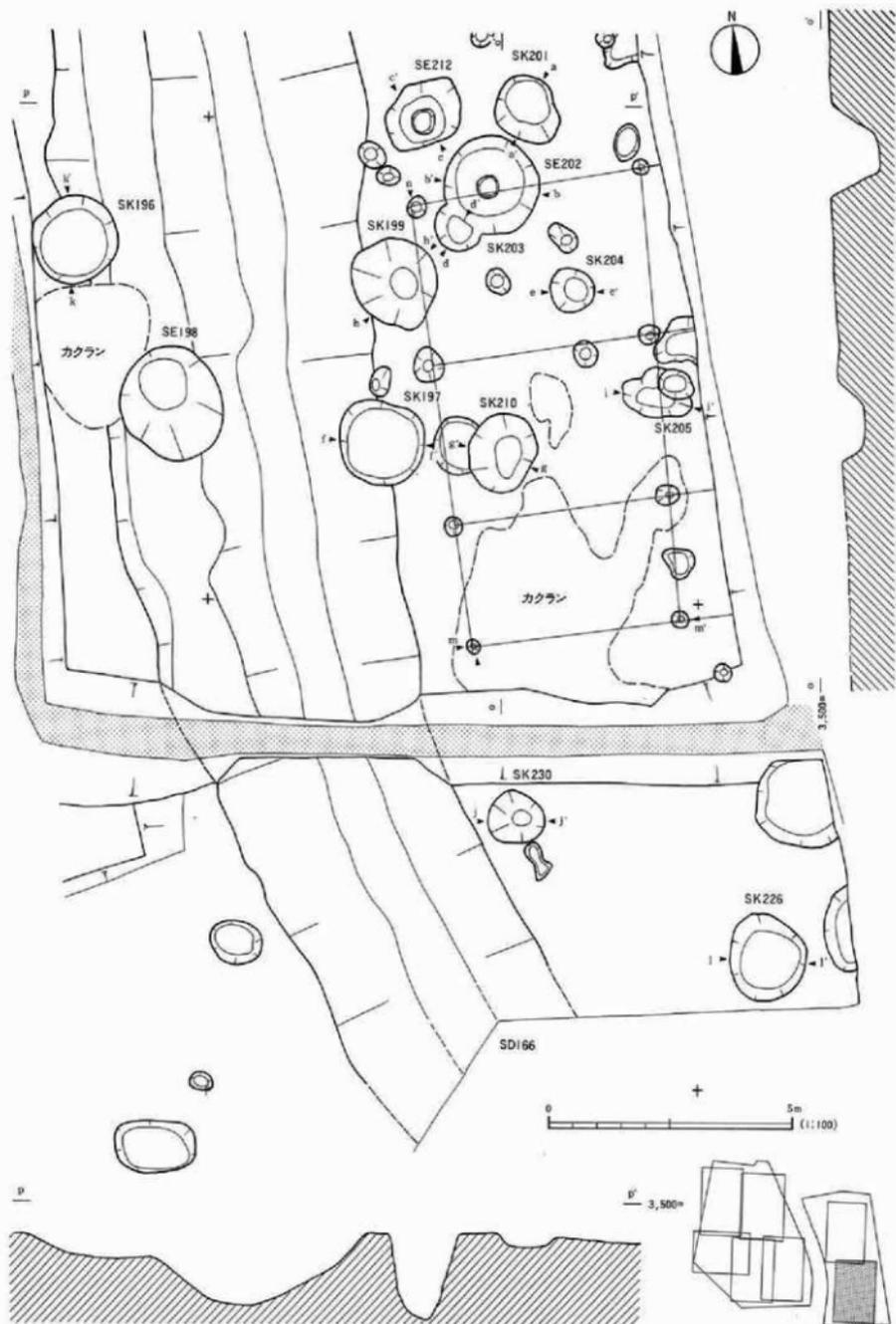




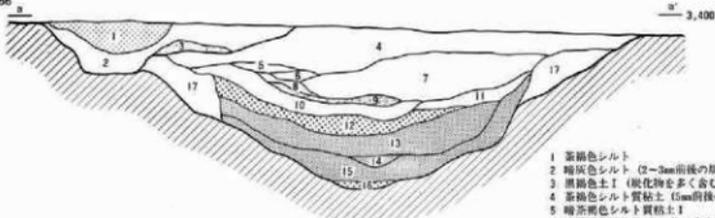






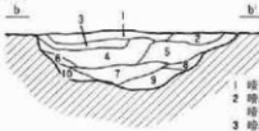


SD166



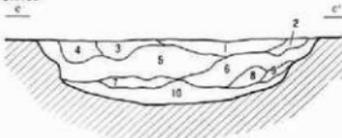
- 1 茶褐色シルト (2-3m前後の炭化物を少量含む)
- 2 暗灰色シルト (炭化物を多く含む)
- 3 茶褐色シルト質粘土 (5m前後の炭化物を少量含む)
- 4 暗茶褐色シルト質粘土 I
- 5 暗茶褐色粘土 II (5に比べやや明るい)
- 6 暗茶褐色粘土 III (5に比る)
- 7 暗茶褐色粘土 III (5に比る)
- 8
- 9 黒褐色土 II (炭化物を多く含む)
- 10 青灰色シルトブロック混黒褐色土
- 11 青灰色シルト
- 12 砂混青灰色シルト (植物遺体少量含む)
- 13 暗青灰色シルト II (下部に黒褐色土が薄く入る。植物遺体多量に含む)
- 14 暗青灰色シルト II (植物遺体を多量に含む)
- 15 暗青灰色シルト III (13-14に比べ植物遺体が少ない)
- 16 青灰色砂層
- 17 青灰色シルト (混入物をほとんど含まない)

SK194



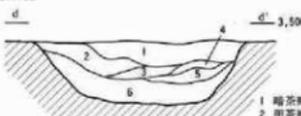
- 1 暗茶褐色シルト質粘土
- 2 暗灰色粘土ブロック混
- 3 暗茶褐色シルト質粘土 I
- 4 暗灰色シルト質粘土 II (3に比べやや明るい)
- 5 黄褐色砂混暗灰色シルト質粘土
- 6 明灰色シルト
- 7 暗灰色シルト質粘土 III
- 8 明灰色シルト質粘土 III
- 9 暗灰色シルト質粘土 IV
- 10 暗灰色シルト質粘土

SK193



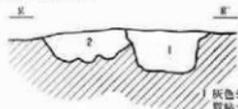
- 1 明灰色粘土ブロック混明灰色シルト質粘土
- 2 暗灰色シルト質粘土
- 3 暗灰色シルト質粘土ブロック混
- 4 暗茶褐色シルト質粘土ブロック混
- 5 暗灰色シルト質粘土
- 6 暗褐色シルト質粘土
- 7 暗褐色シルト質粘土 I
- 8 暗褐色シルト質粘土 II (7に比べ明るい)
- 9 暗褐色シルト質粘土 III (8に比べ明るい)
- 10 暗褐色粘土
- 11 暗褐色粘土 (植物遺体を少量含む)

SK192



- 1 暗茶褐色シルト質粘土 I
- 2 明茶褐色シルト質粘土
- 3 暗灰色シルト質粘土ブロック混
- 4 暗茶褐色シルト質粘土 II
- 5 暗灰色シルト質粘土 I
- 6 暗灰色シルト質粘土 II (5に比べやや暗い)

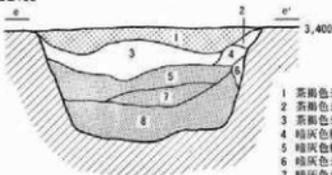
SD165-E2,ピット10



- 1 灰色シルト質粘土ブロック混暗灰色シルト質粘土
- 2 灰色シルト質粘土 (マンガン粒少量含む)

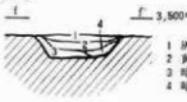


SE190

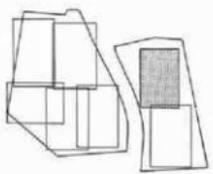


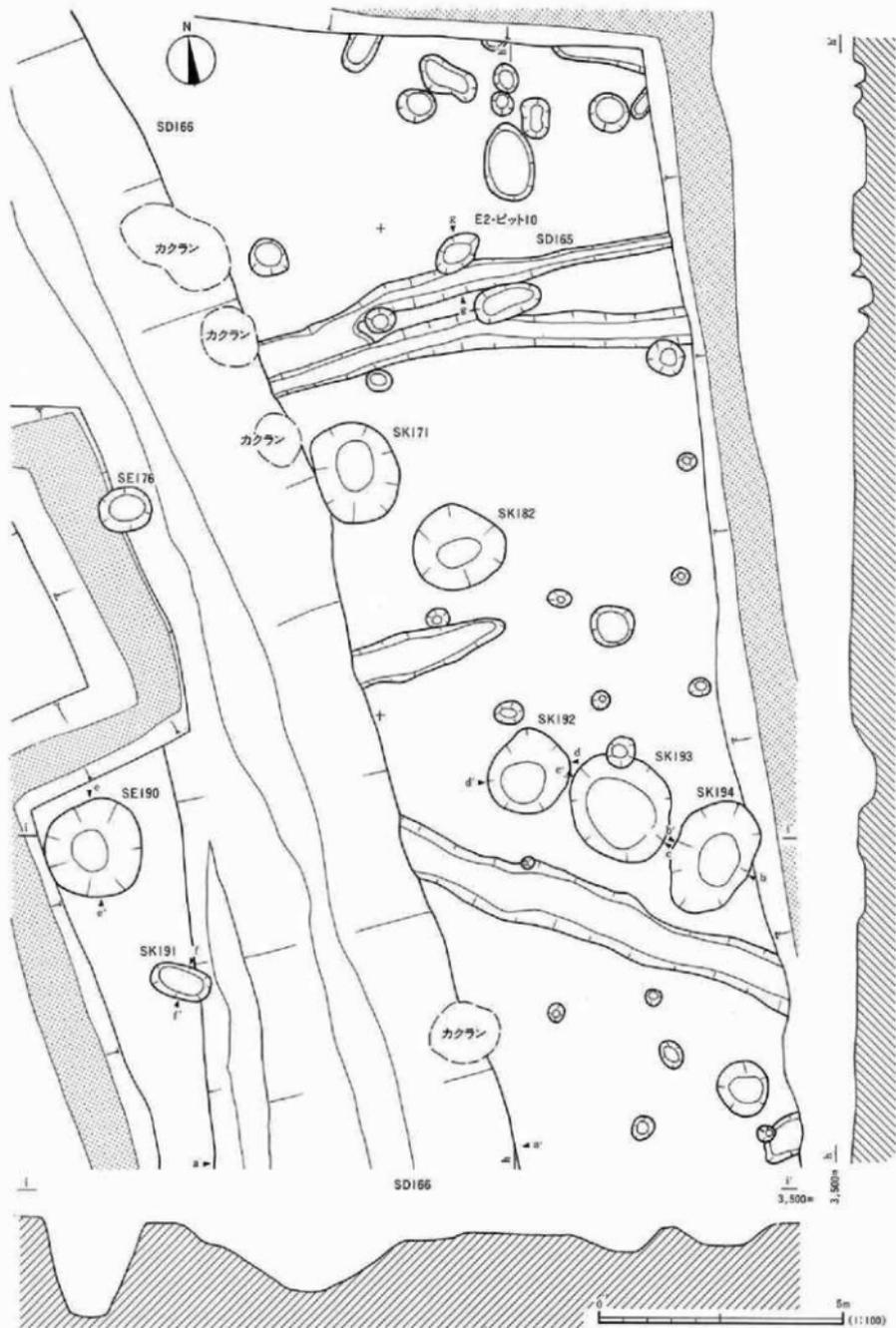
- 1 茶褐色シルト I
- 2 茶褐色シルト II (1に比べやや暗い)
- 3 茶褐色シルト混暗灰色シルト質粘土
- 4 暗灰色粘土
- 5 暗灰色粘土と植物遺体層の互層 I
- 6 暗灰色シルト質粘土
- 7 暗灰色シルトと植物遺体層の互層 II
- 8 暗灰色シルトと植物遺体層の互層 III (7に比べしまりが無く軟質)

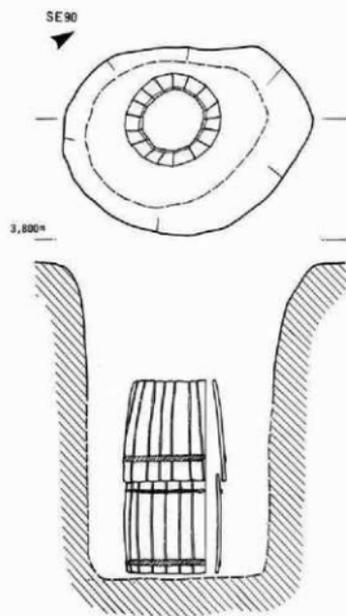
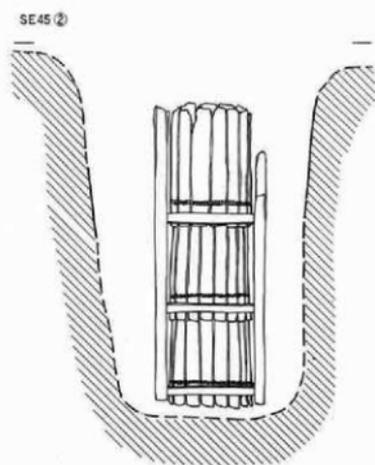
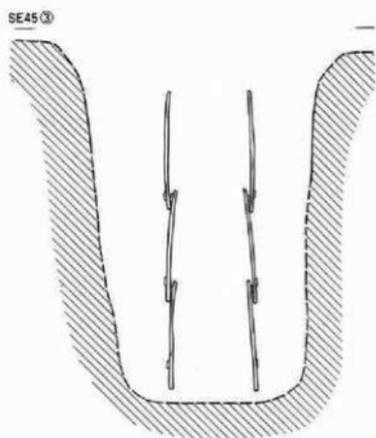
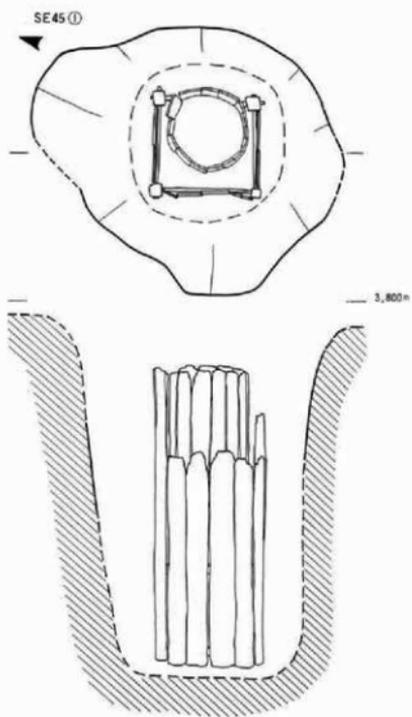
SK191

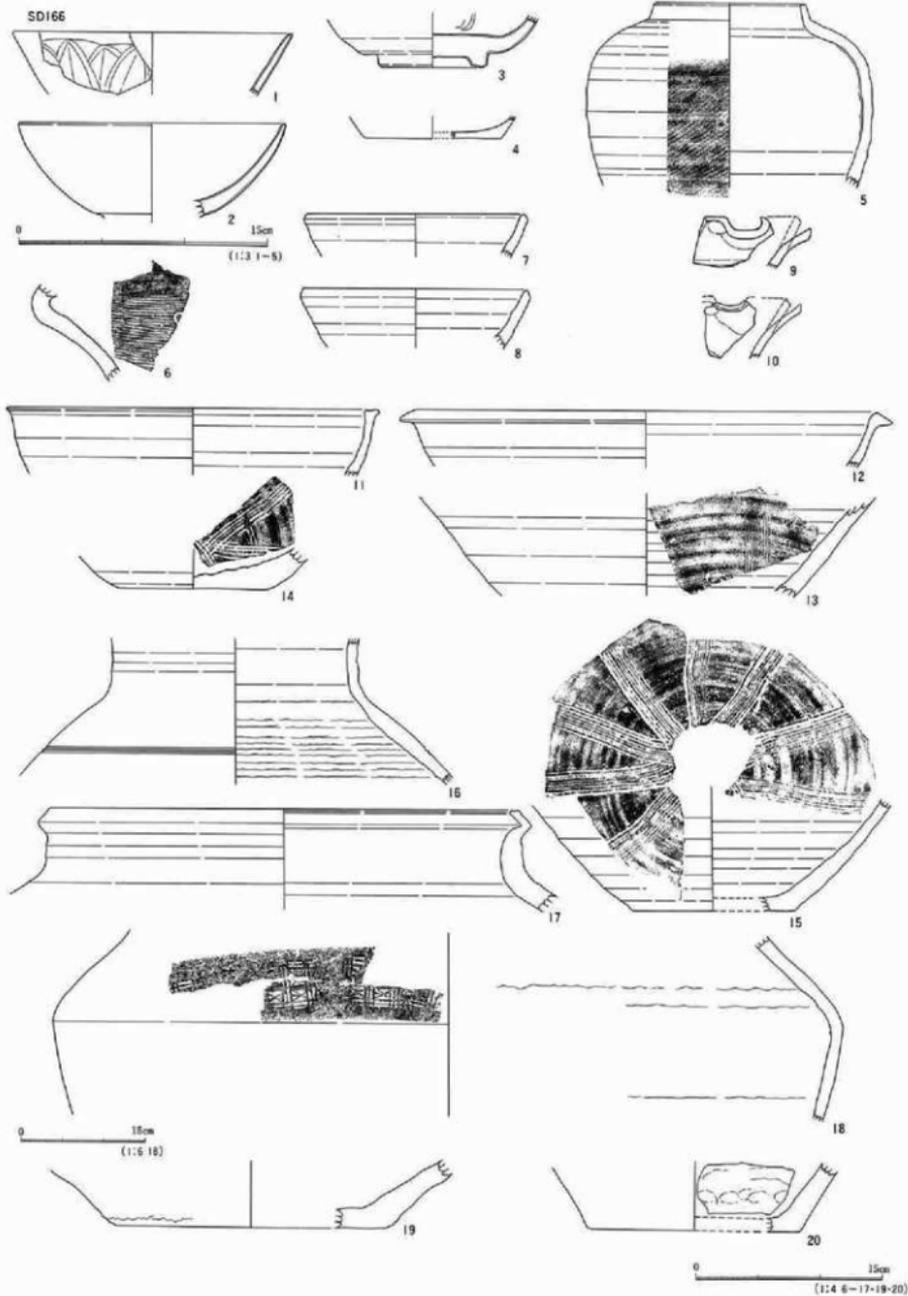


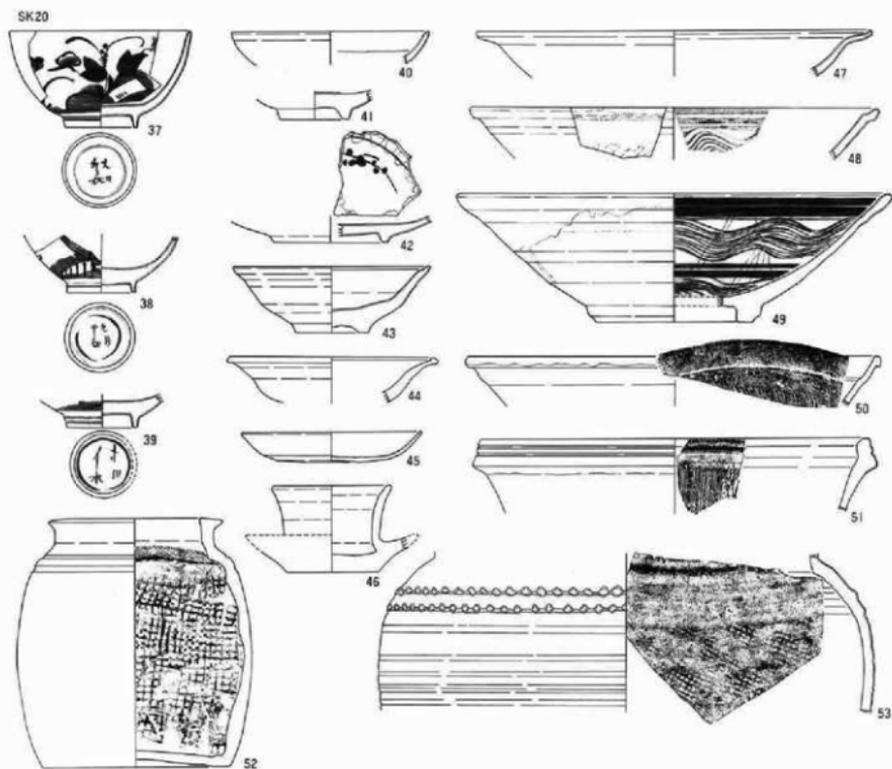
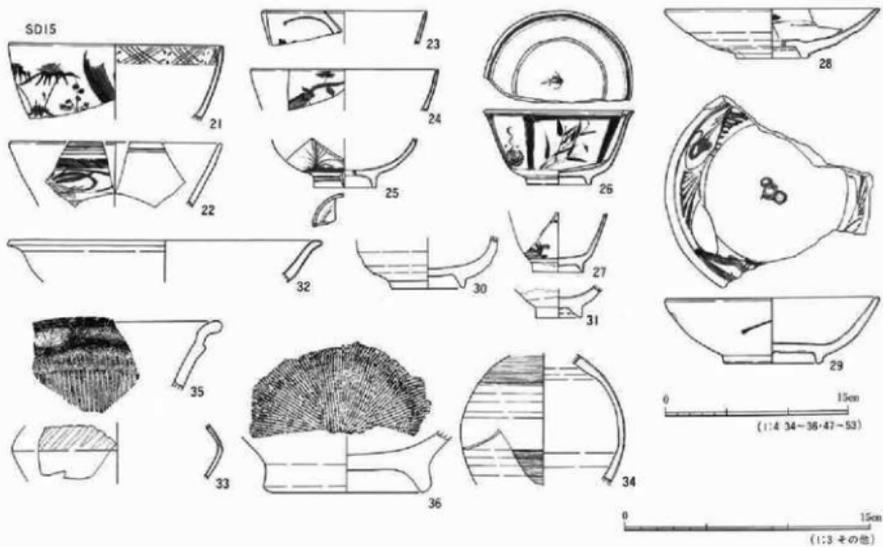
- 1 灰褐色シルト
- 2 黄灰色シルト
- 3 暗灰色シルト I (少量を少量含む)
- 4 暗灰色シルト II (混入物が少なく粗質)



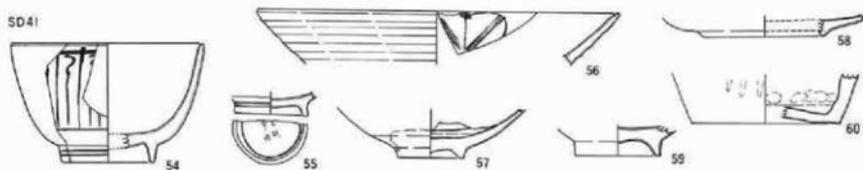




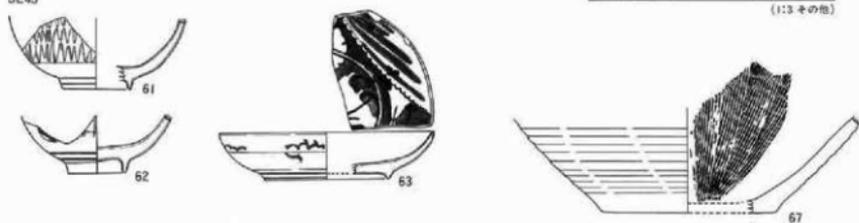




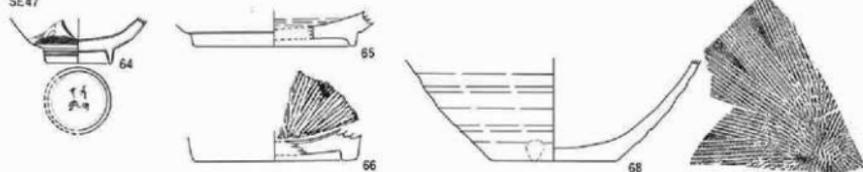
SD41



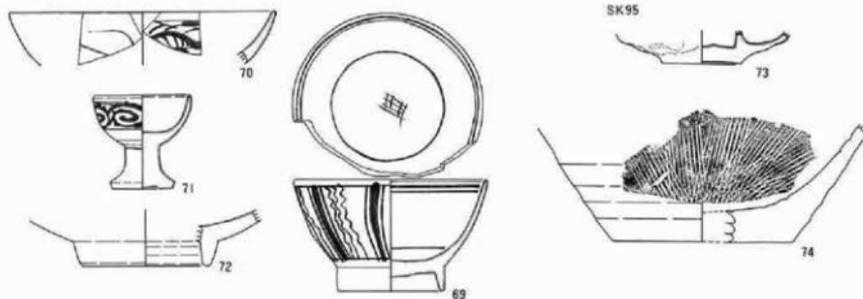
SE45



SE47



E7・ビット10



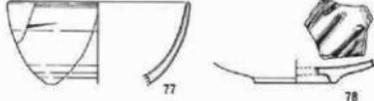
SK95



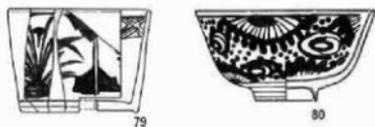
SK 100



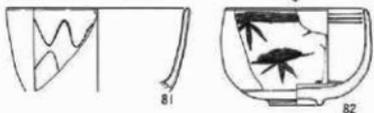
SE21



SK91



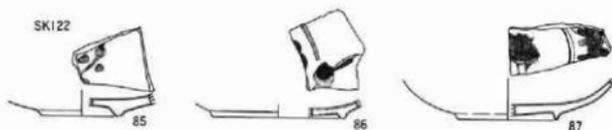
SD 130



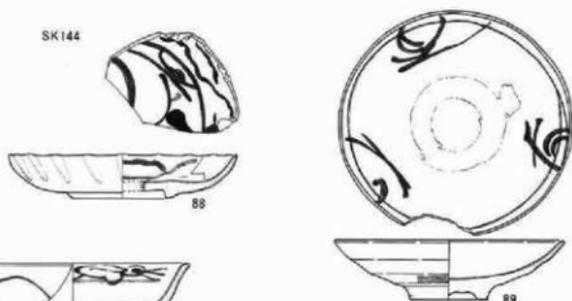
SD116



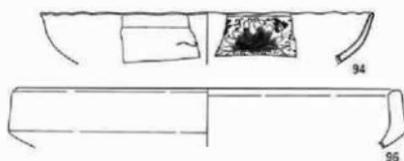
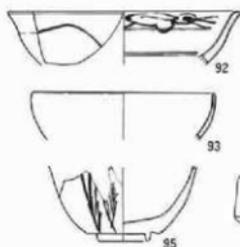
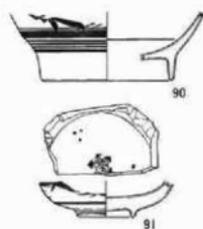
SK122



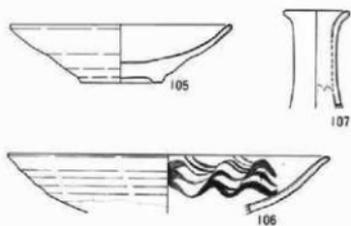
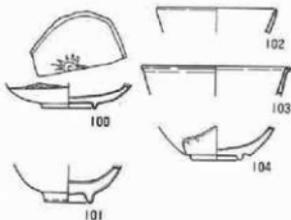
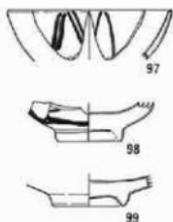
SK144



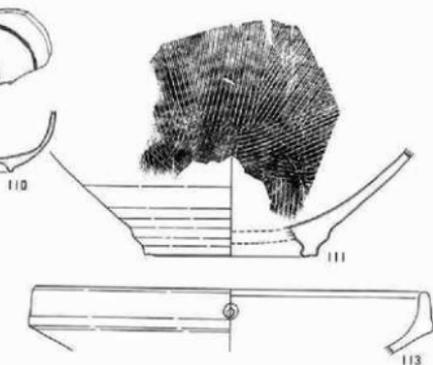
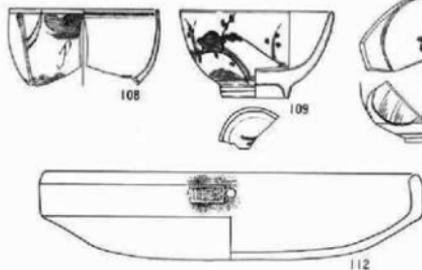
SD178



SE176



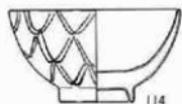
SE190



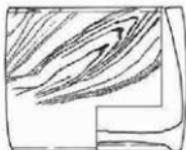
0 15cm
 (1:4 84-95-107-111-113)
 0 15cm
 (1:3 4の他)

113

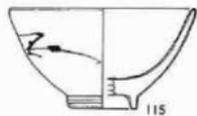
SE198



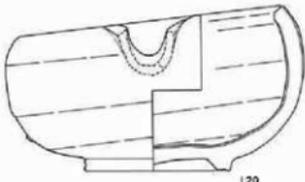
114



119



115



120



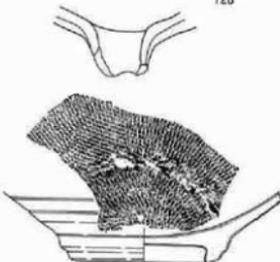
116



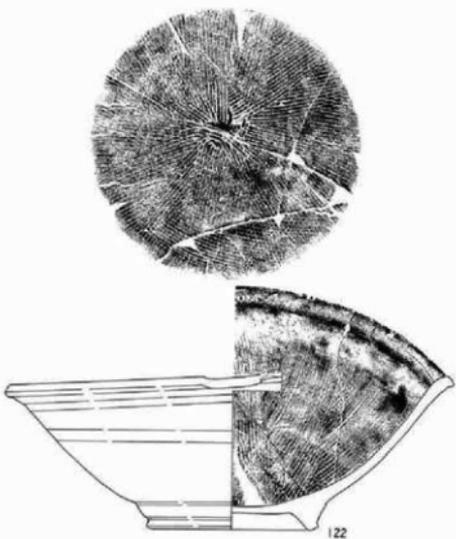
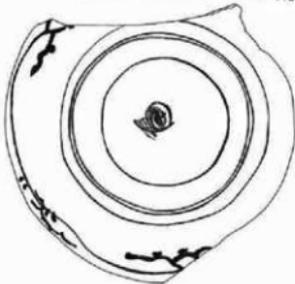
118



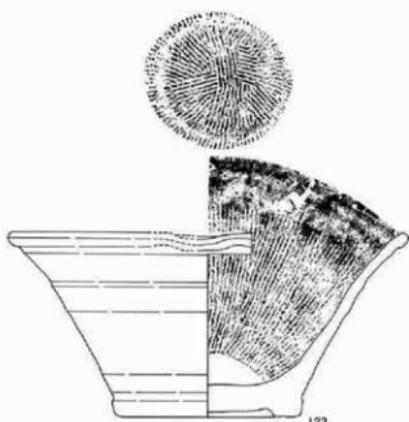
117



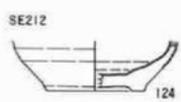
121



122



123



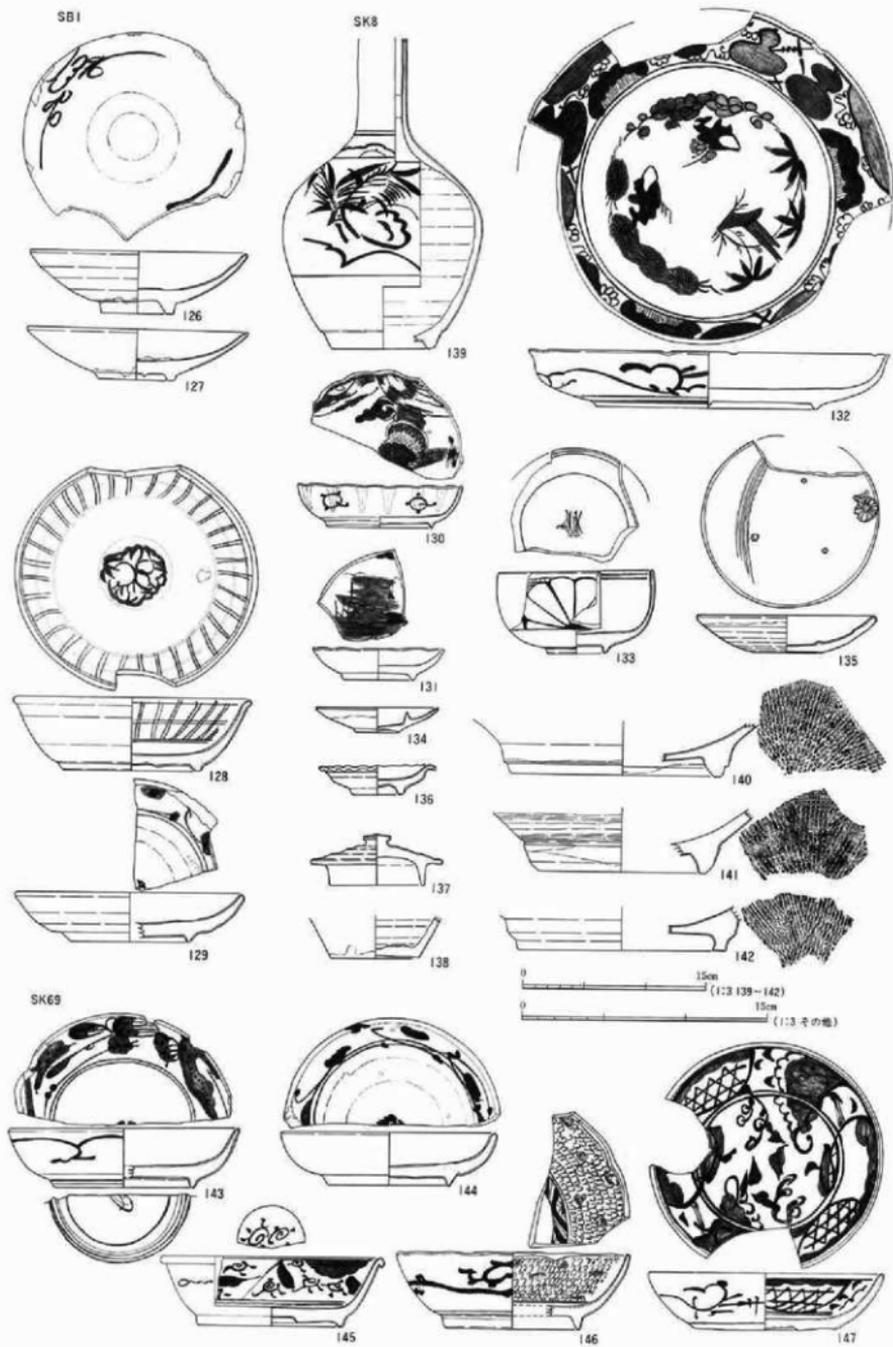
124

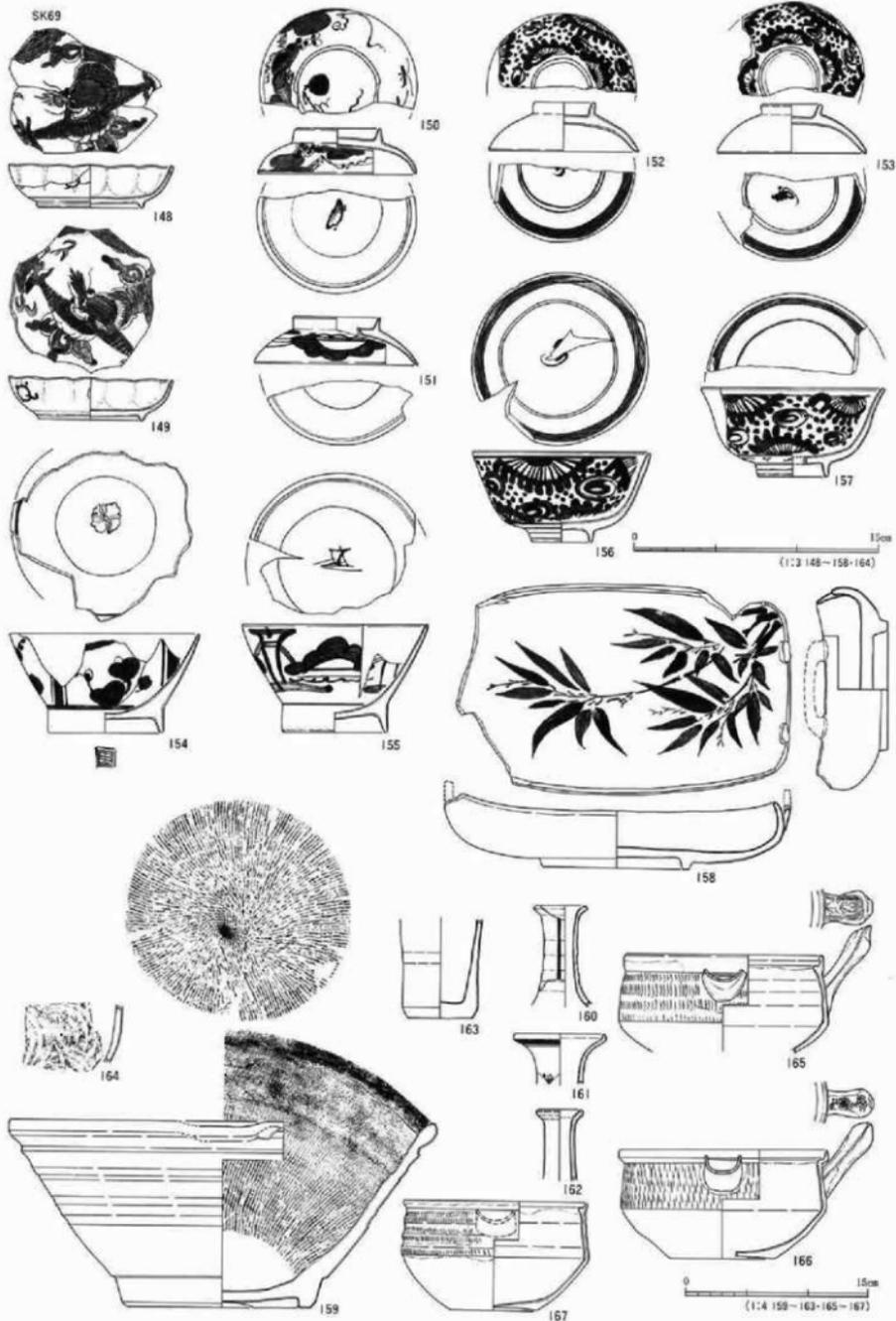


125



SE212





SK96



168



169



SK112



175



176



177



181



178



179



180



182

SE80



183



184



185

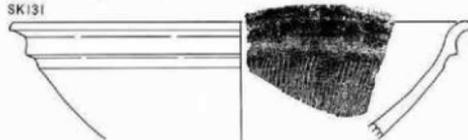


190

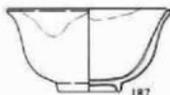


189

SK131



186



187



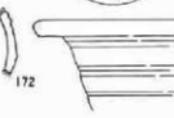
188



170



171



172



173

SK177

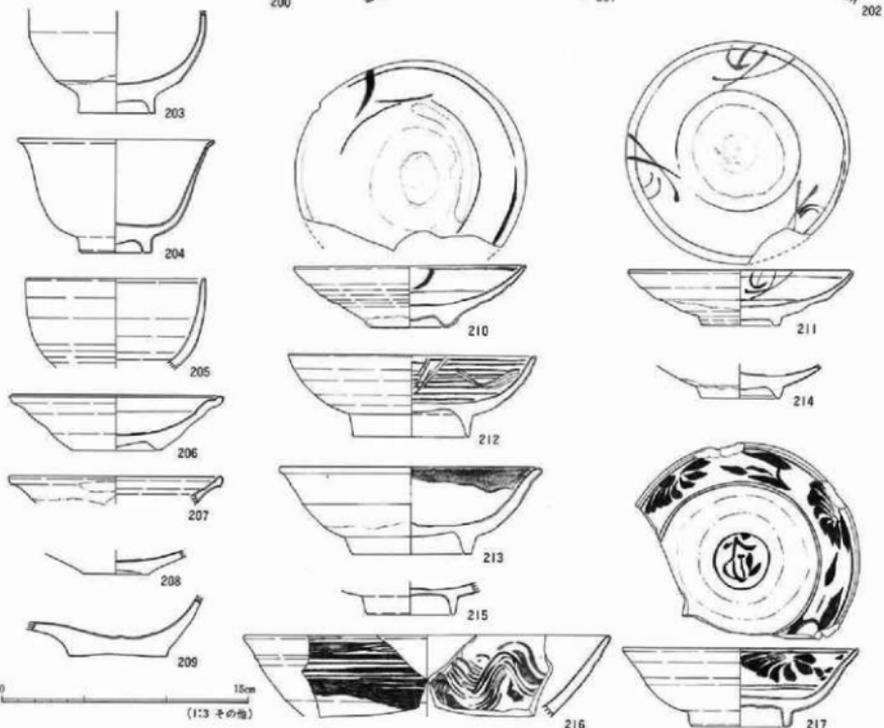
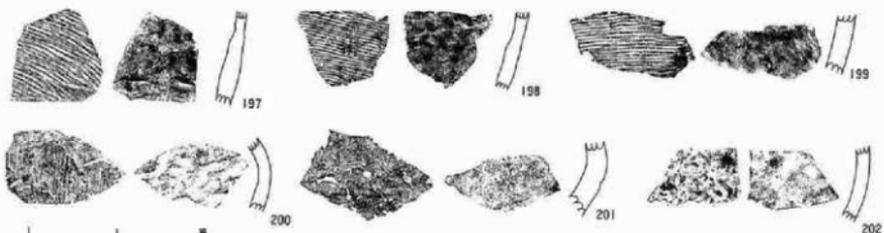
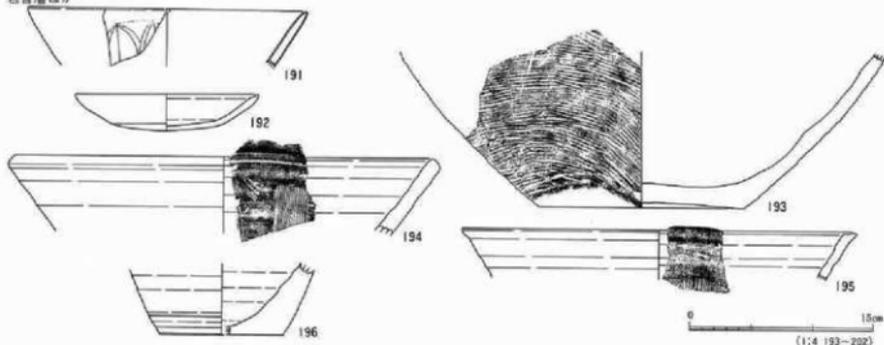


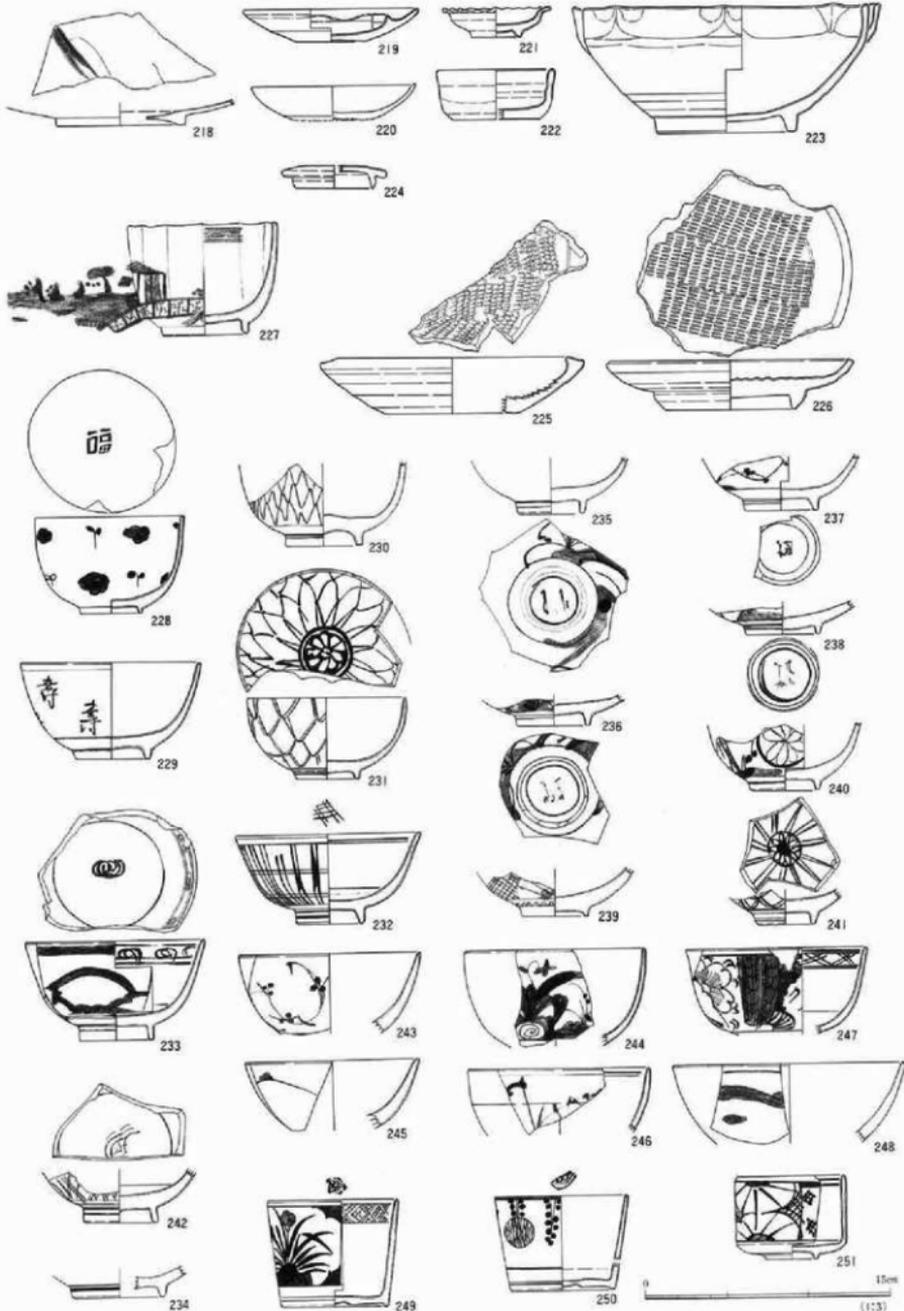
190

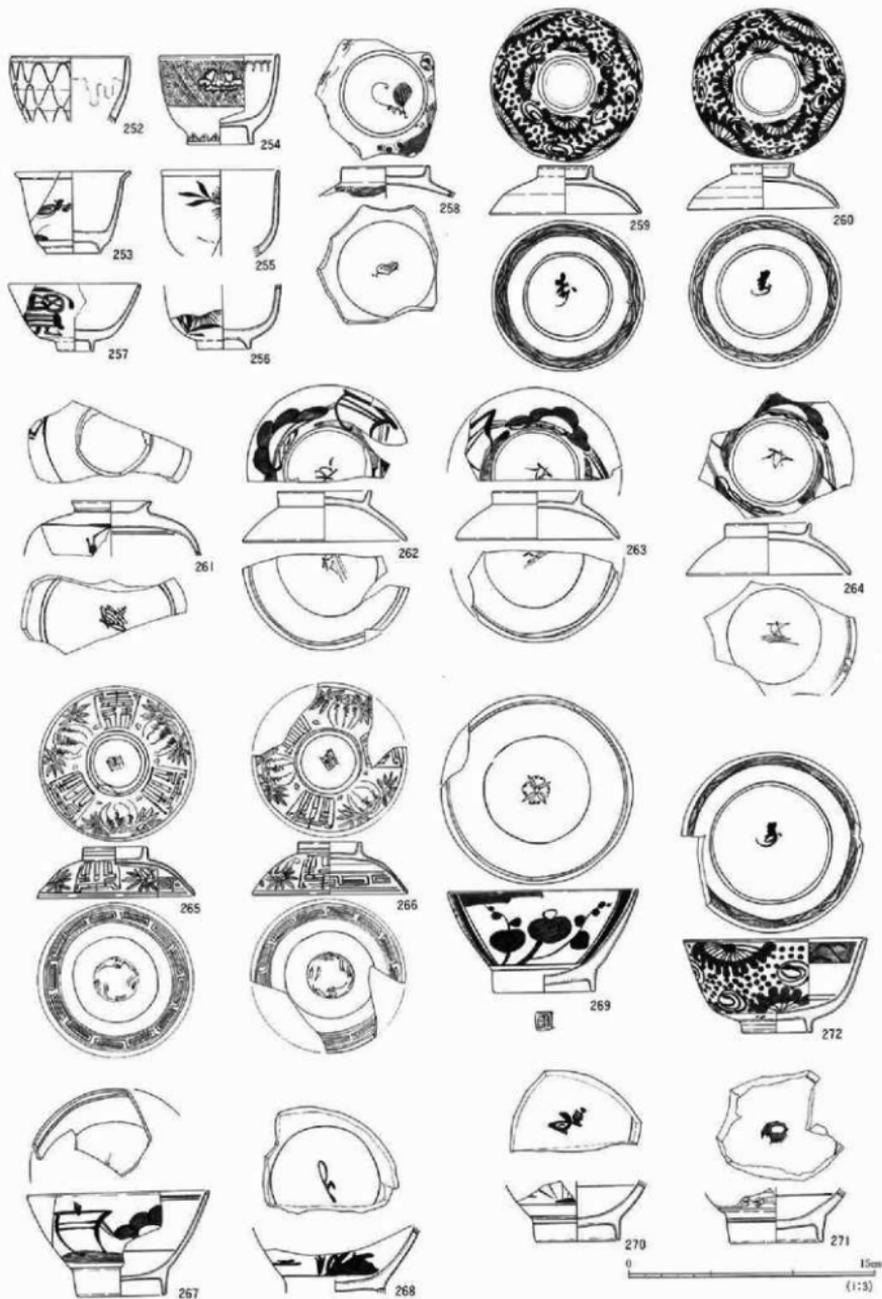


189

羽含層ほか

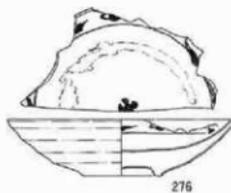








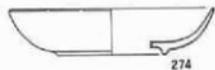
273



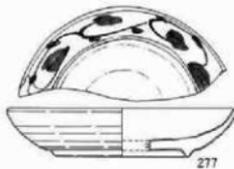
276



282



274



277



275



278



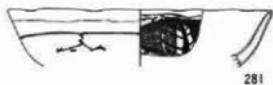
279



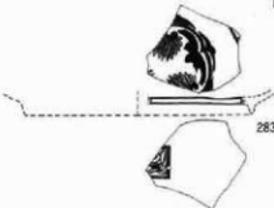
280



283



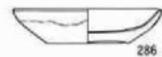
281



284



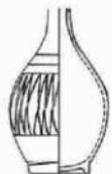
285



286



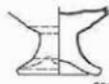
293



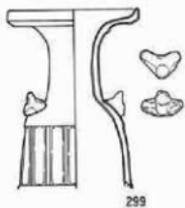
296



290



294



299



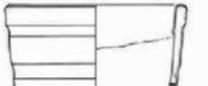
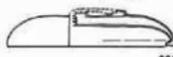
287



291



296



292



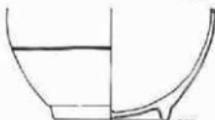
297



288



289



295

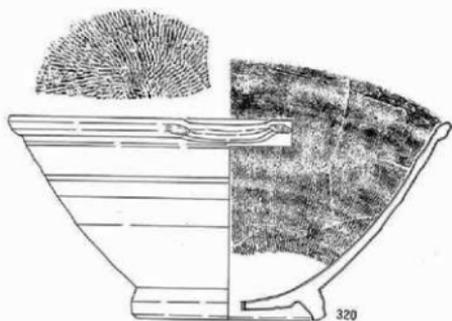
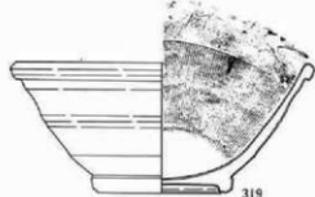
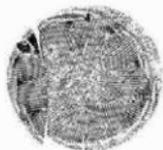
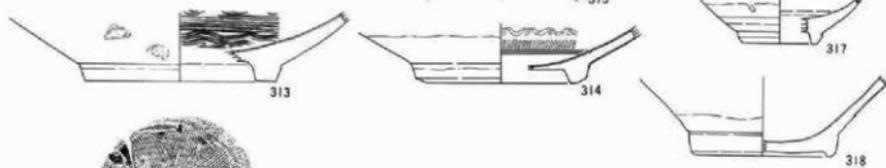
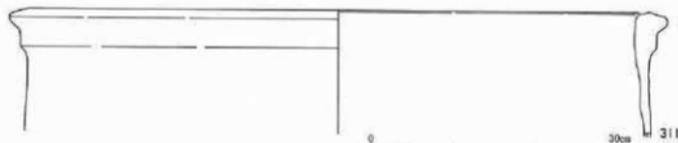
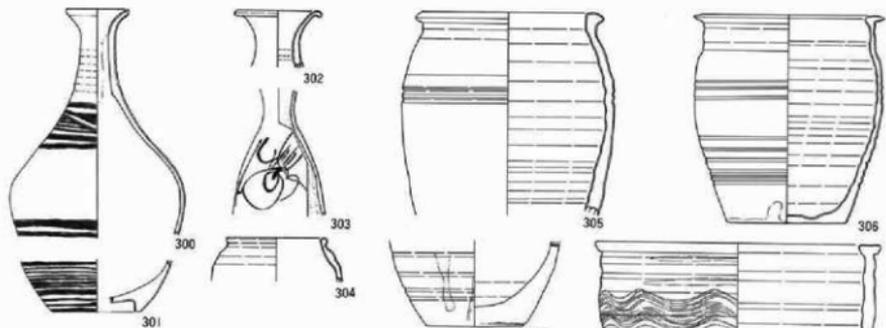


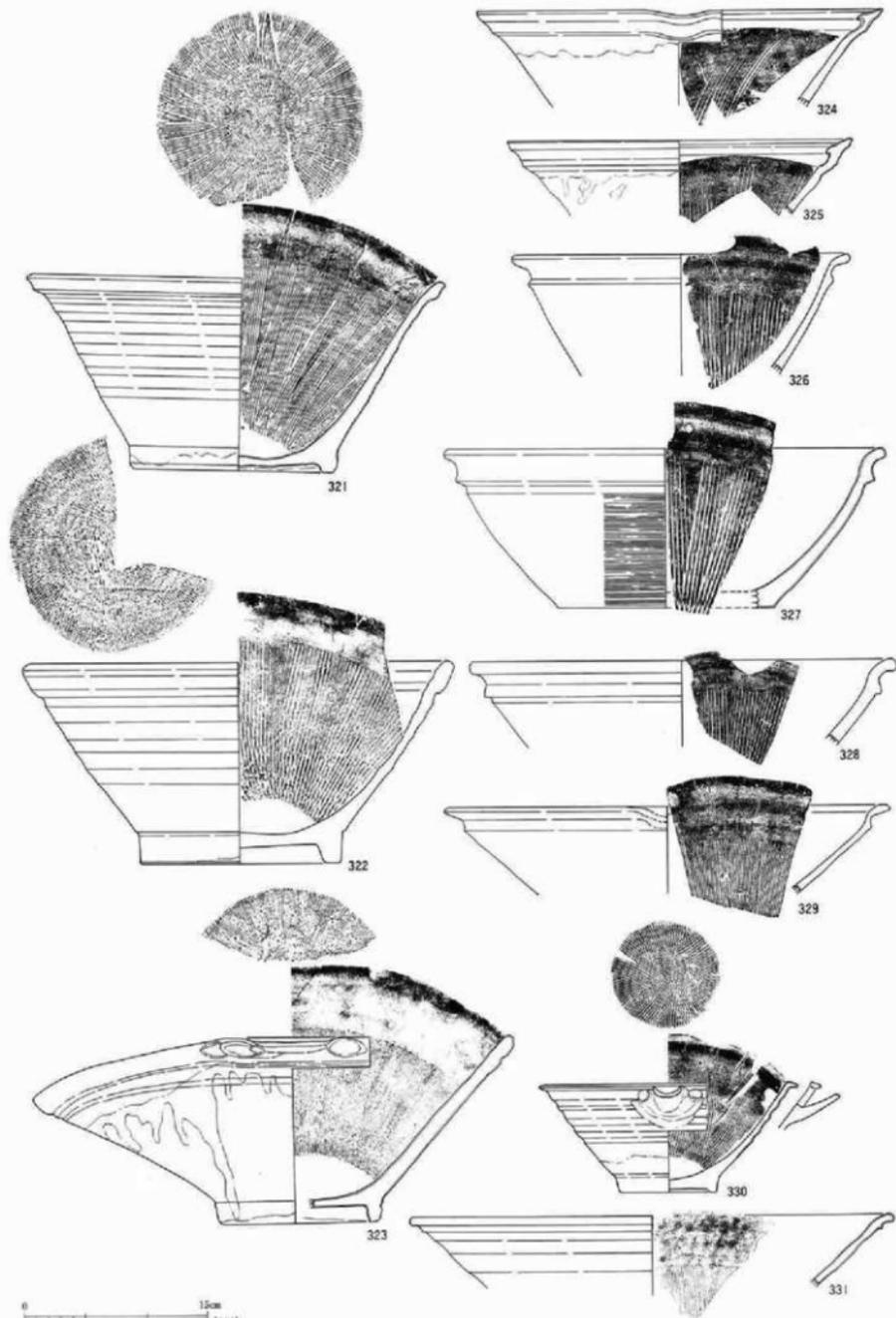
0 15cm

(1:4 285-299)

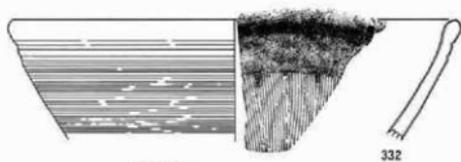
0 15cm

(1:3 本图)

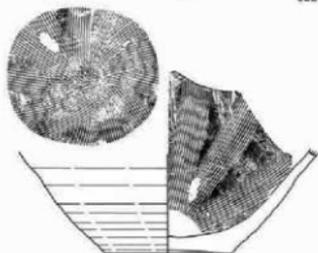




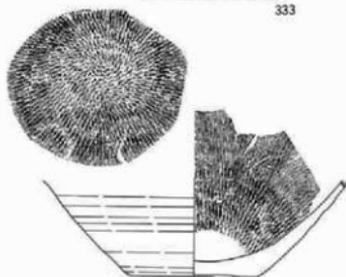
0 15cm (1:4)



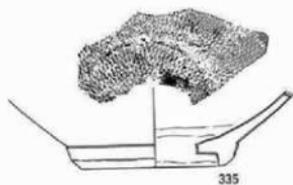
332



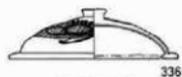
333



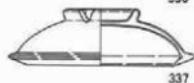
334



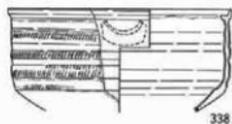
335



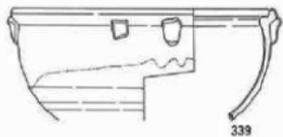
336



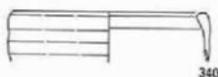
337



338



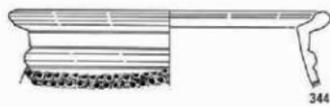
339



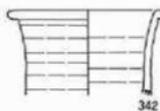
340



341



344



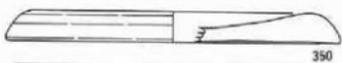
342



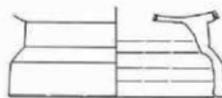
343



345



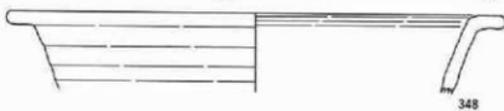
350



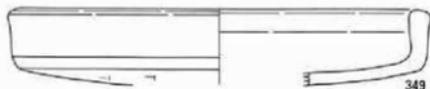
346



347



348

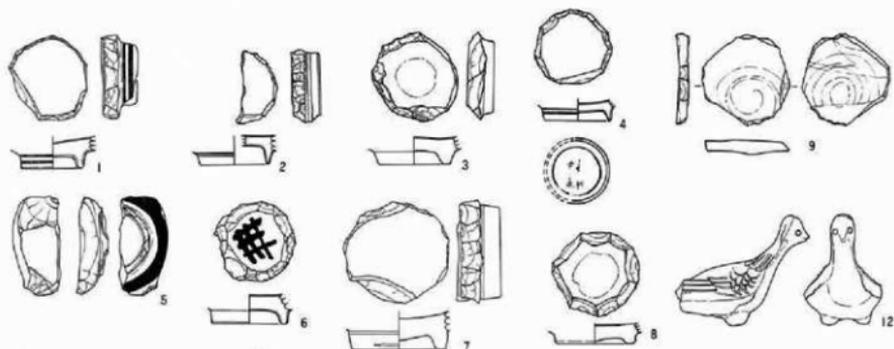


349

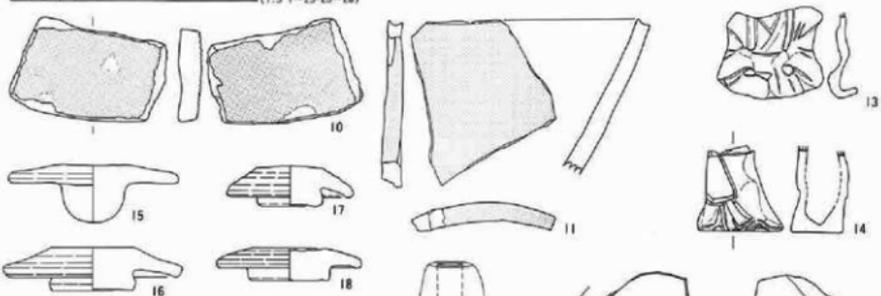


351

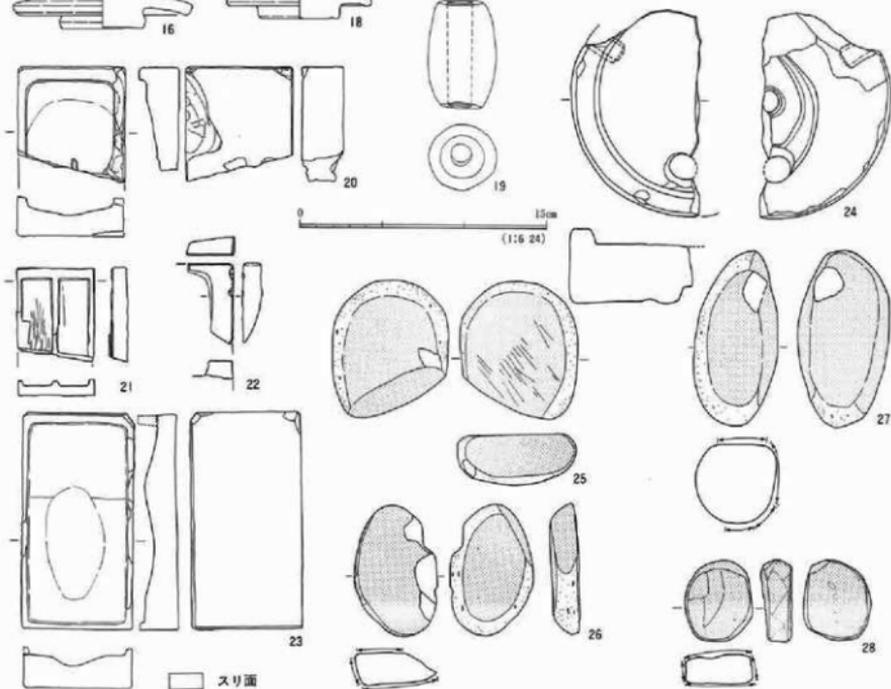
0 15cm (1:4)



0 15cm (1:3 1-23-25-28)

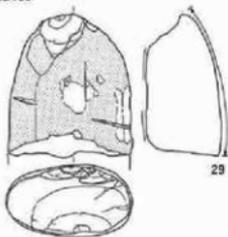


0 15cm (1:6 24)



スリ面

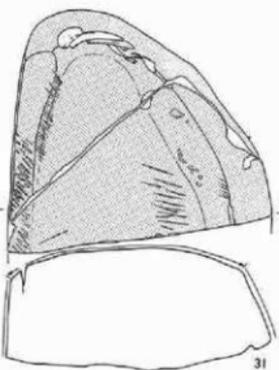
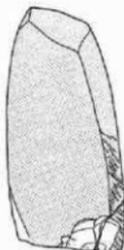
SD166



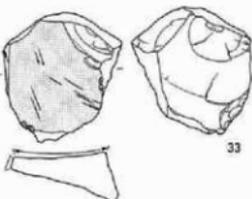
29



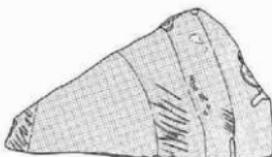
30



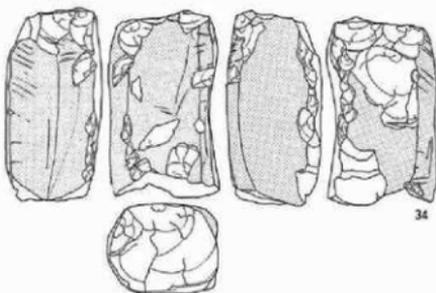
31



33



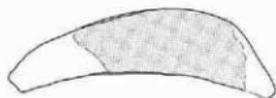
SK20



34

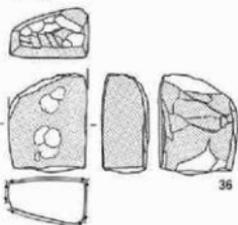


35

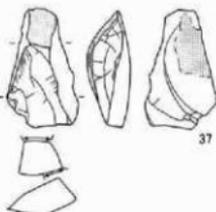


32

SE198



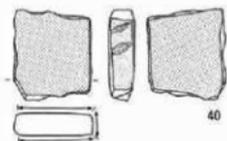
36



37



38



40



39

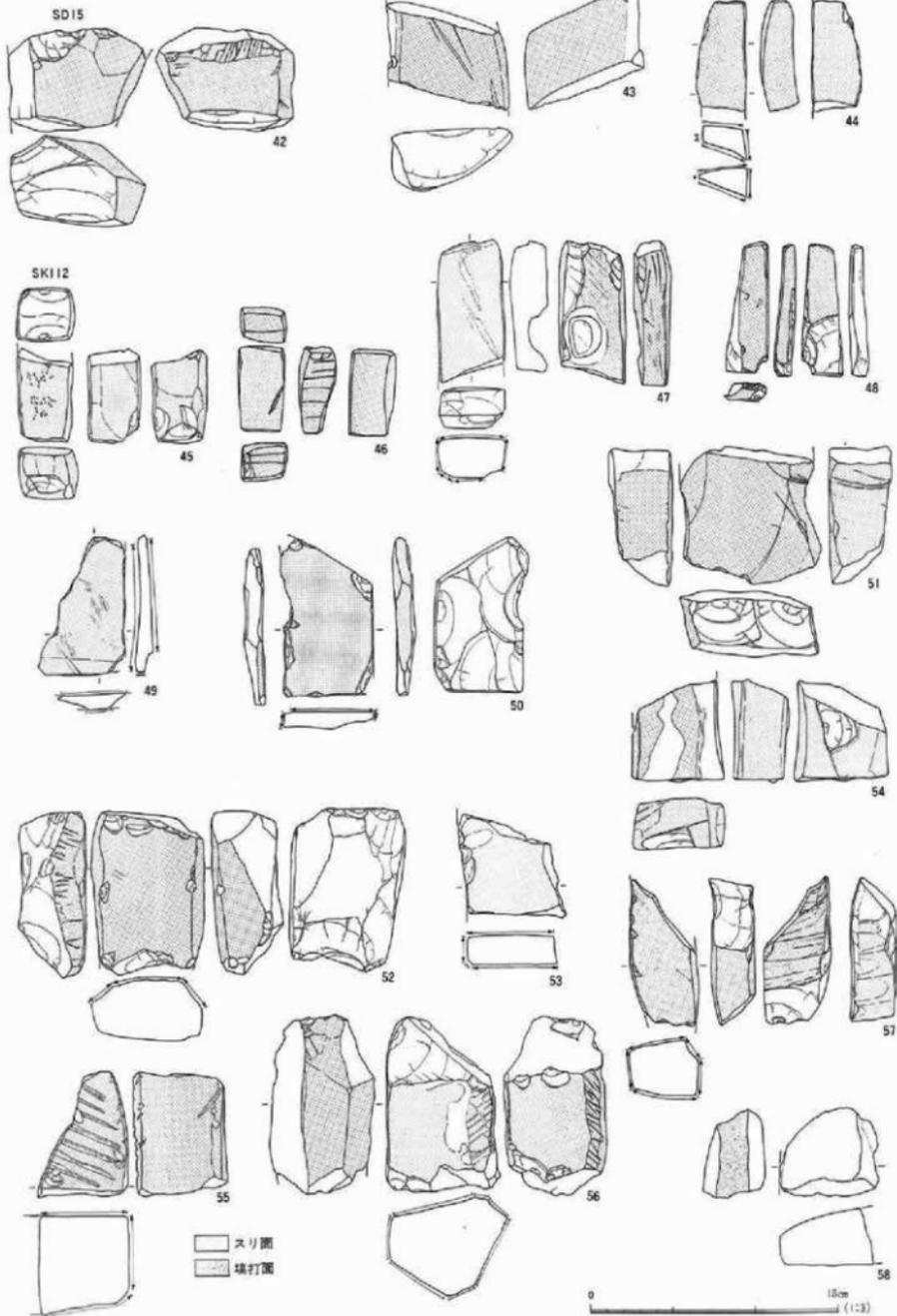


41

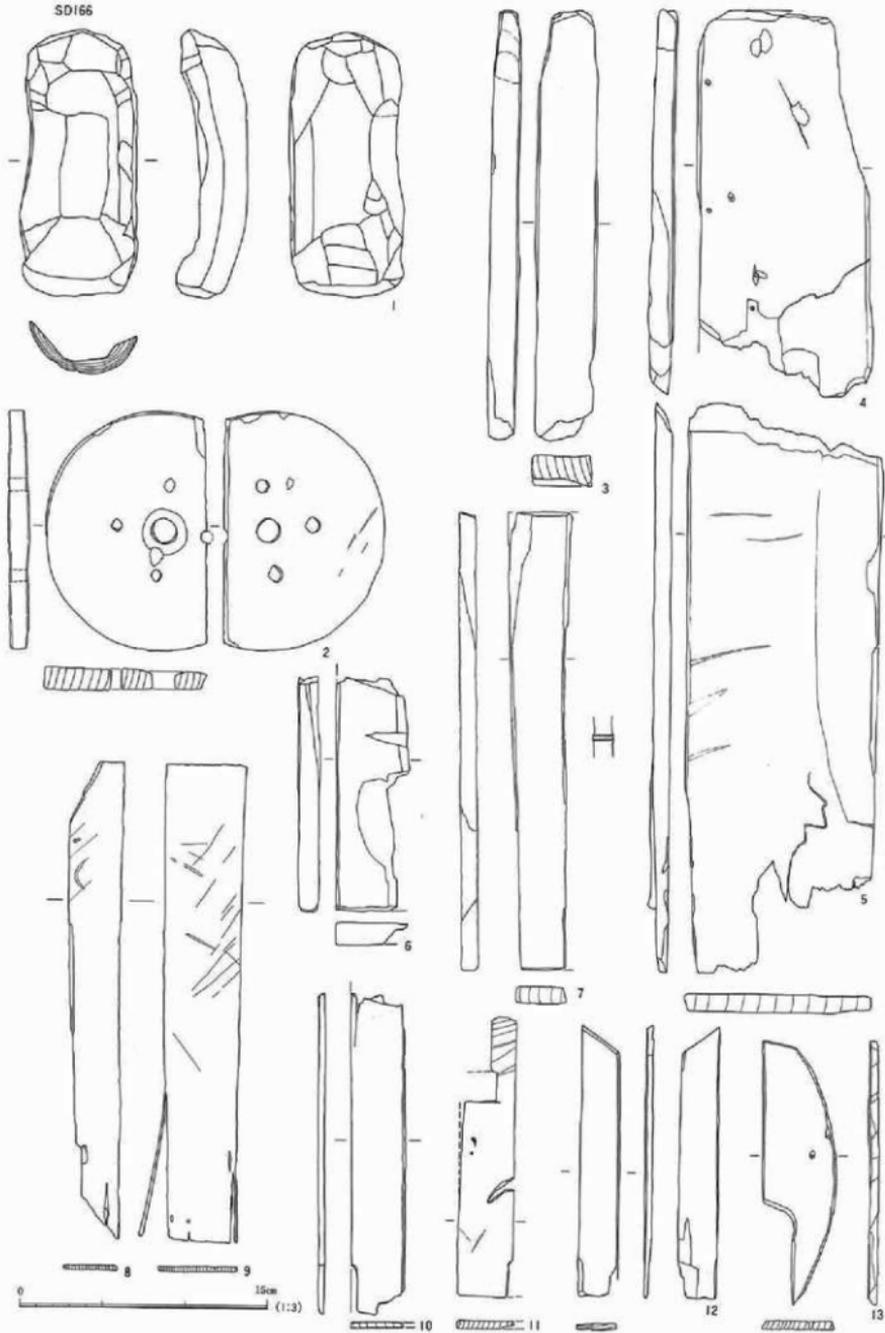


スリ面
 槌打面

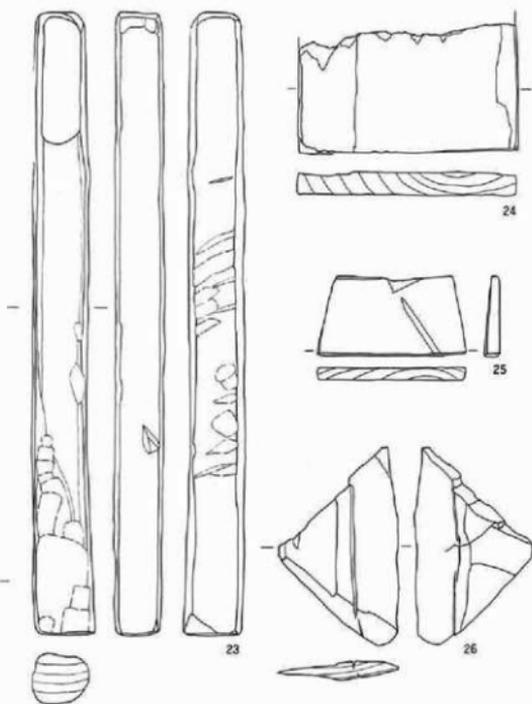
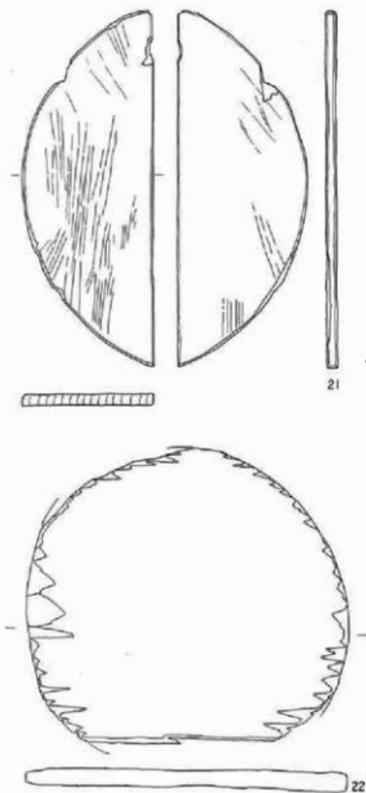
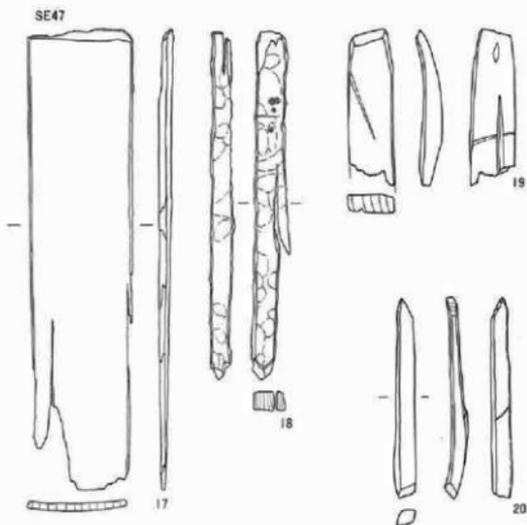
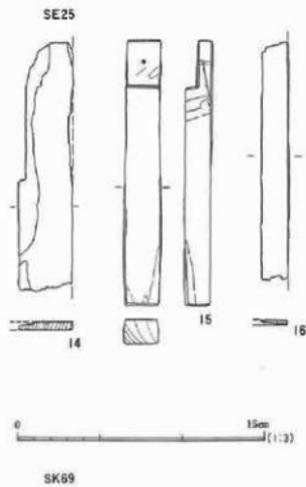
0 15cm (1:3)



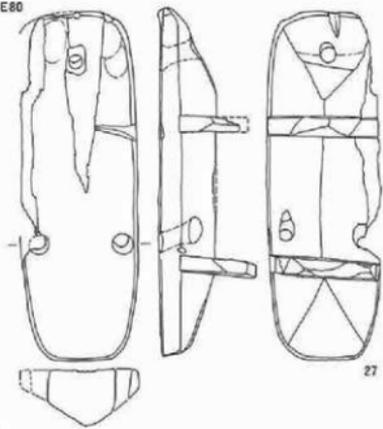
SD166



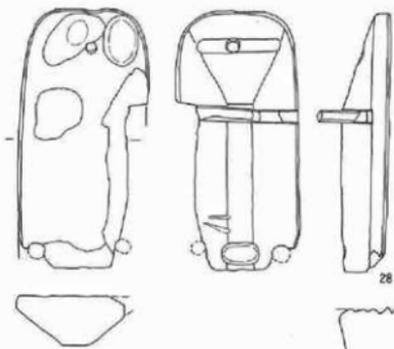
0 15cm (1:3)



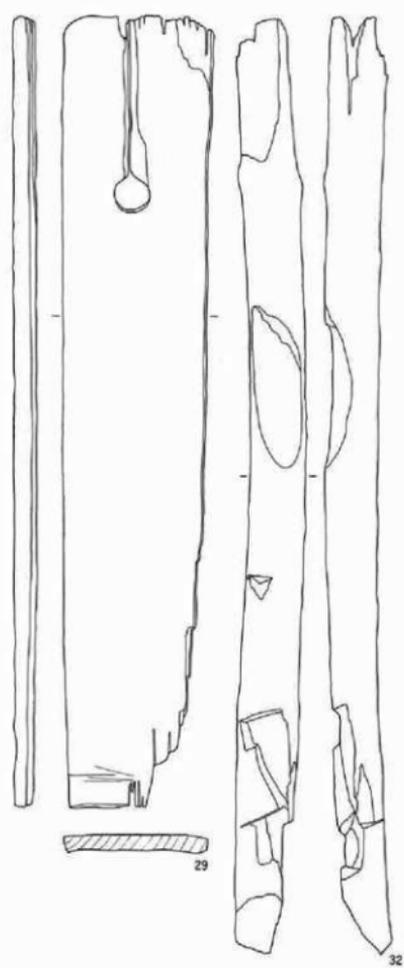
SE80



27

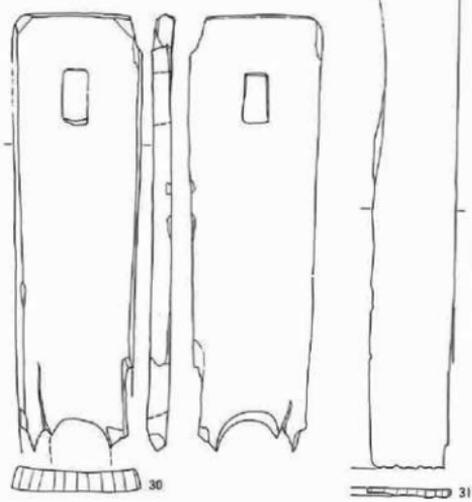


28



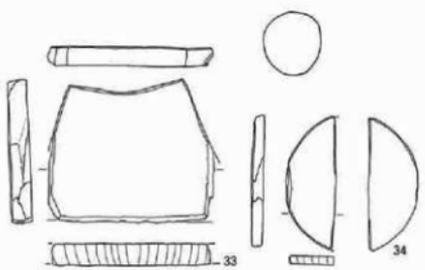
29

32



30

31

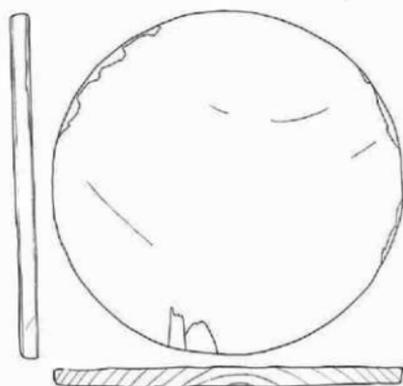


33

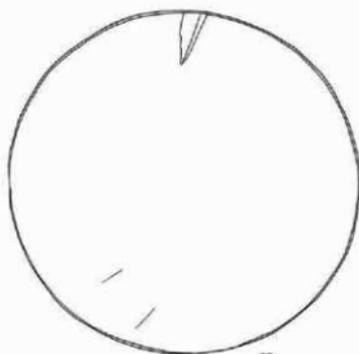
34



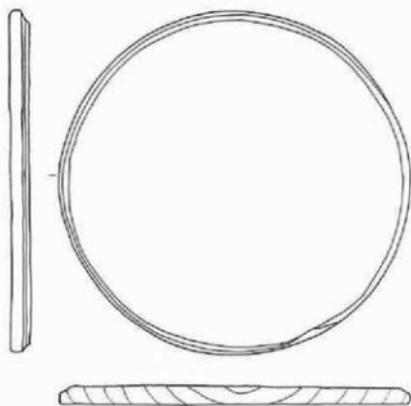
SE/98



35



36



37



38

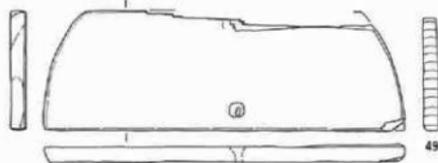
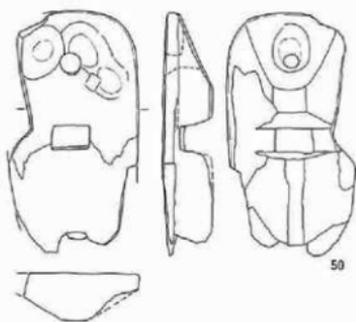
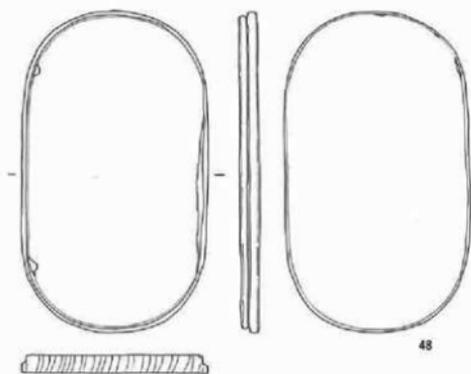
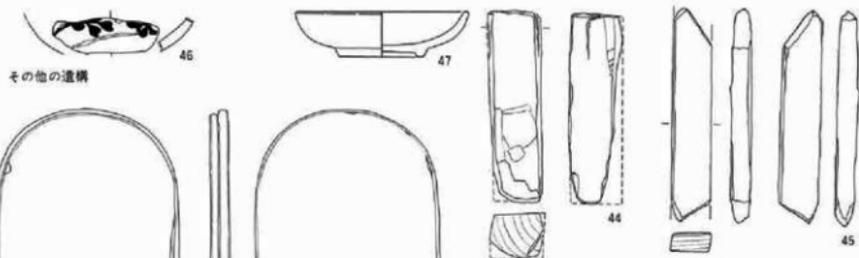
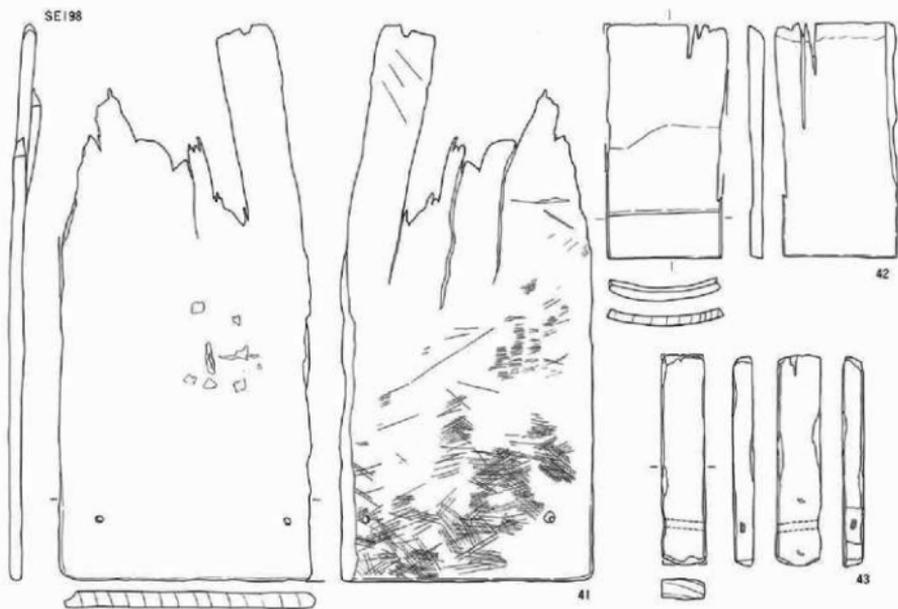


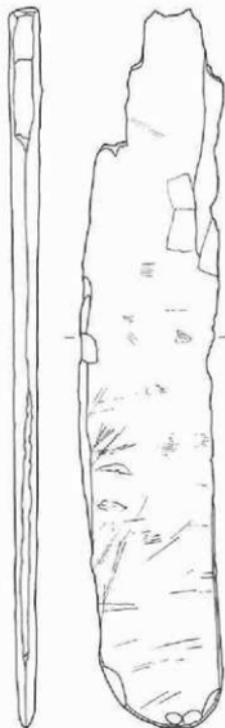
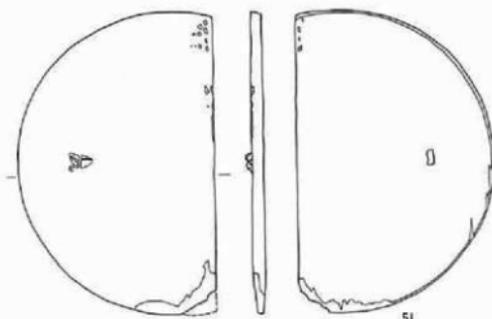
39



40

0 15cm (1:3)





54



55



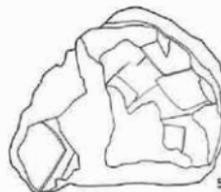
52



53



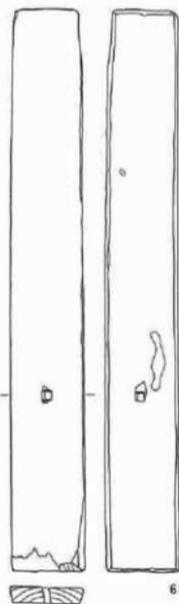
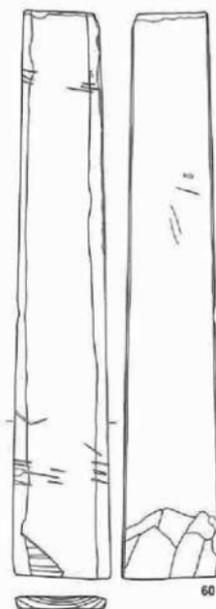
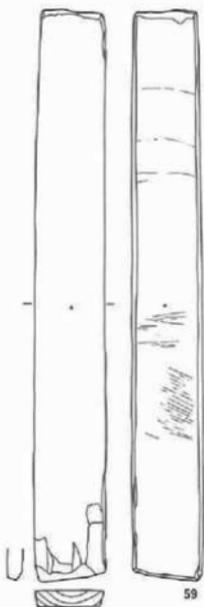
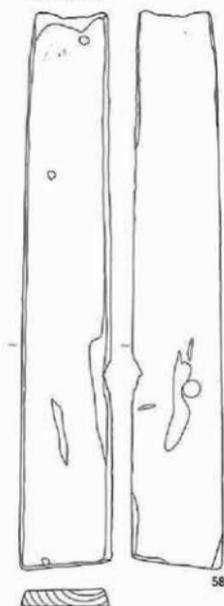
56



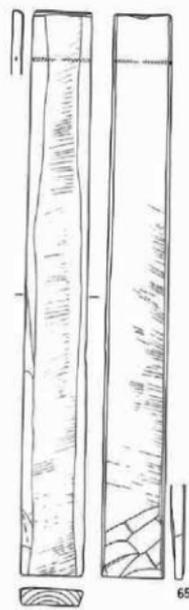
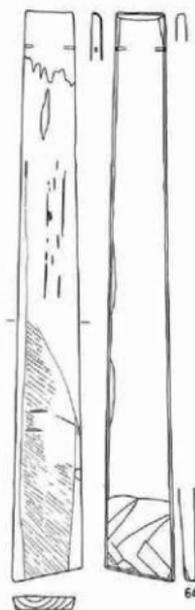
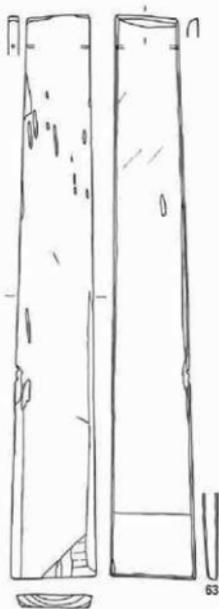
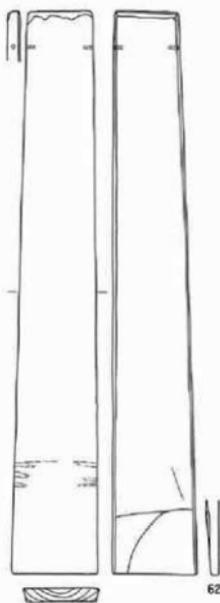
57



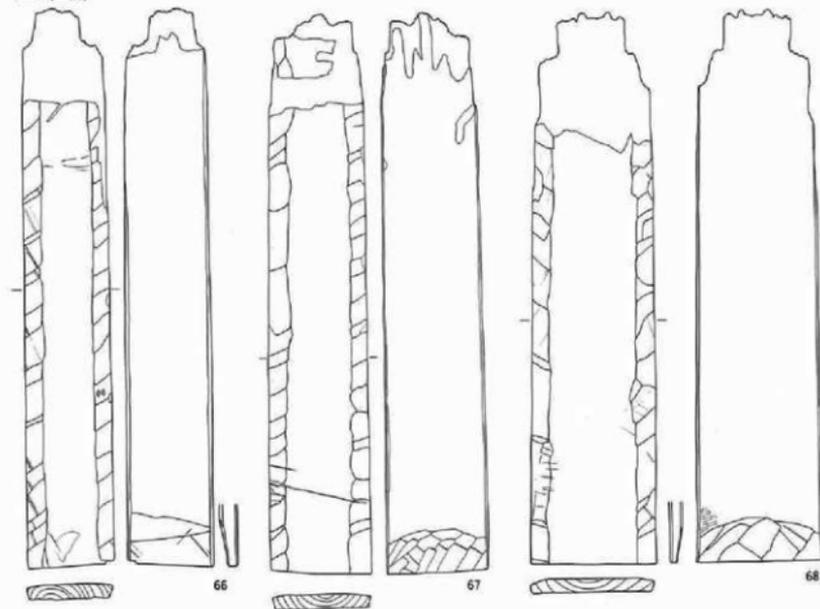
SE90(上段)



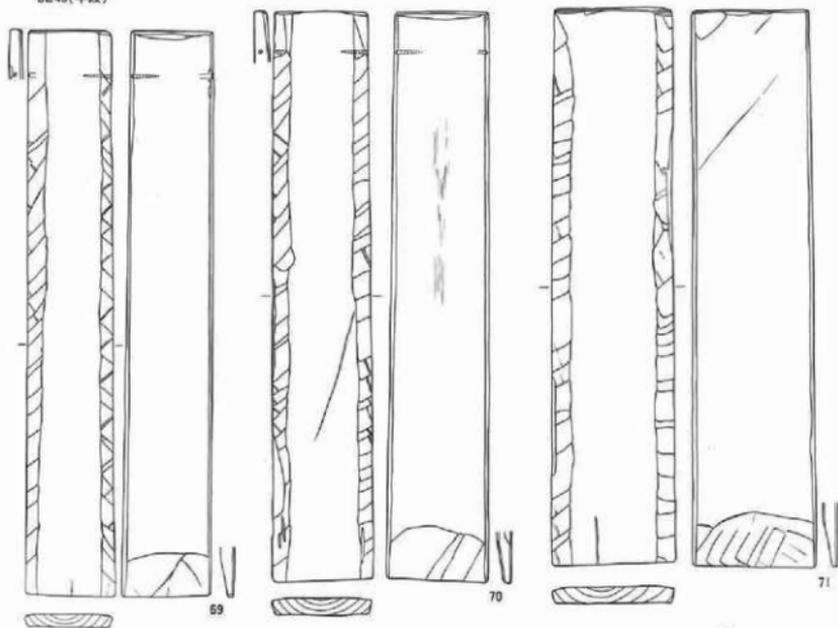
SE90(下段)



SE45(上段)

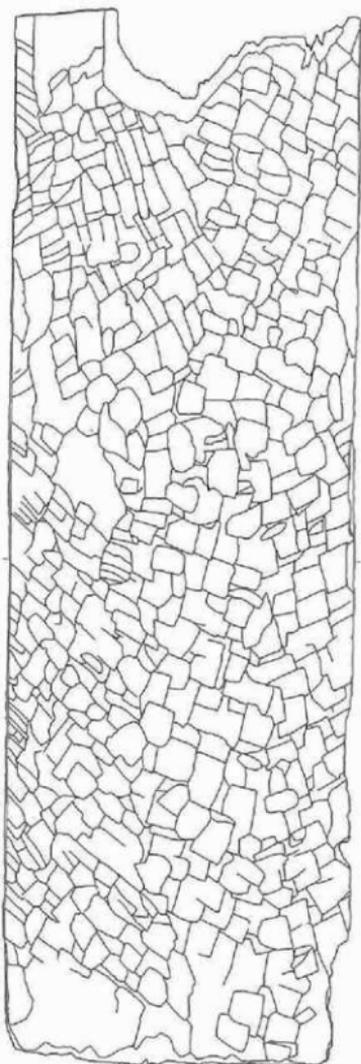
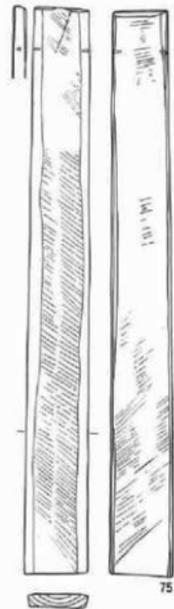
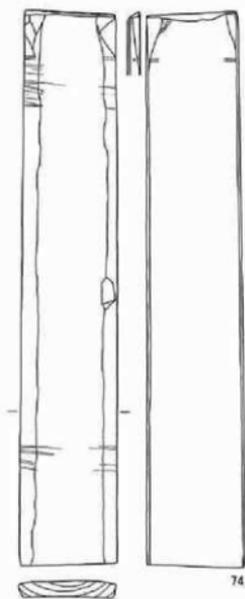
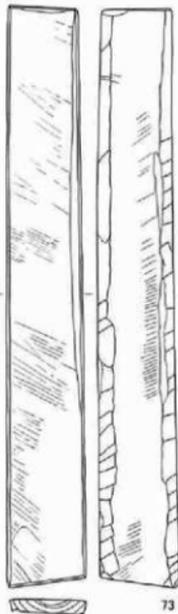
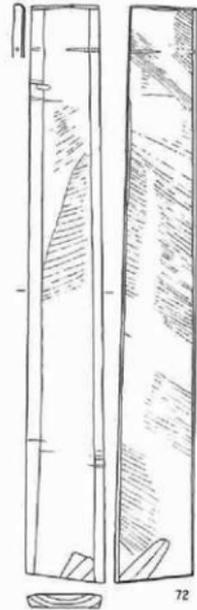


SE45(中段)

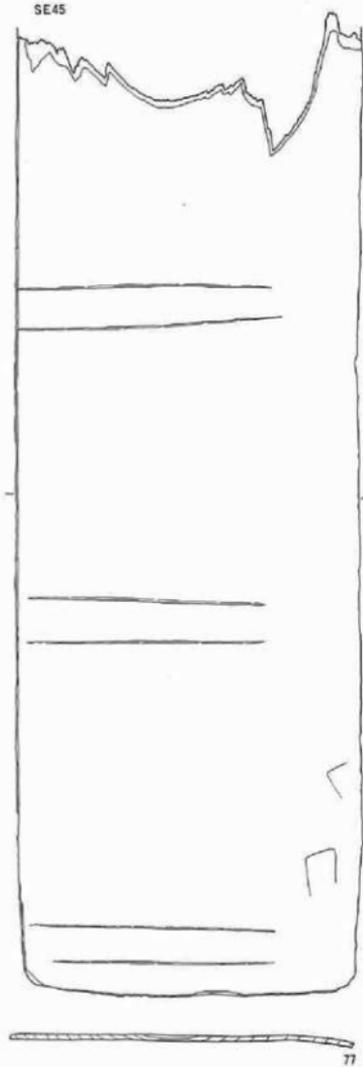


0 30mm
(1:8)

SE45(下段)

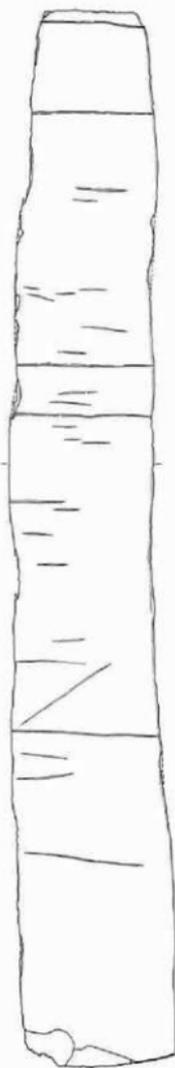


SE45



77

0 45cm (1:12)



78



79





1. 土層堆積状況1(F8)
(北から)



2. 土層堆積状況2(F5)
(北から)



3. 土層堆積状況3(D1)
(西から)



1. 調査前近景
(東から)



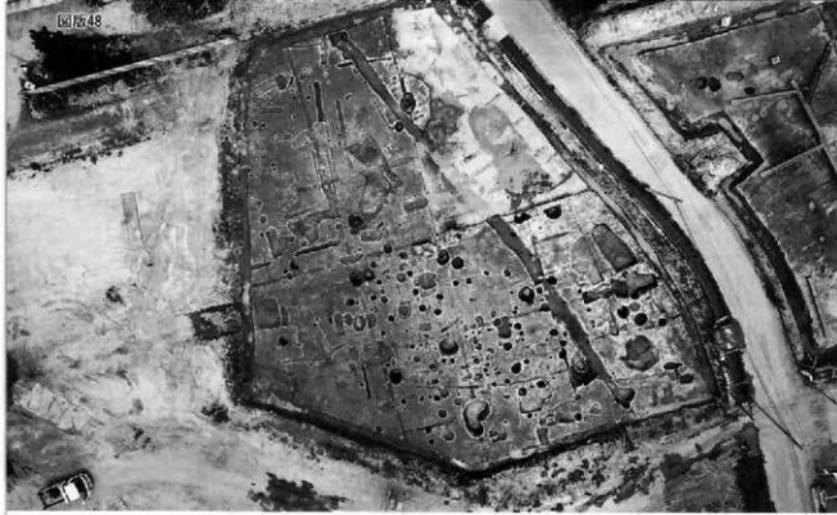
2. 作業風景
(西から)



3. 暗集政設
工事風景

4. ラジコンヘリによる空中写真撮影風景





1. A区全景
(上空から)



2. B区全景
(上空から)



3. D5・6周辺
(南西から)



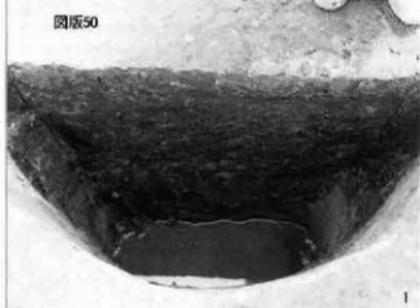
1. E 5・6 周辺
(南から)



2. E 7・8 周辺
(南から)



3. F 5・G 8 周辺
(南から)



1



1. SE 1 土層断面
(北から)

2. SK 8 土層断面
(西から)



3



4

3. SE34(東から)

4. SE34土層断面
(東から)



5



6

5. SE47(東から)

6. SE47土層断面
(東から)



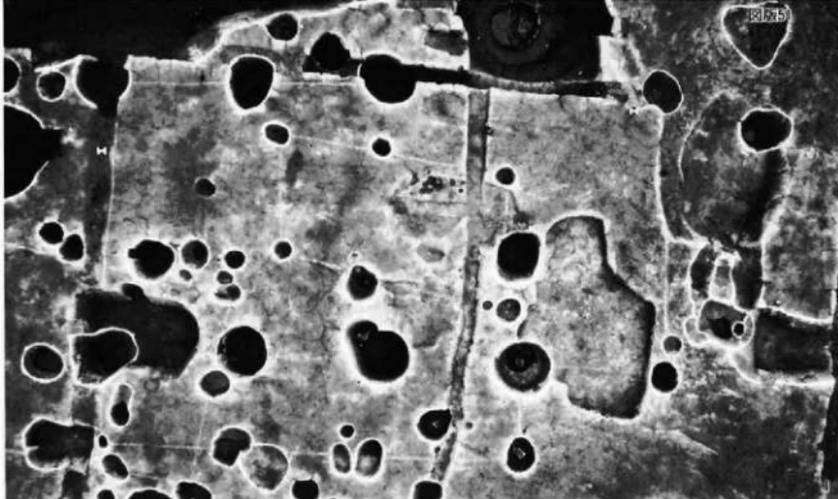
7



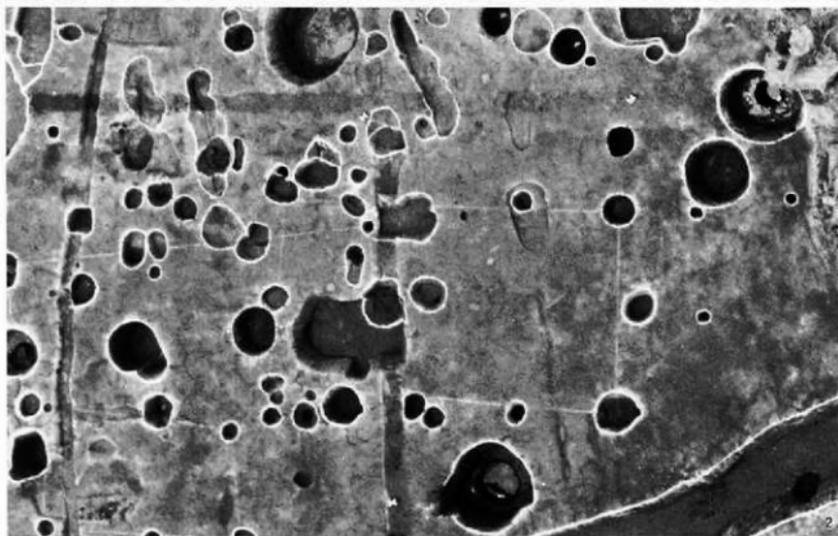
7. SE140(南から)

8. SE140土層断面
(南から)

1. SB 1 (上空から)



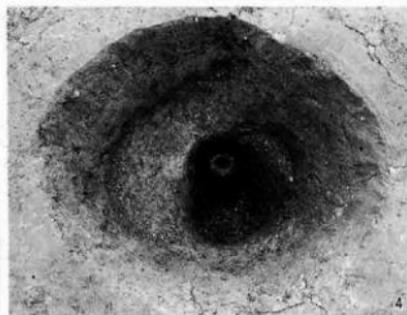
2. SB 2 (上空から)

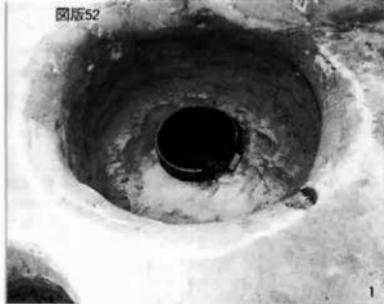


3. SB 1 - ピット 2
(東から)



4. SB 1 - ピット 4
(南から)





1. SE90 (南から)

2. SE72 (東から)



3. SK68 (東から)

4. SK68土層断面
(東から)



5. SK82 a・b
(西から)

6. SK82 a・b
土層断面
(西から)



7. SK67 (西から)

8. SE80 (東から)

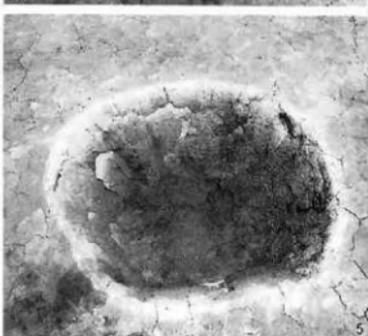
1・2. SE100
(西から)



3. SK91
(東から)

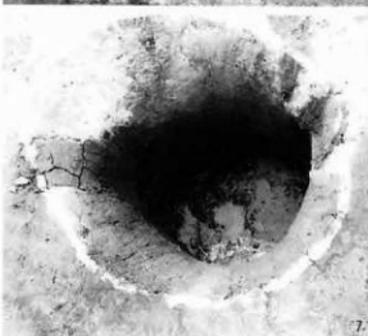


4. SK91土層断面
(東から)



5. SK92
(東から)

6. SK92土層断面
(東から)



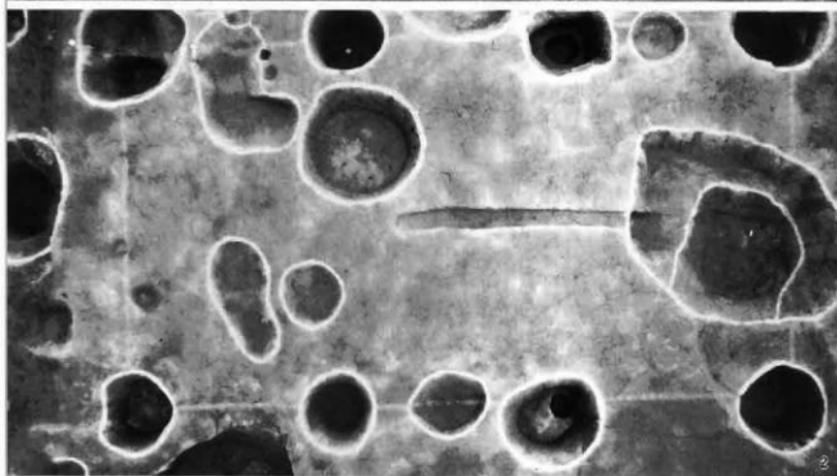
7. SK93
(東から)

8. E7・ピット10
(西から)





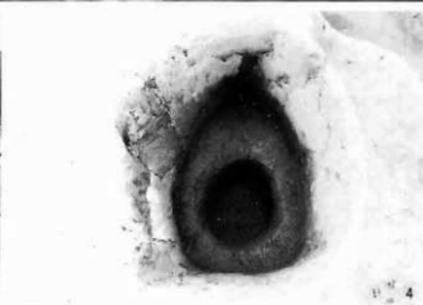
1. SB 3 (南から)



2. SB 3 (上空から)



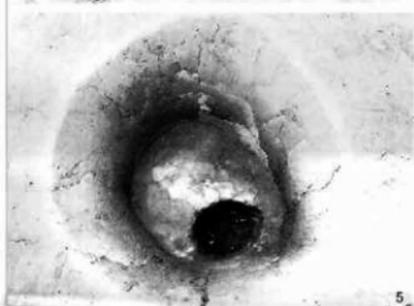
3



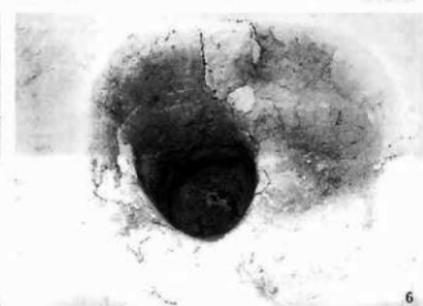
4

3. SB 3・ピット1

4. SB 3・ピット2



5



6

5. SB 3・ピット4

6. SB 3・ピット6

1. SK20とSD15
(西から)



2. F-G 6 周辺



3・4. SK20土層断面
(北から)



5. SD15土層断面
(東から)



6. SD40土層断面
(北から)





1. SE45 (南西から)



2



3

2. SE45土層断面 (東から)

3. SK29 (東から)



4



5

4. SE14 (東から)

5. SE14土層断面 (東から)



6

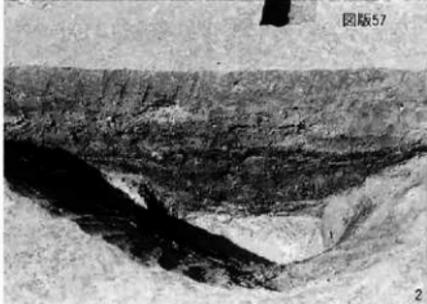


7

6. SE28 (東から)

7. SE28土層断面 (東から)

1. SE25 (北から)

2. SE25土層断面
(東から)

3. SE21 (東から)

4. SE21土層断面
(東から)

5. SK24 (北から)

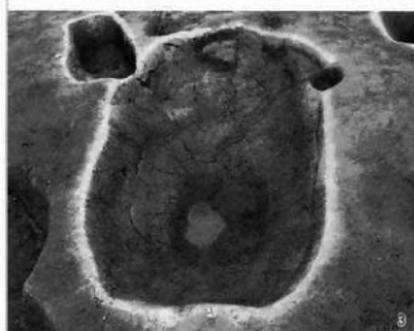
6. SD41土層断面
(東から)7. G 6 周辺
(南西から)



1. SK151 (南から)



2. SK144 (東から)



3. SK122 (西から)



4. SK132 (南東から)



5. SD124-SK125
土層断面
(東から)



6. SK120 (東から)



7. G・H 7・8周辺
(東から)



1. F7・8周辺
(南から)



2. F8周辺(東から)



3. G8周辺(西から)



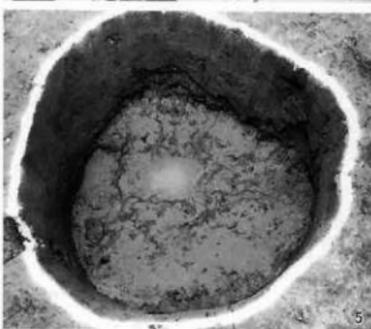
1. B区全景（北南から）



2. G・F・2・3
周辺（東から）



3. E 2・3周辺
（東から）



1. D 2・3 周辺 (東から)
2. D 2・3 周辺 (上空から)
3. SK226 (南から)
4. SK226 遺物出土状況 (南から)
5. SK226 完掘 (南から)





1. SD166土層断面
(南から)



2. SD166 (南から)



3



3. SD166珠洲出土状況
(西から)

4. SD166珠洲出土状況
(南から)

1. SK230土層断面
(南から)



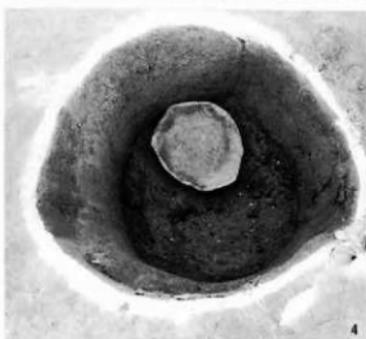
2. SK230
(南から)



3. SK204土層断面
(南から)



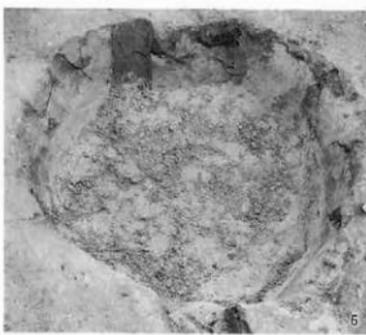
4. SK204
(南から)



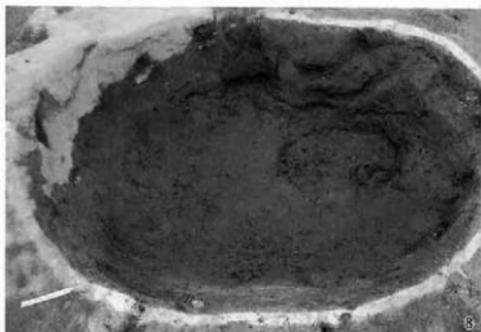
5. SK197土層断面
(南から)



6. SK197
(南から)



7. SK210土層断面
(南から)



8. SK210
(東から)



1. SK210
(西から)

2. SK210土層断面
(南から)



3. SE198遺物
出土状況
(南から)

4. SE198遺物
出土状況
(西から)



5. SE198遺物
出土状況
(南から)

6. SK199
土層断面
(南から)

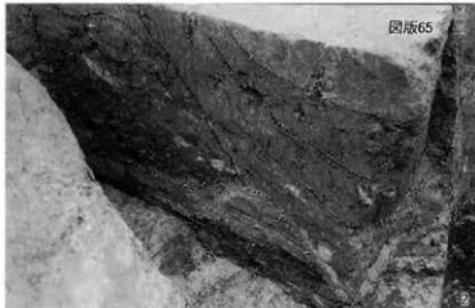


7. SK197
(東から)

8. SK197土層断面
(東から)



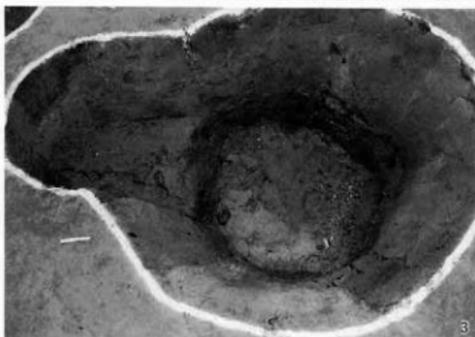
1



2



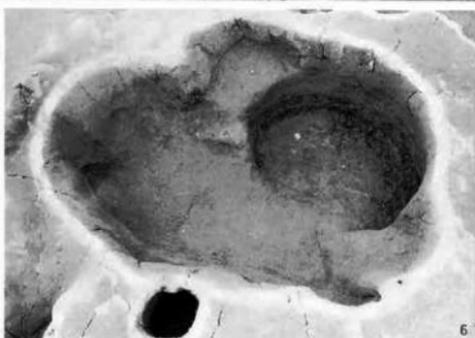
4



3



5



6

1. SE202土層断面 (南から)

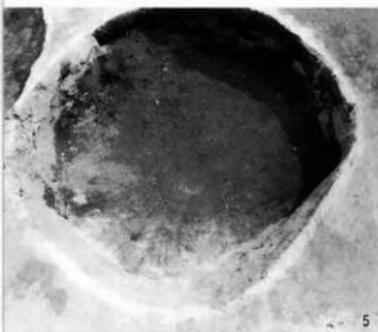
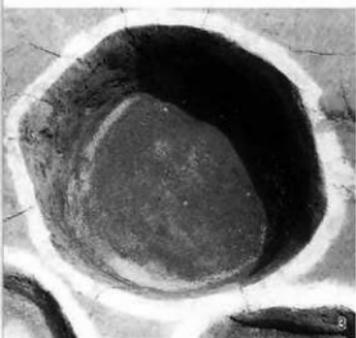
2. SK203土層断面 (南西から)

3. SE202・SK203 (南東から)

4. SE212土層断面 (北東から)

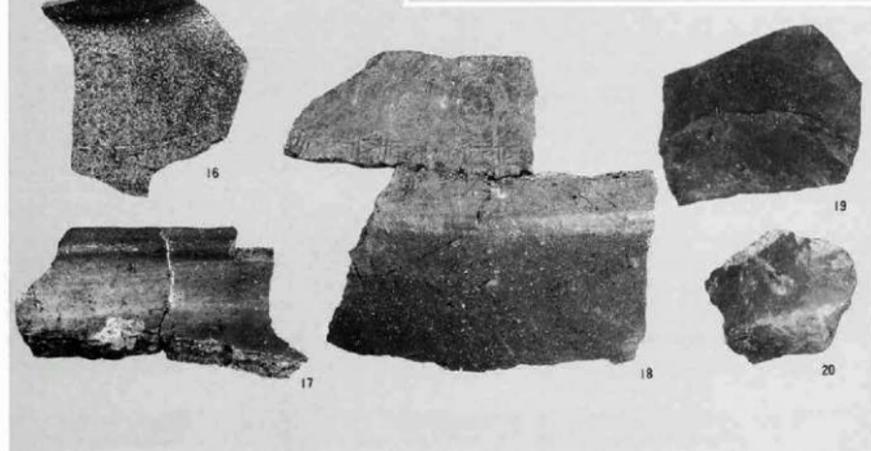
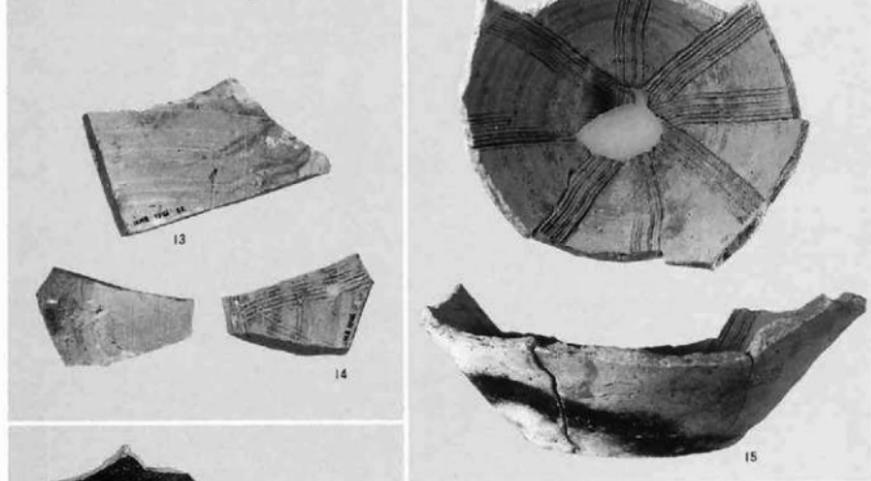
5. SK205土層断面 (南から)

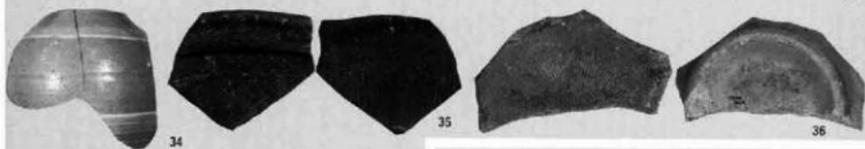
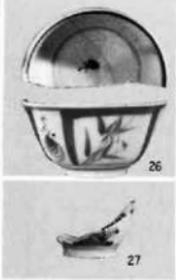
6. SK205 (南から)



1. SK190遺物出土状況（東から）
2. SK190土層断面（東から）
3. SK201完掘（北西から）
4. SK201土層断面（南から）
5. SK192（北西から）
6. SK192土層断面（北西から）
7. SD165・E2・ビット土層断面（東から）

1~4 1:3
 その他 1:4



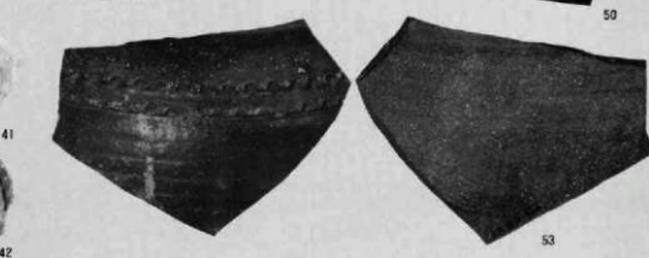


SD15

(21~36)

49・52 1:4

その他 1:3



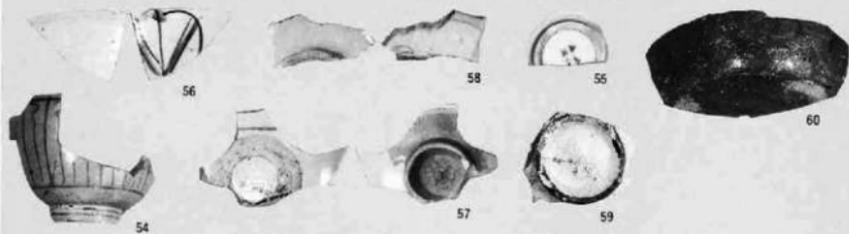
SD20

(37~53)

67・68 1 : 4

74・84

その他 1 : 3

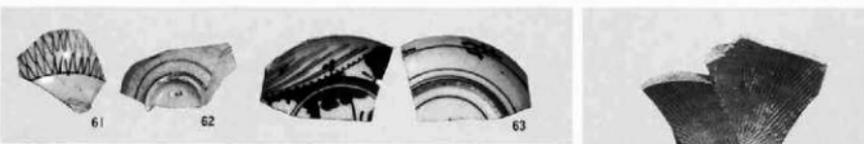


SD41

(56~60)

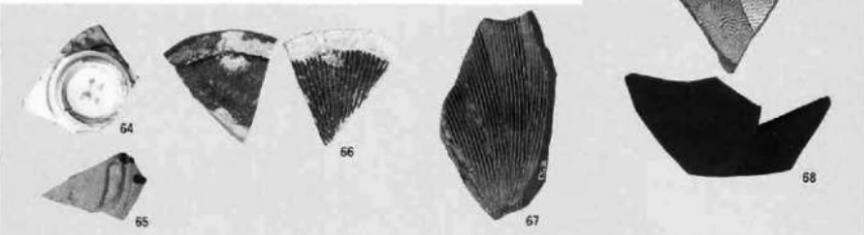
SE45

(61~63)



SE47

(64~68)



SK95

(73・74)



E 7 ビット 10

(69~71)



SE100

(75~76)

SE21

(77・78)

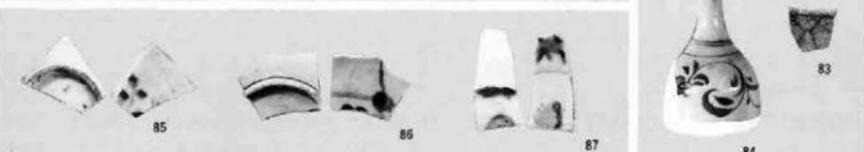


SK91

(79・80)

SD130

(81・82)



SD116

(83・84)

SK122

(85~87)

84

83

87

86

85

82

81

69

70

74

77

78

76

75

71

73

68

67

66

64

63

62

61

60

59

57

58

56

54



88



90



92



91



94



95



93



96

96-107 1 : 4
111~113
その他 1 : 3

SK144
(88~89)

SD178
(90~96)



89



105



97



102



98



107



99



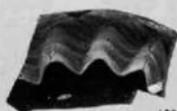
100



104

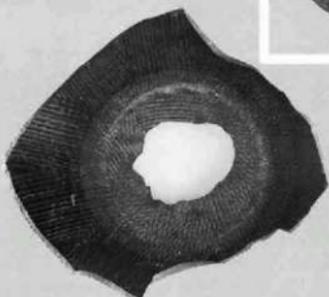


103



106

SE176
(97~106)



111



109



110



108



113



112

SE190
(109~113)

120・122 1 : 4
123

その他 1 : 3



115



114



119



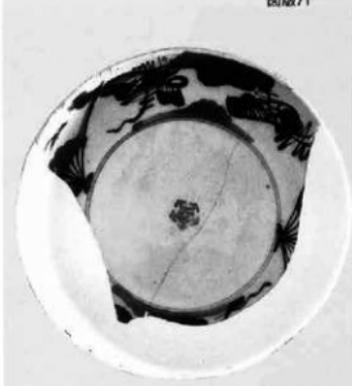
120



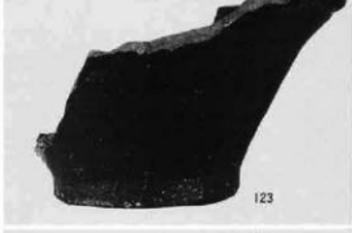
117



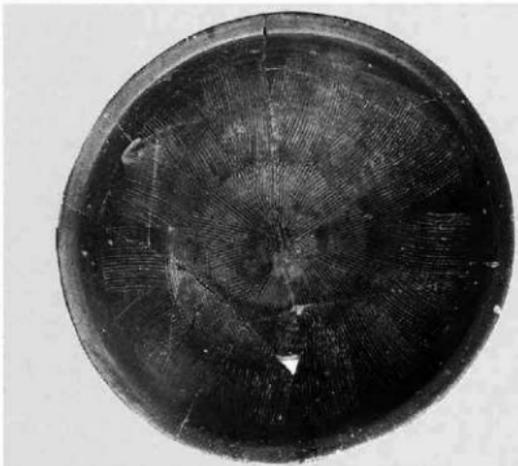
118



116



123



122



121



125



124



128



126



127

125・124
139~142
1 : 4

その他
1 : 3

SE202
(124・125)

SB 1
(126・127)



135



139



130



133



134



138



136



137



132

SK 8
(128~142)



131



129



140



141



142

158 1:4
その他 1:3

143



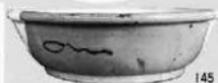
144



147



148



149



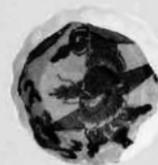
151



152



153



154



157



158



159



160



161



162



163

SK 8
(143~158)



159



165



166



167



160



162



164



161



163

159~
167・170 1 : 4
その他 1 : 3

SK69
(159~167)



168



169



173



172



171



174



170

SK96
(168~174)



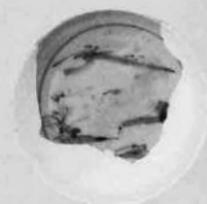
175



177



180



179



178



181

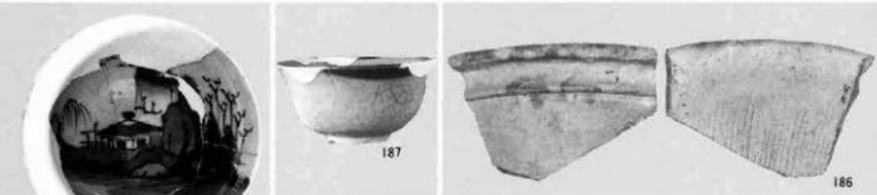
SK112
(175~181)

176・183・185・
187～189・191・
192 1 : 3
その他 1 : 4

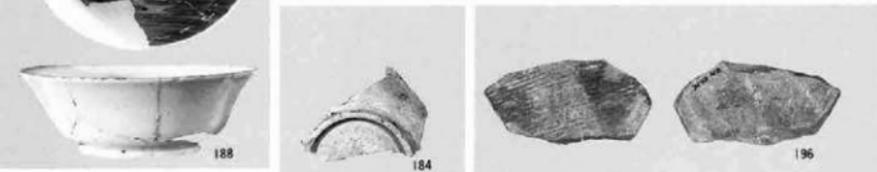


SK112
(176・182)

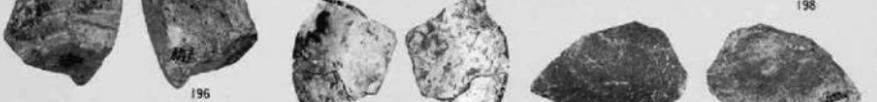
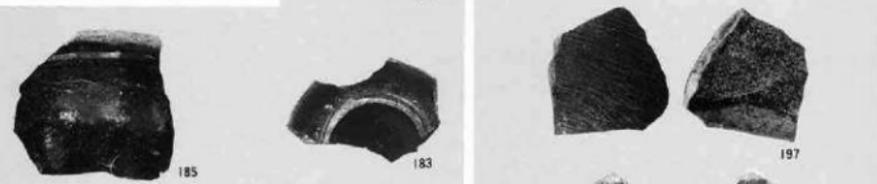
SK177
(187・189)



SK131
(186・188)



SE80
(183・185)



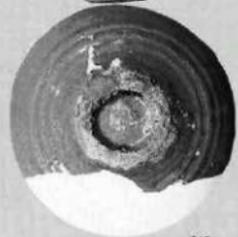
包含層・
その他の遺構



203



206



210



224



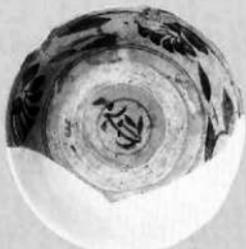
211



212



209



217



219



220



213



221



222

1 : 3





269



235



238



239



240



269



237



236



234



241



243



244



246



242



245



247



250



252



255



258



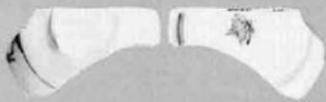
268



257



256



261



270



271



267



273



277



278

297・298
305~308 1:4

その他 1:3



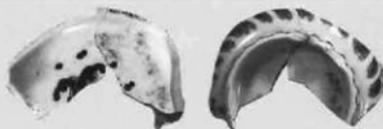
282



286



284



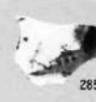
280



274



279



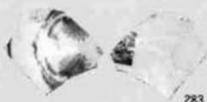
285



276



275



283



291



287



289



288



292



290



293



294



297



298



300



296



302



299



303



306



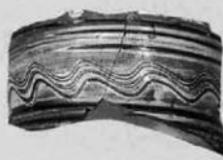
305



304



301



308



310



307

包含層・
その他の遺構

1 : 4



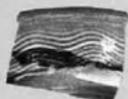
309



311



316



312



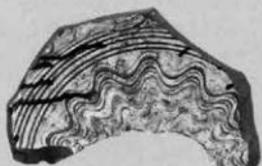
317



314



318



313



315



324



326



325



329



328



331



327



332



包含層・
その他の遺構

1 : 4



321



319



330



322



320

包含層・
その他の遺構



333



323



334



336



337



340



348



339



338



341



342



345



344



343



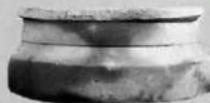
346



350



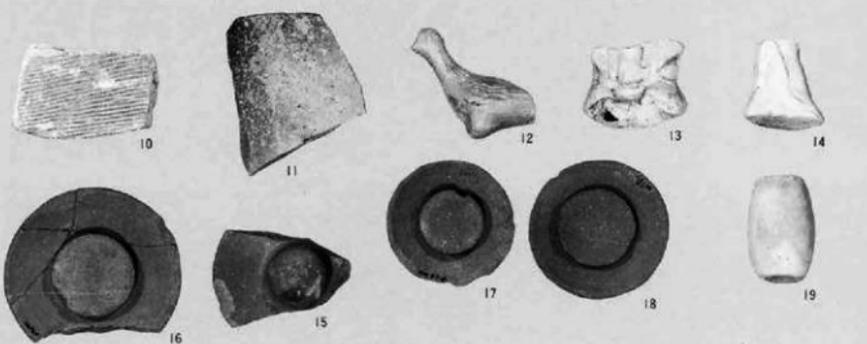
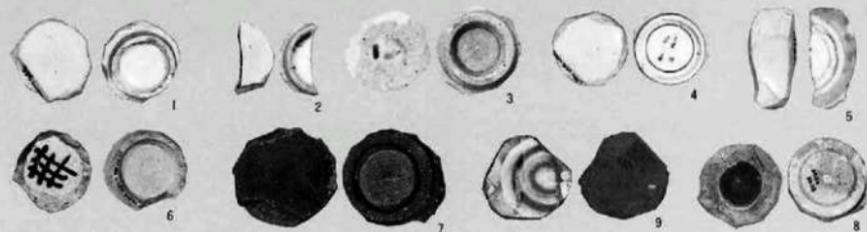
349



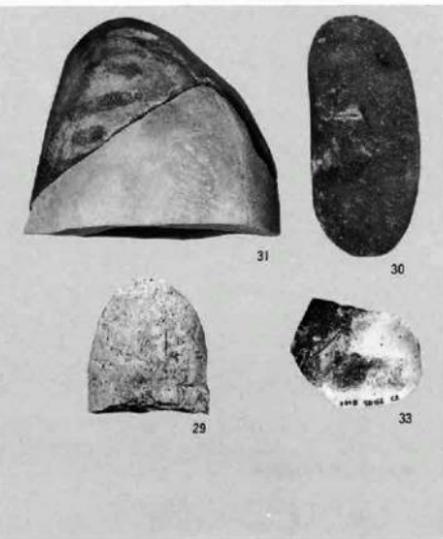
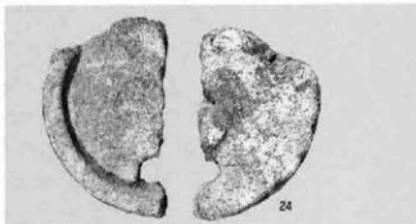
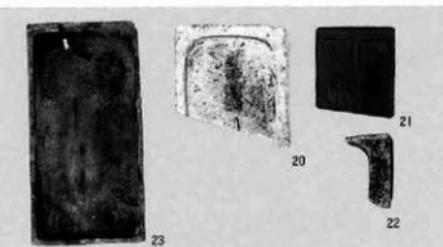
347

24 1 : 6

その他 1 : 3



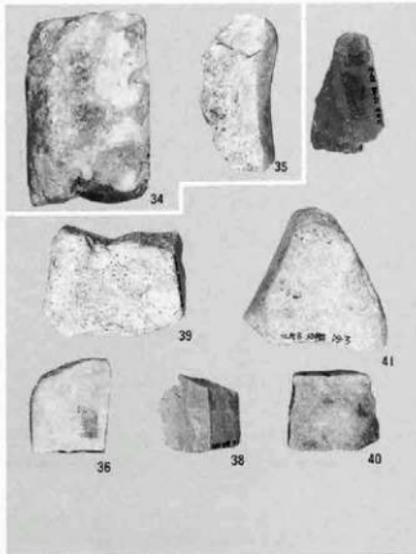
土・陶磁製品
(1~19)



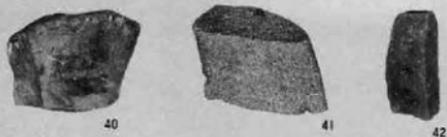
SD166
(29~33)

SK20
(34・35)

SE198
(36~39)



1 : 3



SD15
(40~42)

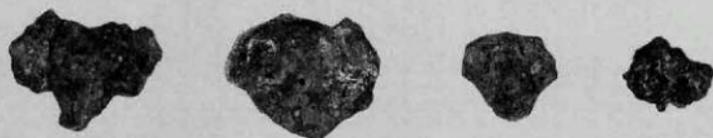
SK112
(43・44)



包含層・
その他の遺構
(45~56)

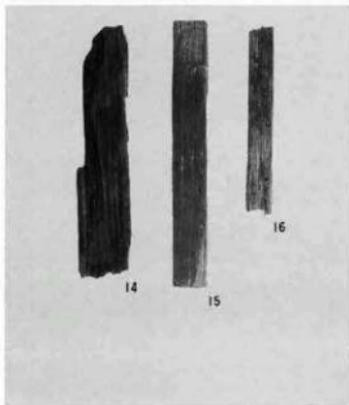
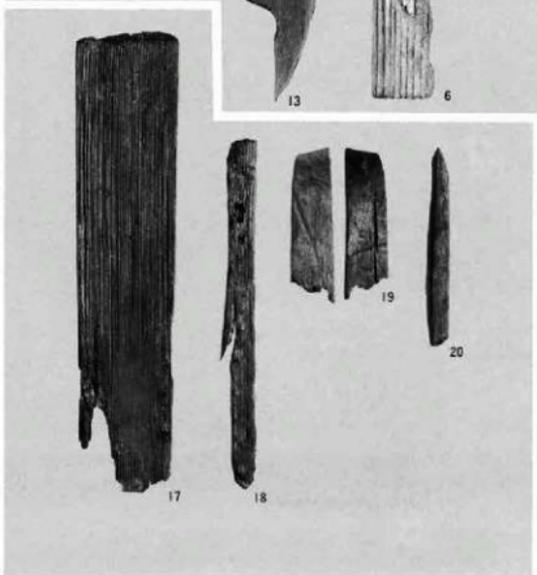


軽石素材
の研磨具
焼磯・フィゴ羽口



鉄滓

1 : 3

SD166
(1~13)SE25
(14~16)SE47
(17~20)

1 : 3



21



22



24



25



23



26

SK69
(21~26)



27



28



28



28



32



34



33



29



31



30

SE80
(27~34)

1 : 3



35



36



37



38



39



40



42



44



46



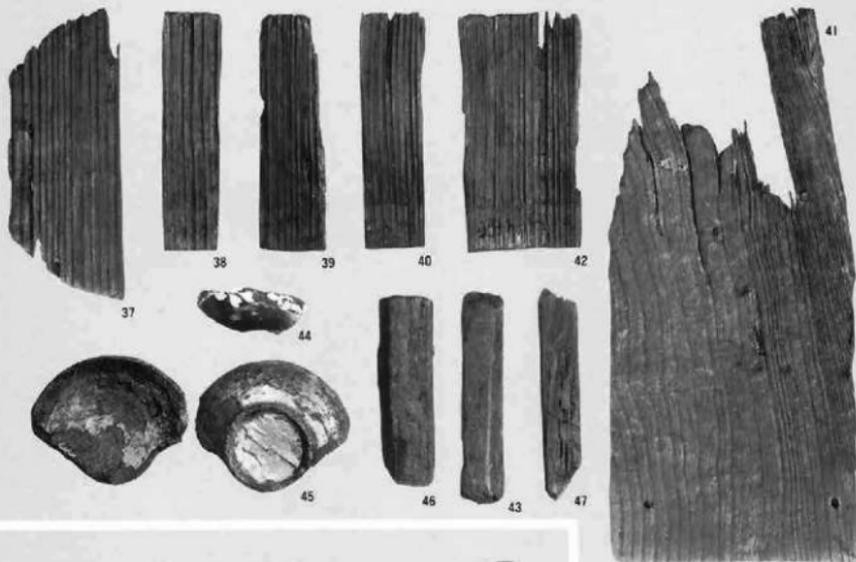
43



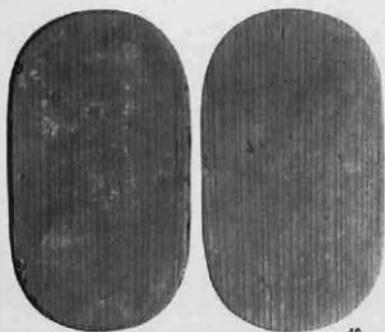
47



45



41

SE198
(35-47)

48

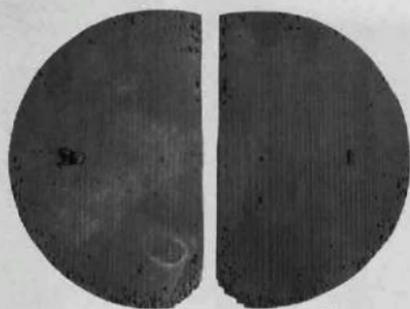


49



50

その他の遺構
(48-50)



51



53



52



55



54



57



56



1 : 8



58



59

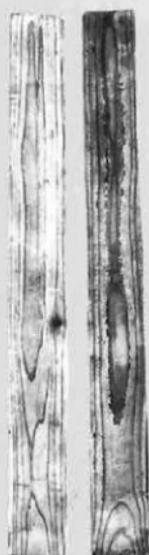


60



61

SE90上段
(59~62)



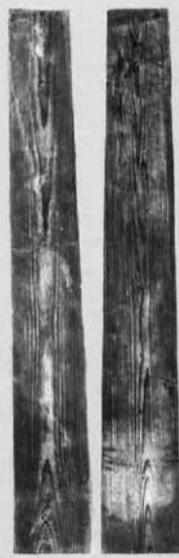
62



63

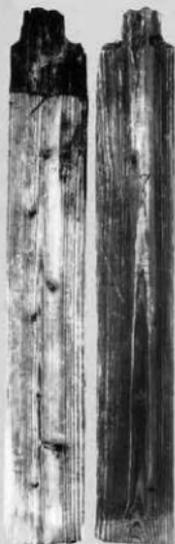


64



65

SE90下段
(63~66)



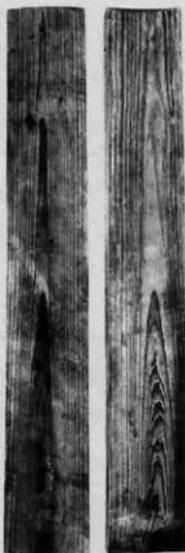
66

67



68

SE45上段
(67~69)



69

70



71

SE45下段
(70~72)

72~75 1:8

76~79 1:12



72

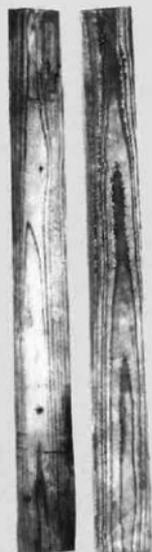
73



76



78



74

75



77



79

SE45下段
(73~76)

SE45井戸側
(76~79)

報告書抄録

書名	江内遺跡							
副書名	磐越自動車道関係報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編著者名	石山精哉・春日真実・佐藤恒・藤田豊明							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46 TEL025-223-5642							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
江内遺跡	新潟県新潟市大字川口字江内	15-207	70	37度 49分 10秒	139度 08分 20秒	第一次調査 19911205~19911206 19920113 第二次調査 19920322~19920721	3,400㎡	道路(磐越自動車道のいわき~新潟線)の建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
江内遺跡	集落	中世 (14世紀)	掘立柱建物 溝 土坑	1棟 2条 2基	青磁・珠洲・安曇系陶器土師器・木製品・砥石・フイゴ羽口・鉄滓			
		近世 (17~19世紀)	掘立柱建物 井戸 土坑	4棟 27基 46基 22条	土師器・瓦器・陶器・磁器・土製品・陶磁製品・石製品・木製品			

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第76集

磐越自動車道関係報告書

え うち
江内遺跡

平成8年3月25日印刷 編集・発行 新潟県教育委員会
〒950 新潟市新光町4-1
平成8年3月31日発行 電話 025(285)5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒950 新潟市一番堀通町5923-46
電話 025(223)5642
FAX 025(228)1762

印刷・製本 北越印刷株式会社
〒940 長岡市福住1丁目6-27
電話 0258(33)0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第76集 『江内遺跡』 正誤表

頁	位置	源	正
5 p		第3図	第4図
抄録	北緯	37度49分10秒	37度49分00秒
抄録	東経	139度08分20秒	139度07分21秒